大分大学医学部看護学科
30周年記念誌

Advance to Innovation

前進から革新へ

30 YEARS ANNIVERSARY

大分大学医学部看護学科
30周年記念誌

Advance to Innovation

前進から革新へ

30 YEARS ANNIVERSARY

大分大学医学部
大分大学大学院医学系研究科
Oita University Faculty of Medicine
Oita University Graduate School of Medicine

看護学科記念樹
ギョイコウ
御衣黄
看護学科校舎棟竣功記念
平成9年9月5日 植樹

看護学科30周年記念看護フォーラムに向けた準備

コアメンバー募集！各学年から多くの学生が集まりました

フォーラムに向けカウントダウンを開始

学生コアメンバーと教員とのランチミーティング
看護学科の魅力をどう発信するか、考えました

学生による魅力発信ポスター作製の様子

魅力発信ポスターを掲示するボード10個、
きれいに磨いてイチから組み立てました

重労働のあとは学科長からアイスクリームの差し入れ
フォーラムまであと51日！

フォーラムまであと2日！

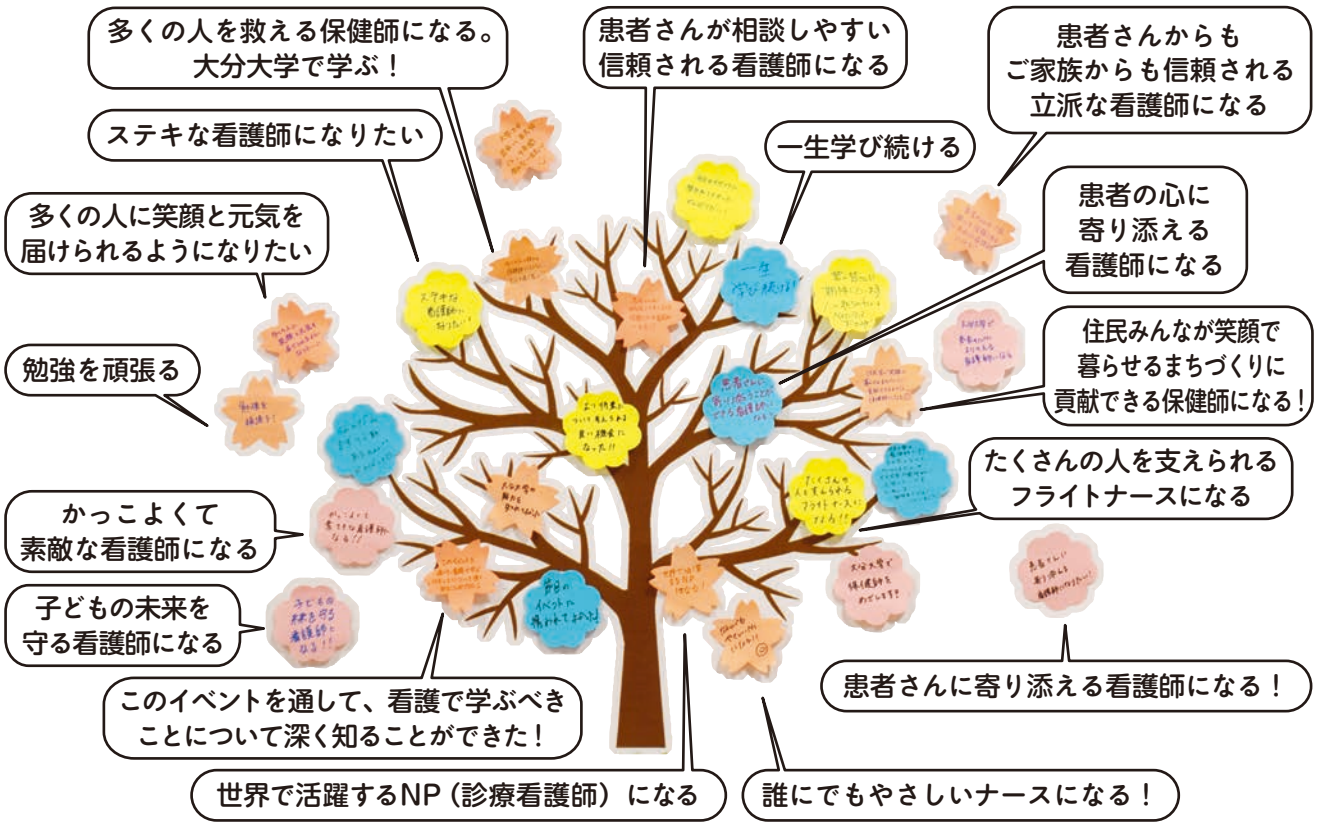
コアメンバー、ボランティア学生、教員みんなで会場設営を行いました

当日

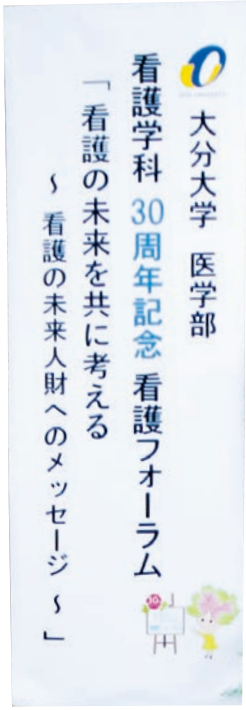
配付したノベルティ

学生がつくった魅力発信ポスターの展示場は多くの中高生でにぎわいました

参加者・学生から　未来へ向けたメッセージ



記念式典



三重野 英子 看護学科長　講話「看護学を学ぶということ」

原田 千鶴 教授

末弘 理恵 教授

杉尾 賢二 総括理事・副学長

猪股 雅史 医学部長

大戸 朋子 大分県看護協会長

シンポジウム　各地で活躍する5名の卒業生から「看護の未来人財へのメッセージ」が伝えられました

畑中 明子さん（1期生）

吉原 喬樹さん（10期生）

森脇 睦子さん（1期生）

シンポジウムの様子

豊﨑 佳奈子さん（17期生）

堀　友美さん（16期生）

コーディネーター　脇　幸子教授

展示コーナー

OITA UNIVERSITY
大分大学医学部看護学科 あゆみ
社会変動　デジタル革命の始まり⇒グローバル化とIT進展⇒災害・感染症・DX社会
51 昭和年 1976 大分医科大学 開学
56年 '81 医学部附属病院 開院
59年 '84 大学院医学研究科 設置
6 平成年 '94 看護学科 設置
10年 '98 大学院医学系研究科改称 看護学専攻設置
15年 2003 大分大学との統合
16年 '04 看護学科10周年
21年 '09 がん看護専門看護師教育課程の開始
24年 '12 看護学科キャラクタ「御衣黄ちゃん」誕生
26年 '14 看護学科20周年
29年 '18 ダイバーシティ推進本部設置（男女共同参画推進室を改組）
30年 '19 医学部附属病院看護職キャリア開発支援センター設置 減災・復興デザイン教育研究センター設置
2 令和年 '20 急性期看護専門看護師・老人看護専門看護師教育課程の開始
3年 '21 グローカル感染症研究センター設置
4年 '22 カリキュラムVer. 6の適用
5年 '23 医学部先進医療科学科設置
6年 '24 災害マネジメント総合支援センター設置 看護学科30周年記念事業の実施
基盤作り ⇒ 発展とつながり ⇒ 革新と拡大
災害・感染症など社会の激動に適応すべく、さらなるDX社会へ
教育：DX活用：Zoom, VR, シミュレータ教育
研究・地域貢献：
令和3年度～「自然災害時の避難所における健康危機管理」健康管理チーム；自然災害に発生時における地域住民の災害時健康危機管理向上のための準備教育プログラムの開発
⇒2階に展示

OITA UNIVERSITY
4年間のカリキュラムの特徴
基礎教育科目
専門基礎科目
4年生に向けて基盤つくり！
看護学科
医学部
スクールバス
旦野原キャンパス
附属病院
附属病院と隣接した挟間キャンパス
高度な先進医療に触れながら学ぶ
災害看護
他職種連携を学ぶ
卒業
ドクターヘリ
看護研究
入学
早期からの実習
1年生8月
基礎看護学実習Ⅰ
2年生２月
基礎看護学実習Ⅱ
3年生11月～2月, 4年生5～7月
領域別看護学実習
成人（慢性・終末期、急性）
母性, 小児, 精神, 地域, 老年,　在宅
９月
看護学総合実習
看護研究
専門教科目
4年生にかけて専門教科目が増えます！
１年生
２年生
３年生
４年生

Advance to Innovation

前進から革新へ

目次

ご挨拶

看護学科長　三重野英子　12

Ⅰ．看護学科30周年に寄せて

大分大学長　北野　正剛　14
大分大学医学部長　猪股　雅史　15
第９代看護学科長　原田　千鶴　16
大分大学医学部附属病院看護部長　冨永志津代　17
大分大学医学部看護学科同窓会桜樹会会長　廣田　美咲　18

Ⅱ．30周年特集

第１章　Advance

１．看護学科のあゆみ　20
　1）看護学科の変遷　20
　2）カリキュラムの変遷　22
　3）学生の動向　26
　4）現教員の主な業績　28
２．卒業生メッセージ
　１期生（平成９年度卒）　坂梨　左織　村田恵理子　32
　２期生（平成10年度卒）　菊池　愛　村田　美雪　33
　３期生（平成11年度卒）　古賀　雄二　藤本　和之　34
　４期生（平成12年度卒）　藤原ゆかり　山口　真弓　35
　５期生（平成13年度卒）　大下　真世　福田　直子　36
　６期生（平成14年度卒）　秋吉　和恵　竹下佳代子　37
　７期生（平成15年度卒）　井上加奈子　田淵　啓二　38
　８期生（平成16年度卒）　近藤あゆみ　鈴木　徳洋　39
　９期生（平成17年度卒）　佐藤　千鶴　谷山　尚子　40
　10期生（平成18年度卒）　工藤　美佳　生野　祐美　41
　11期生（平成19年度卒）　香川　友紀　三股阿沙美　42
　12期生（平成20年度卒）　牛嶋　由依　小野里晴香　43
　13期生（平成21年度卒）　井澤由季奈　髙橋　鉄平　44
　14期生（平成22年度卒）　塚谷　延枝　松村みゆき　45
　15期生（平成23年度卒）　大垣　香菜　佐野　真樹　46
　16期生（平成24年度卒）　仙波　亘策　芋迫英里香　47
　17期生（平成25年度卒）　井川　祥子　佐藤昂太朗　48
　18期生（平成26年度卒）　尾﨑俊太郎　本　香織　49
　19期生（平成27年度卒）　池田　眞理　坂本　真優　50

20期生（平成28年度卒）　小田真里佳　松尾　和馬　51
21期生（平成29年度卒）　川路　梨紗　山本　和　52
22期生（平成30年度卒）　園田真梨香　川西　優花　53
23期生（令和元年度卒）　横地　美月　宮﨑　理紗　54
24期生（令和２年度卒）　末永名央人　行部　千文　55
25期生（令和３年度卒）　後藤　彩夏　中野　真帆　56
26期生（令和４年度卒）　片岡　桃音　米田　倖英　57
27期生（令和５年度卒）　濵井　優月　間越　みき　58

第２章　Innovation

１．看護学科の組織・教育・研究　60
２．在学生メッセージ
１年生　長迫　沙弥　原　理紗　62
２年生　今永　絢　河上　月　63
３年生　石川　和樹　元田　千晴　64
４年生　野上　恵理　山田　睦就　65
３．看護学科の挑戦　66
1）各講座・領域の紹介
・基盤看護学講座　原田　千鶴　66
健康科学領域　加隈　哲也　67
基礎看護学領域　原田　千鶴　清村　紀子　佐藤祐貴子　野上龍太郎　68
精神看護学領域　岩本　祐一　河野　修　69
地域看護学領域　後藤　奈穂　金﨑　理子　簣河原靖子　70
・実践看護学講座　末弘　理恵　71
母性看護学領域　猪俣　理恵　小柳　麻央　72
小児看護学領域　幸松美智子　江藤　千晴　73
成人看護学領域　脇　幸子　末弘　理恵　井上　亮　大野　夏稀　佐藤昂太朗　74
老年看護学領域　三重野英子　正木　孝幸　小野　光美　阿部世史美　75
2）学科・大学院の方向性　76
４．30周年記念看護フォーラム　78
編集後記　82

ご挨拶

大分大学医学部看護学科30周年
これまでとこれから

看護学科長　三重野英子

看護学科は、2024年で30周年を迎えました。この間、学士課程卒業生1,763人、修士課程修了者173人を輩出し、それぞれ国内外のさまざまな看護現場や分野で活躍しています。このように多くの学生たちを育んでくださった行政機関や医療・福祉等施設・事業所、そして地域の方々、患者・家族の皆様に心より感謝申し上げます。

1994年、大分医科大学医学部に看護学科が併設されました。看護学科校舎棟がまだ建設されていない状況でしたが、国立大学として早い時期に看護学士課程教育をスタートさせた強い使命感と情熱を教員と学生は共有していました。私は、開設3年目に着任しましたが、3年生になっていた1期生の開拓者精神に満ち溢れたエネルギーに圧倒されたことを今でも鮮明に覚えています。

看護学科は開設以来、一貫して、看護師教育と保健師教育の共通基盤を統合した看護学士課程教育により、地域のあらゆる人々の健康生活を支援する看護専門職を養成することを使命としてきました。30年の間、変化する社会ニーズに対応する看護学教育を展開するため教育課程の変更を6回行うとともに、臨地実習での体験学習を重視し、学生が看護の現場で対象にかかわり、人間関係を形成しながら自分が行った看護を客体視し意味づけることができるよう指導してきました。こうした教育の成果は、2024年9月29日に開催した看護学科30周年記念看護フォーラムでのシンポジウム「看護の未来人財へのメッセージ」に登壇した5人の卒業生が証明してくれました。それぞれが自身の使命と役割を自覚し、看護の本質を具現化した看護活動を語る姿は頼もしく、看護学科のさらなる発展にむけて大きなエールをいただいた思いがしました。

看護学科は30周年を節目に改革の時を迎えています。大分大学は、2022年1月に「大分大学ビジョン2040～次世代につなぐ、そして未来を創る～（2022年1月）」を策定し、未来にむけてアカデミアとして果たすべき役割を公表しました。本学のビジョンに則り、看護学科は今後、改革の歩みを進めていきます。教育については、2025年度に日本看護学教育評価機構JABNEによる看護学教育分野別評価を受審する予定であり、現在、教員全員体制で自己点検・評価を行い、洗い出された改善事項に取り組んでいます。第三者評価を受けることで、看護学科の特長である統合教育や看護探究力を育む教育が保証され、発展への後押しになると考えています。研究は、学際性に富み、社会実装につながる分野融合型の研究活動を進めるとともに、全学の大学院改革に伴い他学部や附属病院との協働により修士課程教育を再構築していきます。そして、共生社会の実現、災害対策、DX、プラネタリーヘルス等、社会課題に応じた教育・研究を効率的、効果的に推進するために、看護学科の教育研究組織を再編します。基盤看護学講座は基礎看護学領域と健康看護学領域（健康科学・精神看護学・地域看護学を統合）、実践看護学講座は臨床実践看護学領域（成人看護学）、生涯発達看護学領域（母性看護学・小児看護学・老年看護学を統合）で構成される見込みです。8領域から4領域へと新たな学問領域による教員組織体制を組むことで、新たな教育プログラムや研究プロジェクトの創出が期待されます。従来の古典的な学問領域では展開し難かったイノベーションを生み出したいと思っています。看護学科は、これからも学生とともに、地域とともに進化し続けていきます。

看護学科は、さまざまな方々のご理解とご支援のもと、30年間の歴史と実績を重ねることができました。あらためて深く感謝申し上げるとともに、これからの発展にむけてご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

Ⅰ. 看護学科

30周年に寄せて

看護学科
30周年に寄せて

大分大学長　**北野　正剛**

医学部看護学科創立30周年に当たり、ご挨拶を申し上げます。

まずは、看護学科の創設から今日まで、温かいご支援・ご協力をいただきました行政、医療機関を始めとする関係機関、それから地域の皆様に心から御礼申し上げます。

また、30年の長きにわたり、日々、看護学教育・研究に邁進し、30年の歴史と伝統を築き上げた看護学科の教職員に改めて感謝の意を表すとともに誇りに思います。

看護学科は、医療の高度化・専門化、また、人々の生活・価値観の多様化などの社会的背景の中、時代の変化に対応できる能力と創造性･感性を備え､看護実践､教育､管理と研究分野においてリーダーシップを発揮し得る基礎的能力の育成に重点を置いた看護学士課程教育を行うことを目的に、平成6年（1994年）4月、旧大分医科大学に医学科に次ぐ2番目の学科として設置されました。当時、4年制の看護系大学は大分県では初めてで、全国的にも数は少なく、関係の皆様の大きな期待を背負い、看護学科がスタートしました。

平成9年（1997年）9月に、看護学科棟が竣工し、教育設備等の充実とともに、翌年4月には、大学院医学系研究科修士課程看護学専攻を設置し、高度専門職業人や教育研究者を目指す学生の教育環境を整備しました。

その後、平成15年（2003年）の旧大分大学との統合、平成16年（2004年）の国立大学法人化を経て、現在に至るまでの30年間で1,700名を超える卒業生を社会に輩出しました。彼らは、大分から日本全国、海外に至るまで、様々な保健医療・教育等の場でグローカルに活躍しており、国立大学の看護学科として、その役割を十分に果たしてきたと自負しています。

一方で平成 20 年（2008 年）に中央教育審議会が「学士課程教育の構築に向けて」を答申し、大学教育の質保証の重要性を示したことを契機に、文部科学省では、平成23年（2011年）から、有識者による「大学における看護系人材の在り方に関する検討会」が設置され、次世代の看護系人材を養成するために充実・強化すべき事項について検討が行われました。平成29年（2017年）には､「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が提示され、その中で、日本の高齢者人口がピークを迎える2040年に向けて、看護学教育に求められる人材像について､「時代の変化に対応して自ら課題を設定し、論理的思考力、グローバルなコミュニケーション等によって、新たな価値やビジョンを創造し、積極的に社会を改善していく資質・能力を有する人材である」と明記されています。また、同年に日本学術会議は「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準:看護学分野」を報告し、看護学を「自然科学と人間科学の双方の要素を持ち、健康に関連して人々が示す反応の意味を探索し、人々の生活を基盤として健康の維持増進、疾病予防、疾病回復への専門的援助を探究する学問である。」と定義しています。

本年12月には看護学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂版が提示されるときいています。2040年の社会を見据え、専門性の高い看護実践ができる人材養成にむけた看護学教育の次なる展開が期待されます。このように、社会が求める看護系人材、看護学教育、看護学研究は、時代とともに変遷しています。

これからも、大分県における国立大学医学部の看護学科として、果たすべき役割、未来の看護学教育のあるべき姿を強く意識し、より質の高い教育・研究、地域の保健医療福祉への貢献に尽力いただくとともに、時代の要請にこたえ、しなやかに進化･深化し続ける看護学科であることを期待しています。

看護学科の開設30周年を祝して

大分大学医学部長　猪股　雅史

大分大学医学部看護学科の開設30周年、誠におめでとうございます。

三重野英子学科長をはじめ、これまで看護学科の発展にご尽力された歴代の学科長および教職員の皆様、廣田美咲会長をはじめ桜樹会の皆様に、心より敬意を表したいと思います。また、北野正剛学長をはじめ大学本部の皆様、三股病院長および冨永看護部長をはじめ医学部附属病院の職員の方々の温かいご支援に対して、心より感謝申し上げます。大分県福祉保健部をはじめ行政機関・自治体、県内の大学をはじめ教育研究機関、大分県看護協会、医療・保健機関・介護施設をはじめ地域の関係者の皆様方の親身なご支援に、深く御礼を申し述べたいと思います。

大分大学医学部の重要なミッションは“質の高い医療人の育成”です。これまで看護学科は、医学科や先進医療科学科とともに、最前線の医療に触れることのできる医学部附属病院での実習を活かし、保健師と看護師の双方の資格を取得した多様性に富む人材を輩出してきました。開設以来、県内外はもちろん海外も含めて、1,700名の人材を輩出し、170名を超える研究者や教員を養成し、大分県内外の医療・保健・福祉への幅広い貢献は、すばらしい軌跡であり、その育成された人財は未来への大きな財産だと考えています。

先日、9月29日に開催された30周年記念看護フォーラム「看護の未来を共に考える」において、専門看護師、行政保健師、医療研究者、海外活動家、起業家として活躍中の卒業生によるすばらしいシンポジウムは、まさに看護学科がこれまで取り組んできた30年の集大成であり、次の30年に向けた「看護の未来人財へのメッセージ」と受け止めました。今後は少子高齢化など社会が抱える課題に向き合い、地域や国際社会とともに歩む医学部看護学科としてのさらなる活躍に期待を寄せています。「温故創新 -Next 30 years-」の精神で、“変えるべきこと”と“守るべきこと”をしっかり見据えながら、看護学科の皆様のさらなる成長を心より応援しています。

～VUCA時代におけるインクルーシブな人財育成を目指して～

第９代看護学科長（2018年6月～2023年3月）
原田　千鶴

大分大学医学部看護学科が設立30周年を迎えることができました。この節目を迎えられたのは、地域や社会の皆さま、卒業生、教職員、そして学生の皆さんのご支援によるものです。心より感謝申し上げます。私は、穴井孝信教授、杉田聡教授の後を引き継ぎ、2018年6月から2023年3月まで学科長を務めさせていただきました。この間、社会の大きな変化とともに看護学科はさまざまな課題に直面しました。それらを乗り越えた経験は看護学科の成長の証であり、また、未来への希望と確信を与えるものでした。

看護学科の近年の歩みを振り返ると、いくつかの転換点があります。2017年には、教育環境の改善が求められる事案が発生しました。この教訓をもとに2018年度には、多様性研修や相談窓口の整備を進め、学生や教職員が安心して学び働ける環境づくりに注力しました。この経験は、学科全体の組織文化を見直し、多様性を尊重する学びの場の構築につながりつつあります。

2020年には新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックが発生し、臨地実習の中止や対面授業の制限といった大きな困難に直面しました。看護学科ではオンライン授業やシミュレーション教育を迅速に導入し、「学びを止めない」という共通の信念のもと、教職員と学生が一丸となり対応しました。この経験は、看護教育の柔軟性とICTでの教育の可能性を広げる契機となりました。

2022年度には「統合カリキュラムVer.6」を改正しました。看護師保健師教育の統合を深めるとともに、多文化共生社会や変化する医療ニーズに対応できる人財を育成することを今後も継続して目指します。

また、研究活動においても、地域や現場に役立つテーマに取り組んでいます。災害時の健康管理、在宅療養支援、認知症患者の生活支援、ACP（Advance Care Planning）といった課題に関する研究は、地域社会や看護の現場での実践に結びつく成果の創出をめざし取り組んでいます。

これら課題からの学びや研究成果を基盤に、看護学科はさらなる発展を目指します。多様性を尊重した教育環境を整え、地域医療とグローバルな視点を両立させた看護人財を育成すること、そして地球規模の課題に対応する研究に挑戦していくことが目標です。

これらの課題を仲間や学生と共に乗り越えた経験は、学科長であった私自身にとっても大きな学びとなりました。これからも看護学科が未来を切り拓き、地域と世界の健康を支える存在であり続けることを願っています。この30周年の節目に感謝を込めて、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

未来につなげる看護を卒業生とともに

大分大学医学部附属病院 看護部長
冨永志津代

大分大学医学部看護学科開設30周年を迎え、実習病院の看護部を代表して、心よりお祝い申し上げます。

2024年９月時点で、看護学科卒業生228名、医学系研究科修士課程看護学専攻修了生14名が、大分大学医学部附属病院で就業しており、看護部の３割を超える人数となっています。そのうち、副看護部長２名、看護師長３名、副看護師長19名が看護管理の役割を担っています。さらに、５名の認定看護師と７名の専門看護師が、看護の質向上のための組織的な活動を展開し、医学部の教育においても講義や実習指導で活躍しています。看護学科開設時から、臨床実習をとおしてともに学んだ卒業生の皆さまは、本院看護部の根幹を成すまでに成長したことを実感し、30年の重みを感じているところです。９月末に開催された30周年記念フォーラムのシンポジウムを拝聴し、看護の活躍の場の多様性を改めて認識しました。シンポジストの方々の語りには、看護の魅力がちりばめられ、いきいきと道を切り開いてきた雄姿に、看護を未来へつなぐ力強さを感じ、大変感銘を受けました。

近年、社会情勢の急激な変化に伴い、医療の現場には様々な変革が求められています。大学病院には、高度で先進的な医療を提供する役割があり、技術の進歩に伴い、看護に求められる役割も高度化・複雑化しています。看護職として社会の期待に応え、役割発揮するためには、自律的に学び続ける生涯学習が求められています。知識や技術をブラッシュアップするための多様な学びの場が選択できる現在、母校で学び直す選択をする職員が増えてほしいと願っています。看護部は、30周年を迎えた看護学科との連携を今まで以上に強化しています。看護職員の生涯学習の発展のために、教員の皆さまの支援をいただきつつ、学生や卒業生とともに新たな看護の学びを創造するチャレンジをしています。

医療の現場では、多様な専門職から構成される医療チームが協働して、専門性の高い医療を提供しています。看護はどの医療チームにも欠かせない専門職であり、職種を繋ぐ調整力を発揮し、チームメンバーから信頼される存在です。また、24時間365日患者の傍にいる看護職への期待は大きく、医療安全管理や感染管理、災害対応など、看護職のマネジメント力の高さも認識されています。その期待に応え、不確実な社会情勢の中、保健、医療、福祉の現場で、看護を必要とする人々のニーズを把握し、看護の新たな可能性を見出し、提供し続けることが重要です。当院看護部は、これからも在校生や卒業生の皆さまとともに学ぶことで、看護を未来に繋ぐ役割を発揮できると確信しています。

最後に、看護学科の今後の発展と、卒業生の皆さまの更なるご活躍をお祈りします。

看護学科創立30周年に寄せて、学生時代の思い出や現在

大分大学医学部看護学科同窓会 桜樹会 会長
廣田　美咲

平素より同窓会活動にご理解・ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。2022年度より会長に就任いたしました廣田美咲です。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、看護学科創立30周年おめでとうございます。自分が学生だった頃のことがすぐに思い出せるのに、もうそんなに月日が経過したのかと、驚きを隠せません。

私は12期生として看護学科に入学し、とても賑やかで愉快な仲間たちと共に、大学生活を過ごしました。当時は学業と同時にアルバイトにも大いに励み、長期休暇の度に旅行に出かけ、とにかくオンとオフをきっちり分けた過ごし方をしていました。この習慣は現在も続いており、私のライフワークバランスの大きな支えになっています。

学生生活で特に思い出されるのは、実習と国家試験です。実習では受け持ちの患者さんにも恵まれました。患者さんが、ご自身や疾患のことについてよくお話してくださり、患者さんと関わることから、看護について多くの学びを得ることができました。患者さんとの関わりで得た情報をもとに、アセスメントし、看護計画を立案しますが、当時は自分のアセスメント力のなさにげんなりしたものです。しかし、仲間に支えられ乗り越えることができました。同時に、あの学生生活があったからこそ、今の自分の看護につながっていると実感しています。

また、国家試験期間中は、授業のない時期もずっと大学で勉強に明け暮れました。朝から晩まで仲間と問題を出しあったり、覚えやすい語呂合わせを考えたりしながら過ごしました。今でも当時の仲間と会えば、あの頃は大変だったけど楽しかったねと、笑い合えるいい思い出です。

卒業後は、現在も所属している大分大学医学部附属病院に就職しました。病棟や外来を経験しながら、結婚・出産を経て、現在は３人の子供を育てながらフルタイム勤務をしています。毎日があっという間に過ぎていますが、健康な体で看護を行えることに大きな喜びを感じると共に、支えてくれる同僚や家族に感謝の気持ちでいっぱいです。今後はさらに看護の学びを深めるため、いつかは大学院へ進学したいと考えています。

来年度、桜樹会は同窓会創立25周年を迎えます。少しずつですが、記念事業に向けて計画中です。懐かしい仲間と久しぶりに会って語り合い、同窓生が各地で頑張っている話を聞いて、参加した方々の仕事や生活の励みになるような会にしたいと考えています。同窓生の皆様には奮って参加していただけるとありがたいです。

また、広報活動として、今まで郵送で配布させていただいていた「桜樹会だより」をweb移行し、ビキタという会員サイトにて配信をしています。最近、桜樹会だよりが届かなくなったけど、ビキタへの登録もできていないという方、同窓生の皆様は会員登録が無料で行えますので、ぜひ登録をお願いします。

最後になりますが、今後とも本会の活動にご理解とご協力をお願いいたしますとともに、看護学科のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

【桜樹会ホームページ】
https://www.bikita.jp/class/index.php?cl=48d156&cache=1629702464

Ⅱ. 30周年特集

第1章 Advance

１．看護学科のあゆみ

（2015年～2024年）と今後の発展

１）看護学科の変遷

■大学および看護学科組織の変化と課題

2015年から2024年の10年間、大分大学医学部看護学科は、社会的な変化や課題に直面しつつも、それに対峙・対応して発展を続けてきました。この10年間、運営交付金削減による財政状況の悪化や人員不足が深刻化し、看護学科を含む医学部全体で効率化や改革が求められる時期でした。

先ず、2017年に発生したハラスメント事案では、教育・研究現場の組織管理の重要性が改めて問われました。この事案を契機に、看護学科は組織環境の改善に取り組み、学生と教員の相互尊重を基盤とした健全な教育環境の再構築を目指しました。現在も信頼関係の回復に向けた努力を続けています。

次いで発生した2020年からのCOVID-19流行は、医療現場の逼迫とともに、看護教育にも大きな影響を与えましたが、看護学科では、創意工夫を凝らしながらピンチをチャンスととらえ、教育の質を維持してきました。

■看護教育の主な変化と成果

１．カリキュラム改革と教育の進化

2022年度には、保健師助産師看護師学校養成所指定規則および看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）に基づき、カリキュラムの改正を行いました。看護師と保健師を統合した教育方針を基盤に、実践的かつ包括的な看護教育を提供し、高度な専門職の育成を進めています。

２．COVID-19流行期の対応とICT化

COVID-19の流行下では、オンライン授業やシミュレーション教育が迅速に導入され、対面授業が制限される中でも教育の質を維持するための取り組みが行われました。臨地実習では感染予防を徹底しながら実習を継続し、学生が学びを止めることなく看護技術を習得できる環境が整備されました。また、代替手段としてシミュレーターや模擬患者を活用し、安全な環境で看護技術や患者対応スキルを磨く機会を提供しました。

これらの取り組みの成果は、保健師・看護師国家試験における高い合格率に表れていると考えます。また、COVID-19流行期に医療現場で奮闘する卒業生たちの姿を知ることで看護学科が30年にわたって積み重ねてきた教育の力を改めて実感しました。

３．入試改革による地域貢献の強化

2021年度より学校推薦型選抜の募集人員を増加させるとともに、前期・後期の一般選抜試験では、双方に個別面接を導入し、これから先の看護を担う意欲のある学生を選抜する体制を整えました。

４．専門看護師教育の充実

大学院では、がん看護（2017年度更新）、クリティカルケア看護（2019年度新設）、老人看護（2020

年度新設）の専門看護師（CNS）教育課程を整備し、高度な実践力と研究的視点を兼ね備えた専門職を育成しています。

5．グローバル化の推進

2007年に開始したフィリピンの国立感染症病院での研修に加え、2014年からサントトーマス大学での臨地実習を拡充しました。一時期COVID-19流行のために中断していたこの取り組みは2023年度より再開され、再び国際的な視点で看護を学ぶ機会を学生に提供しています。

6．災害看護教育の発展

災害の頻発化を背景に、災害看護教育を強化し、地域の災害拠点病院や自治体との連携を進めました。学生が災害対応能力を身につける実践的な機会を増加させ、2024年度には災害マネジメント総合支援センターの設置が予定され、さらなる教育と研究の推進が期待されています。

■今後の発展（大分大学ビジョン2040を踏まえて）

1．共生社会の実現を目指す教育と研究

地域医療や災害対応、プラネタリーヘルスといった地球規模の課題に対応し、地域社会に根差しながら世界水準の教育と研究を目指します。

2．学際的な教育体制の構築

専門領域を越えた学際的な教育体制を整備し、附属病院や他学部、地域社会と連携して包括的な教育と研究を推進します。

3．大学院教育の充実

新たな修士課程教育を通じて、高度な実践力と研究力を持つ看護専門職を育成します。特に、現場を改革するリーダーシップを持つ人材の育成に注力します。

4．地域社会との共生化

地域住民と学生がともに成長できる仕組みを構築し、地域医療や健康増進に貢献する教育と研究を展開します。

■おわりに

2015年から2024年の看護学科の歩みは、多くの課題に直面しつつも、教育、研究、地域貢献の分野で成果を上げた10年間でした。特に、ハラスメント事案への対応やCOVID-19流行下での教育改革は、看護学科の新たな成長の基盤となりました。2024年の30周年を契機に、看護学科は地域社会とともに進化し、次世代の看護を支える教育機関としてさらなる発展を目指します。

２）カリキュラムの変遷

■教育活動のあゆみ

～社会の激動に対応した教育の質保証～

2008（平成20）年に中央教育審議会（以下、中教審）では、学士課程教育に関して、学位授与方針（DP）、教育課程方針（CP）、入学者受け入れの方針（AP）の明確化、分野別コア・カリキュラム作成の促進が提言されました。さらに、2013（平成25）年には文部科学省のミッションの再定義と指定規則改正により、大分大学医学部看護学科はVer. 4及びVer. 5の教育課程改訂を行い「看護師と保健師の統合教育と臨地実習を重視した教育」を目標に掲げました。

これらを受けて、社会のニーズの変化に対応した質の高い看護師育成のため、文部科学省は2016（平成28）年に「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」を設置し、2017（平成29）年10月に「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」を策定しました。また、日本学術会議では、2017（平成29）年に「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」を明示し、2018（平成30）年に中教審は持続可能な開発のための目標（SDGs）やSociety5.0などを掲げ未来に向けた人材像が求められました。

そして、2020（令和２）年からの新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックは、大学教育にオンライン授業やハイブリッド型教育の導入を促進し、教育の質保証が重視されました。DX（Digital Transformation）を活用した多彩で効果的な学修機会の提供が求められ、探究的活動や世界に新たな価値を生み出す人材育成が重要視されました。2022（令和４）年の教育未来創造会議での提言では、創造性教育を含むSTEAM教育（Science、Technology、Engineering、Arts、Mathematics）の強化と、文理横断による総合知の創出が求められました。本学でも、2023年４月に、自治体、企業や団体等と連携し、①大学生へのSTEAM教育の充実、②小中高校生へのSTEAM教育の実践・普及、③女子中高生の理系進路選択への支援に取り組み、入学者選抜改革も行うことで、初等中等高等教育一貫した理系人材の増加を図ることを目的とした新たなSTEAM教育推進センターが設置され、さらなる改革が期待されるところです。

このように、2015年から2024年の10年間は、DP・CP・APに基づき、教育方法の革新やパンデミックの影響、技術の進歩が複雑に絡み合った時代でした。主な教育活動の取り組みとして、「看護学科の教育課程の３方針の発展と定着に向けて」、「教育方法の革新」、「教育評価の拡充」、「教育課程の改正Ver. 6」の４つの活動について紹介します。

■看護学科の教育課程の３方針の発展と定着に向けて

平成29（2017）年度３月、日本看護系大学協議会は、教育水準の維持向上のため「臨地実習の参照基準」と「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を明示し、これを受けて看護学科ではFD活動を通して教育課程改正の準備に取りかかりました。さらに保健師助産師看護師の国家試験受験資格基準の第５次指定規則改正を踏まえて、2019（令和元）年、看護学科においてもDPの見直しから始めました。看護学科の教育目的は変わらず、DPは５項目を洗練させ、2040年に向けた社会変化の視点を見据えた看護専門職像としたもので、【DP1専門的知識と技術の活用】【DP2コミュニケーション能力】【DP3創造的問題解決力】【DP4社会的責務と倫理】【DP5地域発展・人類福祉への貢献】【DP6生涯学習力】【DP7豊かな看護観】の７つを策定しました。さらに、2012（平成24）年中央教育審議会は、学位授与の方針を明確にし、教員が各授業でどの能力を育成するかを認識することを必要としました。これを受けて本学ではシラバスに各科目の具体的な到達目標とDPの対応を明記する組織的取り組みが行われました。

表1　授業科目とDP対応表

区分		授業科目	開講時期	単位数	時間数	DP1 専門的知識と技術の活用	DP2 コミュニケーション能力	DP3 創造的問題解決力	DP4 社会的責務と倫理	DP5 地域発展・人類福祉への貢献	DP6 生涯学習力	DP7 豊かな看護観
	基礎看護学	看護学概論	1年通年	1	30	◎			○			○
		看護の対象論	1年通年	1	15	◎					○	○
		看護理論	3年後期	1	22	○					○	◎
		看護に共通する基本技術	1年後期	1	30	◎	○					○
		基礎看護学実習Ⅰ	1年前期	1	45	○	◎					○
		看護過程論	2年通年	2	44	○	○	◎				
		日常生活援助技術	2年前期	2	60	◎	○					○
		診療に伴う援助技術	2年後期	1	30	◎			○			○
		基礎看護学実習Ⅱ	2年後期	2	90	◎	○					○
	地域看護学	地域看護学概論	1年後期	1	15	◎			○	○		
		地域生活支援方法論Ⅰ	1年後期	1	15	◎					○	○
		地域生活支援方法論Ⅱ	2年前期	1	22	◎	○					○
		地域看護活動展開論	2年前期	1	22	◎				○		○
		地域看護システム論	2年後期	1	15	◎			○	○		
		地域看護管理論	2年後期	1	15	◎			○			○

■教育方法の革新

７つのDPを達成するためのCPとして≪教育課程の編成と教育内容≫、≪教育方法≫、≪学修成果の評価≫の３つの方針を策定し改善しました。特に≪教育方法≫では、2016(平成28)年からの第３期中期計画において「学生の能動的・主体的学修を促し、学習意欲向上や学生のキャリアパスを見据えた教育課程を担保するため、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業比率を80％以上に高める」ことを掲げ、教育方法をさらに意識して工夫し改革を続け、シラバスに明示して、学生とともに取り組んでいます。

加えて、新型コロナウイルス感染症のパンデミックは2020(令和２)年度から2021(令和３)年度にかけて看護学科の教育に影響を及ぼし、対面授業の中止が主体的学修や授業への意欲にも影響しました。一方で、「感染症医療人材養成事業」補正予算獲得や「令和４年度学長戦略経費教育改革推進プロジェクト」において補助金を獲得し、各実習室や演習室への電子黒板の設置、シミュレーション機器の充実、VR機材の導入などの環境整備を進めました。この結果、VRコンテンツを使用した教育やデジタル仮想のシミュレーション教育に取り組みはじめるなど、オンライン教育やリモートの活用、感染症対策のための特別なトレーニングなどフレキシブルな教育になり、革新の第一歩となりました。

■教育評価の拡充

2020年の中教審による「教学マネジメント指針」の取りまとめにより、大学全体の教育戦略や学修成果の可視化が求められるようになり、大分大学は2021年３月に教育マネジメント機構を設置しました。特に内部質保証としてPDCAサイクルの体制整備が重要視されました。看護学科では1994(平成６)年から教員自身による授業評価を実施し、1999(平成11)年度からは学科において組織的に取り組みをはじめ、その後の10年間を通して全学の教育マネジメント機構の内部質保証の動向と足並みをそろえて、組織的に体制を強化しました。具体的には、コンピテンシー基盤型教育を明確にし、2020(令和２)年度からDPと関連づけた教育評価の実施をはじめ、2022(令和４)年度から、学生がDPの到達度を省察するためにDPルーブリックを作成し、学修ポートフォリオを導入しました。今後は2025(令和７)年度から全学の教務システムの中でe-学修ポートフォリオが整備される予定です。

さらに、2019(令和元)年度に、看護学分野別評価を担う外部評価機構である日本看護学教育評価機構（JABNE）に入会しました。2025年度に受審予定であり、教育の質改善に取り組んでいます。

■教育課程の改訂Ver. 6〔2022（令和４）年度～〕

看護学科は、開設以来、保健師教育と看護師教育を統合した看護学学士課程教育を維持してきました。今回、保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正を契機に、看護学学士課程教育をより体系化し、充実させるために教育課程Ver. 6に改訂しました。この改訂は、人口減少社会やデジタル社会、災害の多発、ウィズコロナ・ポストコロナといった激動の時代に対応できるよう、多様な対象を理解し、最新の知見を基に多職種連携の中で実践する力を育成するためです。これまでの、医学科・先進医療科学科学部,福祉健康科学部との合同授業で行う専門職連携教育（IPE:Interprofessional）やフィリピン共和国サンラザロ病院での実習に加えて、教育課程Ver. 6では、「保健師教育と看護師教育の統合教育の質強化」と「看護学を探究する力を育む体系的な教育の強化」を観点に見直しました。

「保健師教育と看護師教育の統合教育の質強化」では、地域看護学領域の授業科目の新設・再編や、

表２　平成24年度改正教育課程（Ver. 5）

○必修科目、数字のみ選択科目

区分		授業科目	1 前期	1 後期	2 前期	2 後期	3 前期	3 後期	4 前期	4 後期	開設単位数等 単位数	開設単位数等 時間数	要修得科目 単位数
教養教育科目	導入教育科目	健康科学概論	①								①	15	必修科目１単位
	全学共通科目		6								6	90	選択科目６単位以上
	基礎教育科目	倫理学	②								②	30	必修科目１０単位
		心理学		②							②	30	
		生物学	②								②	30	
		化学	②								②	30	
		情報科学	②								②	30	
	外国語科目	英語Ⅰ	①								④	120	必修科目４単位
		英語Ⅱ		①									
		英語Ⅲ			①								
		英語Ⅳ				①							
		ドイツ語Ⅰ	1								2	60	選択科目 ４科目各２単位より １科目２単位以上
		ドイツ語Ⅱ		1									
		中国語Ⅰ	1								2	60	
		中国語Ⅱ		1									
		スペイン語Ⅰ	1								2	60	
		スペイン語Ⅱ		1									
		ハングルⅠ	1								2	60	
		ハングルⅡ		1									
		英語Ⅴ・Ⅵ								2	2	60	
		ドイツ語Ⅲ・Ⅳ								2	2	60	
	身体・スポーツ科学科目	健康運動科学	①	①							②	60	必修科目２単位
	小計		18	11	1	1				4	35	795	計 １２科目２５単位以上

区分		授業科目	1 前期	1 後期	2 前期	2 後期	3 前期	3 後期	4 前期	4 後期	開設単位数等 単位数	開設単位数等 時間数	要修得科目 単位数
専門基礎科目	心身の機構	解剖学	①								①	30	必修科目 ２２科目２３単位
		解剖学実習	①								①	45	
		生理学		②							②	60	
		生化学		①							①	30	
		栄養学			①						①	30	
		人間関係論				①					①	30	
		臨床心理学					①				①	30	
	健康科学	公衆衛生学（産業保健を含む）			①						①	30	
		疫学					①				①	30	
		保健統計学				①					①	30	
		保健学（学校保健を含む）				①					①	30	
		保健政策論					①				①	30	
		社会福祉学					①				①	30	
		薬理学			①						①	30	
		病理学			①						①	30	
		微生物学		①							①	30	
		内科系疾病論Ⅰ			①						①	30	
		内科系疾病論Ⅱ				①					①	30	
		外科系疾病論				①					①	30	
		精神・神経疾病論			①						①	30	
		小児・母性疾病論			①						①	30	
		感覚器疾病論				①					①	30	
	小計		2	4	7	6	4				23	705	計 ２２科目２３単位

区分		授業科目	1 前期	1 後期	2 前期	2 後期	3 前期	3 後期	4 前期	4 後期	開設単位数等 単位数	開設単位数等 時間数	要修得科目 単位数
専門教育科目	基礎看護学	看護学概論	①								①	30	必修科目 ５０科目７１単位
		生活行動論Ⅰ	①								①	22	
		看護理論						①			①	22	
		看護実践基盤技術Ⅰ				①					①	30	
		基礎看護技術Ⅰ		①							①	30	
		基礎看護技術Ⅱ			①						①	30	
		看護アセスメント学Ⅰ		②							②	44	
		看護アセスメント学Ⅱ				①					①	22	
		基礎看護学実習Ⅰ	①								①	45	
		基礎看護学実習Ⅱ				②					②	90	
	成人看護学	成人看護学概論			①						①	15	
		成人慢性期看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		成人慢性期看護方法論Ⅱ					①				①	30	
		成人急性・回復期看護方法論				①					①	22	
		成人周手術期看護方法論					①				①	30	
		成人緩和・終末期看護方法論					①				①	22	
		成人看護学実習							⑥		⑥	270	
	母性看護学	母性看護学概論			①						①	15	
		母性看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		母性看護方法論Ⅱ					②				②	44	
		母性看護学実習							②		②	90	
	小児看護学	小児看護学概論			①						①	15	
		小児看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		小児看護方法論Ⅱ					②				②	44	
		小児看護学実習							②		②	90	
	精神看護学	精神看護学概論			①						①	15	
		精神看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		精神看護方法論Ⅱ					②				②	44	
		精神看護学実習							②		②	90	
	老年看護学	老年看護学概論			①						①	15	
		高齢者支援システム論				①					①	15	
		老年看護方法論Ⅰ				①					①	30	
		老年看護方法論Ⅱ					①				①	22	
		老年看護学実習							④		④	180	
	地域看護学	地域看護学概論			①						①	15	
		生活行動論Ⅱ		①							①	15	
		地域生活支援方法論			①						①	22	
		地域看護活動展開論				①					①	22	
		地域看護システム論					①				①	22	
		地域生活支援方法演習						②			②	44	
		地域看護活動展開演習								②	②	44	
		地域看護学実習							③		③	135	

区分		授業科目	1 前期	1 後期	2 前期	2 後期	3 前期	3 後期	4 前期	4 後期	開設単位数等 単位数	開設単位数等 時間数	要修得科目 単位数
統合分野		医療・看護情報論	①								①	15	必修科目 ５０科目７１単位
		医療倫理			①						①	22	
		在宅看護論					①				①	22	
		症状マネジメント				①					①	30	
		看護管理学（医療安全を含む）							①		①	22	
		在宅看護実習							①		①	45	
		看護学総合実習							②		②	90	
		看護実践基盤技術Ⅱ								①	①	22	
		ケースマネジメント論						1			1	22	これらの選択科目より２科目２単位以上
		家族看護学						1			1	22	
		国際医療・看護論						1			1	22	
		災害看護論						1			1	22	
		リハビリテーション看護								1	1	15	これらの選択科目より１科目１単位以上
		クリティカルケア看護								1	1	15	
		ホスピスケア								1	1	15	
		看護史・制度論								1	1	15	
		看護教育学								1	1	15	
	卒業研究	看護研究方法論					①				①	30	必修科目 ２科目３単位
		看護研究								②	②	90	
	小計		3	5	10	12	14	6	23	10	83	2,421	計 ５５科目７７単位以上
合計			23	20	18	19	18	6	23	14	141	3,921	計 １２５単位以上

地域完結型医療・地域包括ケア・地域共生社会の実現に力を発揮できる保健師・看護師の育成にむけ全ての専門教育科目で要点を内包するようにしました。

「看護学を探究する力を育む体系的な教育の強化」では、看護専門職に必要な看護学の探究力として、社会情勢や看護現象・事象に疑問や関心をもち学問的な看護学を探究する力を育む体系的な教育として強化するために、１年次に教養教育科目「数理データサイエンス」、専門教育科目「看護学探究入門」を設定し、それと連動させて３年次から専門教育科目「看護研究方法論」「看護研究」に取り組むように設定をしました。また、臨床判断能力や基本となる看護技術の修得にむけた科目間の教育連携を強化するために、現行の「症状マネジメント」を発展的解消し「看護OSCE」（令和６年度から）を増設し、３年次後期から始まるローテーション方式の看護学実習前に、より実践的な臨床推論や看護技術の演習を全教員体制で組み、看護実践能力の強化、実習に対する動機付けをはかる内容としました。

表3　令和４年度改正教育課程（Ver. 6）

○必修科目、数字のみ選択科目

区分		授業科目	1		2		3		4		開設単位数等		要修得科目単位数
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	単位数	時間数	
教養教育科目	導入教育科目	健康科学概論	①								①	15	必修科目1単位
	全学共通科目		6								6	90	選択科目6単位以上
	基礎教育科目	倫理学	②								②	30	必修科目10単位
		心理学		②							②	30	
		生物学	②								②	30	
		化学	②								②	30	
		情報科学	①								①	15	
		データサイエンス入門	①								①	15	
	外国語科目	英語Ⅰ	①								④	120	必修科目9単位
		英語Ⅱ		①									
		英語Ⅲ			①								
		英語Ⅳ				①							
		ドイツ語Ⅰ	1								2	60	これらの選択科目より1科目2単位以上
		ドイツ語Ⅱ		1									
		中国語Ⅰ	1								2	60	
		中国語Ⅱ		1									
		スペイン語Ⅰ	1								2	60	
		スペイン語Ⅱ		1									
		ハングルⅠ	1								2	60	
		ハングルⅡ		1									
	身体・スポーツ科学科目	健康運動科学	①	①							②	60	必修科目2単位
	小計		18	11	1	1					31	675	計13科目25単位以上

区分		授業科目	1		2		3		4		開設単位数等		要修得科目単位数
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	単位数	時間数	
専門基礎科目	心身の機構	解剖学	①								①	30	必修科目23科目23単位
		解剖学実習		①							①	45	
		生理学の基礎	①								①	30	
		生理学の臨床応用		①							①	30	
		生化学		①							①	30	
		栄養学			①						①	30	
		人間関係論				①					①	30	
		臨床心理学					①				①	30	
	健康科学	公衆衛生学（産業保健を含む）			①						①	30	
		疫学					①				①	30	
		保健統計学			①						①	30	
		保健学（学校保健を含む）				①					①	30	
		保健政策論			①						①	30	
		社会福祉学					①				①	30	
		薬理学			①						①	30	
		病理学			①						①	30	
		微生物学		①							①	30	
		内科系疾病論Ⅰ			①						①	30	
		内科系疾病論Ⅱ				①					①	30	
		外科系疾病論				①					①	30	
		精神・神経疾病論			①						①	30	
		小児・母性疾病論			①						①	30	
		感覚器疾病論				①					①	30	
	小計		2	4	9	5	3				23	705	計23科目23単位

区分		授業科目	1		2		3		4		開設単位数等		要修得科目単位数
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	単位数	時間数	
専門教育科目	基礎看護学	看護学概論	①								①	30	必修科目44科目64単位
		看護の対象論	①								①	15	
		看護理論						①			①	22	
		看護過程論			②						②	44	
		看護に共通する基本技術		①							①	30	
		日常生活援助技術			②						②	60	
		診療に伴う援助技術				①					①	30	
		基礎看護学実習Ⅰ	①								①	45	
		基礎看護学実習Ⅱ				②					②	90	
	成人看護学	成人看護学概論			①						①	15	
		慢性期看護方法論Ⅰ			①						①	30	
		慢性期看護方法論Ⅱ					①				①	22	
		急性期看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		急性期看護方法論Ⅱ					①				①	30	
		緩和・終末期看護方法論					①				①	22	
		急性期看護学実習							③		③	135	
		慢性・終末期看護学実習							③		③	135	
	母性看護学	母性看護学概論			①						①	15	
		母性看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		母性看護方法論Ⅱ					②				②	44	
		母性看護学実習							②		②	90	
	小児看護学	小児看護学概論			①						①	15	
		小児看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		小児看護方法論Ⅱ					②				②	44	
		小児看護学実習							②		②	90	
	精神看護学	精神看護学概論			①						①	15	
		精神看護方法論Ⅰ				①					①	22	
		精神看護方法論Ⅱ					②				②	44	
		精神看護学実習							②		②	90	
	老年看護学	老年看護学概論			①						①	15	
		高齢者支援システム論				①					①	15	
		老年看護方法論Ⅰ				①					①	30	
		老年看護方法論Ⅱ					①				①	22	
		老年看護学実習							④		④	180	
	地域看護学	地域看護学概論		①							①	15	
		地域生活支援方法論Ⅰ		①							①	15	
		地域生活支援方法論Ⅱ			①						①	22	
		地域看護活動展開論			①						①	22	
		地域看護システム論				①					①	15	
		地域看護管理論				①					①	15	
		地域生活支援方法演習					②				②	44	
		地域看護活動展開演習Ⅰ						①			①	22	
		地域看護活動展開演習Ⅱ								②	②	44	
		地域看護学実習							③		③	135	

区分		授業科目	1		2		3		4		開設単位数等		要修得科目単位数
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	単位数	時間数	
専門教育科目	統合分野	看護学探究入門	①								①	22	必修科目8科目9単位
		医療・看護倫理学			①						①	22	
		在宅看護論					①				①	22	
		看護OSCE						①			①	22	
		看護管理学（医療安全を含む）						①			①	22	
		在宅看護実習							①		①	45	
		看護学総合実習							②		②	90	
		専門職連携演習								①	①	22	
		地域包括ケアマネジメント論						1			1	15	これらの選択科目より1科目1単位以上
		家族看護学						1			1	15	
		国際医療・看護論						1			1	15	
		災害看護論						1			1	15	
		看護学ゼミ								①	①	15	必修科目1科目1単位
	看護研究	看護研究方法論					①				①	30	必修科目2科目3単位
		看護研究								②	②	90	
	小計		3	5	10	12	14	6	23	10	81	2,363	計56科目78単位以上
合計			23	20	18	19	18	6	23	14	141	3,743	計126単位以上

３）学生の動向

１）入学志願者数と入学者数

平成６年度から入学生（定員60名）の募集が開始されました。また、３年次編入学生の募集（定員10名）は、平成８年度から開始となりましたが、表１に示すように、入学志願者の減少に伴い平成27年度より定員が６名に削減されました。現在、総計定員は66名となります。

２）国家試験の受験結果

表２は、平成26年度（18期生）から令和５年度（27期生）までの国家試験合格率の推移です。看護師国家試験の合格率は、全国平均を上回る状況が続いています。一方、保健師国家試験の合格率は、全国平均を下回った時期もありながら、保健師課程の大学院化や選択制の増加を背景に、その後は全国平均を上回る状況が続いています。

表１　入学志願者数と入学者数〔平成27年度～令和６年度〕

（　）：３年次編入学定員

年度	入学定員	入学志願者			入学者		
		男	女	計	男	女	計
平成27年度	60（6）	13（0）	203（ 6）	216（ 6）	4（0）	52（3）	56（3）
平成28年度	60（6）	16（2）	236（10）	252（12）	5（1）	61（5）	66（6）
平成29年度	60（6）	14（2）	207（ 6）	221（ 8）	3（2）	60（4）	63（6）
平成30年度	60（6）	17（2）	156（ 7）	173（ 9）	8（2）	52（3）	60（5）
令和元年度	60（6）	37（0）	463（26）	500（26）	6（0）	56（5）	62（5）
令和２年度	60（6）	25（1）	268（13）	293（14）	5（0）	55（5）	60（5）
令和３年度	60（6）	36（4）	237（22）	273（26）	9（0）	55（5）	64（5）
令和４年度	60（6）	32（2）	234（26）	266（28）	7（1）	53（4）	60（5）
令和５年度	60（6）	30（0）	244（20）	264（20）	7（0）	53（4）	60（4）
令和６年度	60（6）	23（3）	204（24）	227（27）	5（0）	57（5）	62（5）

表２　国家試験受験結果〔平成26年度～令和５年度〕

受験年	看護師国家試験					保健師国家試験				
	回数	受験者	合格者	合格率	全国合格率	回数	受験者	合格者	合格率	全国合格率
平成27年	第104回	69	68	98.6	95.5	第101回	76	76	100	99.4
平成28年	第105回	52	50	96.2	94.9	第102回	58	52	89.7	89.8
平成29年	第106回	58	58	100	94.3	第103回	61	57	93.4	90.8
平成30年	第107回	52	52	100	96.3	第104回	58	49	84.5	81.4
平成31年	第108回	54	54	100	94.7	第105回	65	46	70.8	81.8
令和２年	第109回	61	60	98.4	94.7	第106回	77	66	85.7	91.5
令和３年	第110回	67	66	98.5	95.4	第107回	78	71	91	94.3
令和４年	第111回	62	62	100	96.5	第108回	69	62	89.9	89.3
令和５年	第112回	56	56	100	95.5	第109回	66	65	98.5	93.7
令和６年	第113回	58	57	98.3	93.2	第110回	67	67	100	95.7

3）学生の進路と就職状況

本学科では、平成９年（1997年）から令和６年（2024年）までに合計1,763名の卒業生を送り出しています。卒業生の進路は、これまで大半の学生が就職あるいは進学をしています。

卒業時には多くの学生が医療機関や行政機関の職員として、北は北海道から南は沖縄県まで、日本の各地で就職しています。就職する病院の多くは、本学の附属病院や九州・関西・関東など大学病院や特徴ある病院に就職する学生も多くいます。COVID-19パンデミックの影響を受け、大分県内に就職する割合が2020年・2021年で一時的に増加し、また、保健師の増員に伴い、就職率が増加しています。これらの傾向は、国家試験対策も兼ねて2019年から就職支援活動を強化した成果も得られたと思われます。本学の保健師と看護師の統合カリキュラムの特徴を活かし、さまざまな地で、多様な専門性を備えた、さらなるキャリア形成が期待されます。

また、20年前と比べると看護学専攻の大学院進学率が低迷する一方で、助産学専攻・養護教諭課程に進学する人は増えています。看護の質を高めるためには大学院進学で「深める」「探究する」ことも重要になります。2019年からの就職支援活動の強化に加えて、2023年から進学といったキャリア形成も強調する中で少しずつ、進学への関心が高まることに期待したいところです。

表３　卒業生の進路・就職状況〔平成27年度～令和５年度〕

卒業年度	卒業生数	進学					就職							その他	その他	
		進学者数合計	大学院			助産学等	就職者数合計	施設種別				県内外別		その他	国試不合格	他企業等・未定
			本学		他大学			病院・診療所		保健所・市町村	その他	県内	県外			
			看護学専攻	他専攻				本学附属病院	その他							
平成27年度 2015	57	3	1	0	1	1	52	16	28	8	0	26	26	2	2	0
平成28年度 2016	58	4	0	0	3	1	53	18	30	5	0	28	25	1	0	1
平成29年度 2017	57	2	0	0	2	0	55	19	27	8	1	32	23	0	0	0
平成30年度 2018	60	1	0	0	1	0	59	23	30	5	1	30	29	0	0	0
令和元年度 2019	65	10	0	0	4	6	54	25	20	7	2	33	21	1	0	1
令和2年度 2020	71	7	1	0	1	5	62	31	21	9	1	39	23	2	2	0
令和3年度 2021	65	3	0	0	1	2	62	23	25	12	2	40	22	0	0	0
令和4年度 2022	61	3	1	0	2	0	57	24	23	10	0	33	24	1	0	1
令和5年度 2023	63	5	0	0	3	2	57	19	24	14	0	29	28	1	1	0
合計	557	38	3	0	18	17	511	198	228	78	7	290	221	8		
割合		6.8%	0.5%	0.0%	3.2%	3.1%	92.0%	36.0%	41.0%	14.0%	1.3%	52.0%	39.7%	1.4%		

４）現教員の主な業績

看護学科教員業績　［2015年度～2024年度の研究業績］

加隈哲也	［論］Kakuma T, Tsutsumi T, Kudo Y. Application of self-monitoring of blood glucose by intermittently scanned continuous glucose monitoring to lifestyle improvement after health checkup. J Endocrinol Metab, 13(2): 57-69, 2023. ［論］Kakuma T, Ariki S, Yoshida Y, Shibata H, Tsutsumi T, Kudo Y. Relation between daily self-weighing and physique, lifestyle factors, and glycemic parameters in Japanese college students. J Endocrinol Metab, 10(1): 8-15, 2020. ［論］Kakuma T, Yoshida Y, Okamoto M, Shibata H, Tsutsumi T, Kudo Y. Effects of Self-Awareness of Eating Behaviors and Differences in Daily Habits Among Japanese University Students on Changes in Weight and Metabolism. J Endocrinol Metab, 10(5): 131-139, 2020.
原田千鶴	［著］福田広美，原田千鶴，大戸朋子，庭瀬朋美，荒木章裕，姫野雄太，矢野亜紀子，村嶋幸代. 大分県独自の看護管理者支援事業 地域ネットワークで看護管理能力を向上 集い、解決し合う場づくり　看護のチカラ 27（578), 36-43, 2022-05-01　東京：産労総合研究所. ［論］福田広美, 原田千鶴, 副田明美,田辺美智子, 河野壽壽代, 大戸朋子,竹中愛子, 村嶋幸代. 中小規模病院等の人材育成に関する 看護管理向上のプロセス ―地域の看護ネットワークを基盤とした アクションリサーチ―. 日本看護管理学会誌 25（1), 1-11, 2021. ［論］原田千鶴, 実践知の学びを再考する"わざ言語" 臨地で学生と共有される実習指導者の感覚と看護のわざ. 看護教育 58（6), 428-432, 2017.
清村紀子	［論］藤野智子, 河合桃代, 清村紀子. 急性期領域における専門看護師のコンピテンシーを形成する要素と構造. 日本クリティカルケア看護学科誌18, 18-32, 2022. ［論］竹下智美, 清村紀子, 竹中隆一, 松成修, 黒澤慶子, 塚本菜穂, 坂本照夫, 重光修.「人工呼吸器離脱プロトコル」の有効性の検証. 日本クリティカルケア看護学会誌17, 31-43, 2021. ［論］竹下智美, 清村紀子. サブストラクション・アウトカムモデルを用いた人工呼吸器離脱への介入に関する文献検討. 日本クリティカルケア看護学科誌15, 1-11, 2019.
佐藤祐貴子	［論］簀河原靖子, 安藤敬子, 佐藤祐貴子, 脇幸子, 原田千鶴. 避難所の保健活動記録からみた避難住民の健康上の課題と看護活動分析. 大分大学教育マネジメント機構紀要, 141-154, 2023. ［論］Yukiko Sato, Shigekiyo Matsumoto, Kazue Ogata, Kira Bacal, Misato Nakatake, Takaaki Kitano, and Osamu Tokumaru. The dose-response relationships of the direct scavenging activity of amide-based local anesthetics against multiple free radicals. J. Clin. Biochem. Nutr. 73(1)：1-8, 2023. ［論］佐藤祐貴子, 原田千鶴. 背部挙上背臥位の２時間までの経時的な苦痛に関する研究. 日本看護技術学会誌　17：1-10, 2018.
野上龍太郎	［論］Ryutaro Nogami, Nobuhiro Kaku, Tatsuo Shimada, Tomonori Tabata, Hiroaki Tagomori, Hiroshi Tsumura. Three-dimensional architecture of the acetabular labrum in the human hip joint, Medical Molecular Morphology, Springer, Vol.53 No.1, 21-27, March 2020. ［論］Nobuhiro Kaku, Tatsuo Shimada, Ryutaro Nogami, Hiroaki Tagomori, Hiroshi Tsumura. Histological evaluation of the acetabular labrum after bipolar hip hemiarthroplasty: A case report, Medical Molecular Morphology, Springer, Vol.53 No.3, 183-189, September 2020.
岩本祐一	［論］Iwamoto Y, Fujino N, Furuno T, Fujimoto Y, Kamada Y. Applicability of the Self-Evaluation Scale of Nursing Practices for Improving Sleep Quality Among Patients with Dementia Taking Sleeping Pills to General Nurses. Journal of Rural Medicine 19(2), 92-104, 2024. ［論］Iwamoto Y, Fujino N, Furuno T, Fujimoto Y. Development of a self-evaluation scale of nursing practices for improving sleep quality among dementia patients taking sleeping pills. Nursing Practice Today 10(1), 32-43, 2023. ［論］岩本祐一, 藤野成美.入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な精神科看護師の視点.日本精神保健看護学会誌 29（1), 60-69, 2020.
後藤奈穂	［論］志賀たずよ，後藤奈穂，井手知恵子. 大分県における県型保健所保健師と市町村保健師の協働活動の実際.保健師ジャーナル, 79（1), 2022. ［論］後藤奈穂，牛尾裕子，守田孝恵. 医療的ケア児に対する保健師活動－個別事例への保健所保健師の支援に焦点をあてて―. 山口医学71（2･3), 65-74, 2022. ［著］守田孝恵（編著）他，保健師活動を展開する扉，71-72, 2021, クオリティケア.
簀河原靖子	［論］簀河原靖子，安藤敬子，脇幸子，佐藤祐貴子，原田千鶴. 避難所の記録からみた避難住民の健康上の課題の分析. 大分大学教育マネジメント機構紀要2023（2).
小柳麻央	［論］小柳麻央，猪俣理恵，原田千鶴. 大分県内の市町村における産後ケア事業の特徴と課題.大分大学教育マネジメント機構年報２号,123-131,2023.

江藤千晴	［論］江藤千晴，森万純，大野夏稀．大学教員との共同企画の研修会をとおして変化した臨床実習指導者としての意識や態度.大分大学教育マネジメント機構年報,67-78, 2023. ［論］江藤千晴,幸松美智子.看護学生が捉える「甘え」について. 九州・沖縄小児看護教育研究会誌,20,22-25,2019.
末弘理恵	［著］北川公子監修, 末弘理恵, 三重野英子分担執筆：系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学　第９版, 97-102，172-185，2020，医学書院. ［著］水谷信子監修，末弘理恵分担執筆：最新老年看護学　第３版，110-112，205-207，222-227，2020，日本看護協会出版会. ［論］首藤八千子，脇幸子，大野夏稀，末弘理恵. 在宅看護論実習の到達度別に教員がとらえる『関心・意欲・態度』の様相，日本看護研究学会雑誌47（2），201-208，2024.
脇 幸子	［論］Sachiko WAKI, Yasuko SHIMIZU, Kyoko UCHIUMI, Kawai ASOU,Kumiko KURODA, Naoko MURAKADO, Natsuko SETO, Harue MASAKI and Hidetoki ISHII. Study on the structural model of self-care agency in patients with diabetes: A path analysis of the Instrument of Diabetes Self-Care Agency and body self-awareness. Japan Journal of Nursing Science. 2016 Oct;13(4):478-486. ［論］Sachiko Waki, Yasuko Shimizu, Natsuko Seto, Mayumi Sugahara, Yoshiko Yoshida. Insights into self-care behavior of patients with diabetes: support using a computerized self-evaluation system. Journal of Nursing Education and Practice 2016, Vol. 6, No. 10, 51-64. ［論］首藤八千子, 脇幸子, 大野夏稀, 末弘理恵.在宅看護論実習の到達度別に教員が捉える『関心･意欲･態度』の様相.日本看護研究学会雑誌.47,2024.
大野夏稀	［論］式田由美子, 大末美代子, 大野夏稀, 脇幸子, 清水安子.糖尿病セルフケア能力測定ツールを活用したセルフケア支援での入院時と退院時における患者－看護師間の相互作用の探究.日本糖尿病看護・教育学会誌28（1),19-28,2024. ［論］大野夏稀,脇幸子,末弘理恵,寺町芳子.終末期がん患者・家族との意思決定に向けたコミュニケーションのロールプレイ演習の効果,大分大学教育マネジメント機構紀要　第２号,79-89,2023. ［論］菅原真由美,品川陽子,大野夏稀,川野京子,平山珠江,脇幸子,寺町芳子.A施設の看護師の意思決定支援における倫理調整者としての実践状況－振り返り票を用いた自己評価－,第51回日本看護学会論文集 看護管理 看護教育,243-246,2021.
三重野英子	［著］三重野英子 他編,最新老年看護学第３版2018年版～2021年版，第４版2022年版～2023年版，日本看護協会出版会. ［著］三重野英子 他,系統看護学講座 専門分野Ⅱ老年看護学，第９版，86-94，94-102, 172-184．234-238, 医学書院, 2018. ［著］三重野英子，認知症ケア標準テキスト改訂６版認知症ケアの実際Ⅱ：各論，第１章認知症の医療とケアⅠ．日常の健康管理. 3-21, ワールドプランニング, 2022.
正木孝幸	［論］Masaki T, Ozeki Y, Yoshida Y, Okamoto M, Miyamoto S, Gotoh K, Shibata H. Glucagon-like peptide-1 receptor agonist semaglutide improves eating behavior and glycemic control in Japanese obese type 2 diabetic patients. Metabolites 12(2), 147, 2022. ［著］正木孝幸. 肥満糖尿病の食事療法・運動療法と行動療法，糖尿病プラクティス 38（2），204-206，2021. ［著］Masaki T. The Neuronal Histamine and its Receptors as New Targets for Food Intake and Obesity. Biomedical Aspects of Histamine. Springer 299-313, 2015.
小野光美	［論］立原怜，原祥子，小野光美. 認知症高齢者の血液透析導入後の生活を支える家族の体験. 日本老年看護学会, 23（2), 75-83, 2019. ［著］日本看護倫理学会臨床倫理ガイドライン検討委員会（浅井さおり，内山孝子，大串祐美子，小野光美，鈴木真理子，高田早苗，友竹知恵，長谷川美栄子，三浦直子，山田律子）：看護倫理ガイドライン，2018, 看護の科学社. ［論］Mitsumi Ono, Hideyuki Kanda, Yuko Takeda, Sachiko Hara. Characteristics of Geriatric Health Service Facilities Designated as Sites of Death., Health, 7(10), 1275-1282, 2015.
阿部世史美	［論］濵井優月, 阿部世史美, 三重野英子, 小野光美, 吉岩あおい. 認知症ピアサポーターが認知症の人と関わる際に大切にしている思い. 大分県医学会雑誌第32巻, 123-128, 2024. ［論］阿部世史美，三重野英子，小野光美. 口腔がん切除再建手術を受けた後期高齢者の自宅退院後の生活を支える入院中の看護. 老年看護学28（2), 106-114, 2024. ［論］立山香織，阿部世史美他. 頭頸部癌化学放射線療法中の摂食嚥下機能と栄養状態の推移.嚥下医学会誌，第11巻２号，229-236, 2022.

表は、2015年度から2024年度までに本学科教員が獲得した科学研究費助成事業の一覧です。

表　科学研究費助成事業の取得状況

研究代表者	研究種目	取得年度	研究課題
寺町　芳子	基盤研究（C）	2015～2018	悪い知らせを伝え意思決定する協働モデルの有用性の検証及び実用化に関する介入研究
末弘　理恵	基盤研究（C）	2015～2018	手術を受ける後期高齢者のケアプログラムの開発
吉良いずみ	若手研究（B）	2015～2017	抗がん剤による副作用症状としての便秘症状に対する温罨法の効果に関する研究
岩本　祐一	若手研究（B）	2015～2017	長期入院患者の自殺予防を踏まえた退院支援における精神科看護師教育プログラムの開発
森　　万純	基盤研究（C）	2016～2018	認知症を有する後期高齢がん患者の人生の最終段階を支える看護のモデル化
井手知恵子	挑戦的萌芽研究	2016～2018	行政組織における保健師業務の引継ぎに関する研究
佐藤祐貴子	若手研究（B）	2016～2018	圧取り除きグローブを用いた同一体位における安楽なポジショニングケアの開発
三重野英子	基盤研究（C）	2017～2020	認知症専門外来における看護実践モデルの開発研究
小野　光美	基盤研究（C）	2017～2020	地域包括ケアシステムにおける高齢者の終末期を支える看取りケアモデルの開発
西迫　真美	若手研究（B）	2017～2018	既卒新人訪問看護師の臨床判断に関する研究
杉田　　聡	基盤研究（C）	2018～2022	占領期医療政策の変遷を計量テキスト分析により検証する：文理融合の歴史研究法開発
橋本理恵子	基盤研究（C）	2018～2020	がん患者の就労や経済的問題に対する多職種による早期スクリーニングシステムの開発
脇　　幸子	基盤研究（C）	2018～2023	糖尿病療養指導士と患者会の協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性
濱口　和之	基盤研究（C）	2018～2023	介護老人保健施設における糖尿病療養指導士の介入による糖尿病チーム医療・介護の実践
寺町　芳子	基盤研究（C）	2019～2023	術後疼痛の症状マネジメントに用いる除痛アルゴリズムと評価指標の構築
後藤　奈穂	基盤研究（C）	2019～2021	医療的ケア児の地域ケアシステムづくりにおいて行政保健師が果たす機能に関する研究
森　　万純	基盤研究（C）	2019～2022	認知症高齢がん患者のがん疼痛と倦怠感に関する症状アセスメントモデルの構築

研究代表者	研究種目	取得年度	研究課題
岩本　祐一	若手研究	2019～2023	一般科看護師のためのBZD系薬剤漸減時の離脱症状アセスメントツールの開発
佐藤祐貴子	基盤研究（C）	2021～2024	安楽なポジショニングケアの開発：圧抜き方法のエビデンスの検証
清村　紀子	基盤研究（C）	2021～2024	時間生物学に基づく急性期脳卒中患者の概日リズム再獲得に向けた看護の挑戦
江藤　千晴	基盤研究（C）	2021～2023	AYA世代重症心身障害児・者の家族が抱く養育における介護負担感への支援策の検討
三重野英子	基盤研究（C）	2021～2024	一般病院における非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発
折橋　隆三	研究活動スタート支援	2021～2022	高齢者の精神的健康に関する長期疫学縦断研究（黒川町研究）
野上龍太郎	若手研究	2022～2024	臨床での実施状況に即したより安全な気管吸引方法確立のためのエビデンスの開発
阿部世史美	研究活動スタート支援	2022～2023	地域高齢者の日常の発声とオーラルフレイルとの関連
脇　　幸子	基盤研究（C）	2023～2027	糖尿病と心不全をもつ人への看護の連携のためのプロトコル作成と評価
末弘　理恵	基盤研究（C）	2023～2026	高齢患者における集中治療症候群（PICS）の予防ケアプログラムの開発
折橋　隆三	若手研究	2023～2026	高齢者の認知機能低下発現を予測するバイオマーカーの開発
正木　孝幸	基盤研究（C）	2024～2027	肥満外科治療における代謝異常関連脂肪肝の改善メカニズムの解明
小野　光美	基盤研究（C）	2024～2027	経カテーテル大動脈弁置換術（TAVI）選択時のACP実践に必要な構成要素の同定
阿部世史美	基盤研究（C）	2024～2027	オーラルフレイル－ゼロ次予防における日常の発声の意義
佐藤昂太朗	基盤研究（C）	2024～2026	救急患者家族における患者救命直後から退院後の状況を踏まえた支援プログラムの開発

2．卒業生メッセージ

1期生（平成9年度卒業）

大分から次世代へ：Innovation for Nursing Excellence

福岡大学医学部看護学科　**坂梨　左織**（旧姓 隅川）

看護学科設立30周年を心よりお慶び申し上げます。私は1期生として大分医科大学を卒業し、附属病院での臨床経験を経て、現在は福岡大学で看護学基礎教育と研究活動に従事しています。近年は、情報技術を活用した看護学教育の推進と、患者・家族支援のデジタル化に注力し、特にVR（Virtual Reality）教材の開発と実践的応用に取り組んでいます。

私の活動の原点は、大学時代の先生方との出会いにあります。当時、看護学教育は変革期を迎えており、自律的な学びと学問的成長を求める先生方の熱意に触れ、看護という学問が持つ奥深さと可能性に魅了されました。また、同期生たちとの切磋琢磨を通じて、自らの考えを言葉にし、新しい挑戦に向けて道を切り開く力を培いました。控えめだった私が、博士課程で海外のExchange programや招聘講演に挑戦し、看護学の知見を広げる機会を得られたのもこうした経験があったからだと感じています。

現在進めている教育と研究のデジタル化は、学習者の学習意欲を高め、新たな発見と深い学びをもたらす重要な手段と考えています。時代の変化に即した教育・医療の進化に貢献すべく、情報技術を活用し、より効果的な成果を追求しています。大分の地で育んだ知と想像・創造力の芽が、記念樹「御衣黄」のように幾度も花を咲かせ、看護学の発展に寄与できるよう尽力して参ります。そして、次世代の人材育成に取り組み、その成長を支えつつ看護の未来を共に築いていきたいと考えています。最後に、この地で共に学ぶ皆様のご活躍と看護学科のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

より健康であり続けるための看護

新古賀クリニック健康管理センター　**村田恵理子**

「健康であり続けるためのサポートがしたい」と、入学当初から保健師として働きたい気持ちが常にあったように思います。卒業後は行政保健師として8年間従事し地元の健康推進に携わらせていただきました。母子保健、健康増進、難病、精神保健業務を担当し、医療を必要とする状態で、様々な制度やサポートを活用しながら、地域で暮らす方々へのマネジメントの一端を担いました。

その後は、夫の転勤、子育てなど環境が変わり一線を退きましたが、子育てが落ち着き新たなステージとして健診を選ぶこととなり、現在に至ります。

健診現場での対象は、健康な生活者として日常を送る方々です。健診は、ご自分の健康状態に興味を持っていただく年一度の貴重な機会です。必要な治療に繋げたり、個別の保健指導を通して、自分の振り返り、情報提供や具体的な行動目標へのアドバイスをさせていただくこともあります。

今、まだ健康な方々に、今後起こりうるリスクに対して意識を持ち、何らかの行動変容を起こしてもらうことは容易ではないなぁと日々感じます。いかに相手の心をつかめるか、これにより、指導の意味は大きく変わってくると思います。まずは生活者としての個々の生活背景を尊重しつつ、自己開示していただきながら、本音を引き出せる雰囲気づくりを大切に、今後のご自分の生活にプラスのイメージを抱けるような環境づくり・行動変容を促せるようサポートしていきたいと考えます。

保健師として、実際にハイリスク状態を回避され、自信をもって日々過ごされる方々を目の当たりにすることは最大の喜びです。看護における予防、未病の大切さを日々実感しつつ、今後も日々の業務に邁進していきたいです。

2期生（平成10年度卒業）

それぞれの看護と今までとこれから

旭化成（株）健康経営推進室　延岡健康経営支援センター　**菊池　愛**

大分大学医学部看護学科開設30周年に際し、お慶びを申し上げます。私は、第２期生として看護学科で学びました。現在は、企業の健康経営を推進する部門で産業保健師として、労働者の安全と心身の健康保持・増進、快適な職場環境づくりを基盤に活動を行い、個人の活躍・成長、働きがい・生きがいの向上、活気あふれる組織風土の醸成を支援し、生産性向上に寄与しています。

学生の頃、先生から「看護はアートだ」とご指導いただきました。看護職は、「知識だけではなく、創造性を働かすための感性も必要だ」と言われています。「看護師として何ができるか？」と問われながら実習を行いました。現在、産業保健師としての業務遂行や考え方に、学生時代の経験、病院勤務や地域での経験が役立っています。病院では、回復力を間近で感じながら支援できる楽しみや病に対する無力感を経験しました。地域では、健康不安を感じながらも住み慣れた土地での生活を続けたいという強い思いや地域のつながり、助け合いの大切さを経験しました。

自分の知識や経験不足も多く、強みを発揮することは簡単ではないですが、今後も、学びを深め、従業員の方々や会社から必要とされる存在であり続けたいと思います。また、企業の中でより産業保健師の認知度を高め、不可欠な存在となるように、共に働く保健師と日々の活動を地道に行っていきたいです。医療や教育現場の話を聞ける大学や病院勤務時代の仲間達との交流はかけがえのないものです。

最後になりますが、ご指導いただいた先生方へ感謝を申し上げ、看護学科のさらなるご発展と卒業生、在校生の皆様のご活躍を楽しみにしております。

看護師としてのあゆみとこれから

大分大学医学部附属病院　**村田　美雪**

大分大学医学部看護学科開設30周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。私は現在、大分大学医学部附属病院緩和ケアセンターにて、緩和ケア支援チームの専従看護師として勤務しています。学生時代は解剖学をはじめ、「患者とは、看護とは」から始まる看護学も、毎日必死に講義を受け、頭の容量がパンクしてしまうのではないかと思うくらい学ばせていただきました。ただ、卒業してから25年経とうしている今でも、このときに学んだことが日々の看護実践に活きていると感じています。特に緩和ケア認定看護師資格を取得してからは一層、患者さんの痛みや不安などのつらさを全人的に理解するということ、患者さんやご家族の苦痛を軽減するためにひとりの看護師としてどう関わるか、専門的緩和ケアを提供する多職種チームを活かしてどう環境を整えるかを考えるとともに、患者さんや家族が大切にしていることや思いを聴かせていただき、その人生の貴重な時間を共に過ごさせてもらうありがたみを感じることができています。

ここ数年は日々の看護実践をより良くするための看護研究の大切さを実感し、この寄稿文を書いている現在、看護学科の先生方に支援していただきながら臨床での看護実践をまとめる研究に取り組んでいます。年齢を重ねての学び直しで再び頭がパンクしそうになっていますが、患者さん、ご家族の苦痛が少しでも和らいだと感じてもらえる看護につながるように、これからも歩み続けていきたいと思っています。

3期生（平成11年度卒業）

次の20年に向かって

大分県立看護科学大学成人看護学研究室　古賀　雄二

看護学科開設30周年記念誌の発刊を心よりお慶び申し上げます。

私は第３期生として入学・卒業後、大学病院の集中治療部門を中心に臨床を経験し、その間、急性・重症患者看護専門看護師として活動しました。現在は大学教員として10年目を迎えました。昨年度から約20年ぶりに大分の住人となり、実習指導先や研究フィールドで同窓生の皆様に大変お世話になっています。

20周年記念誌でも寄稿の機会を頂き、看護学科での学びとして「考えること」の重要性を記載していました。これは、今でも変わっていません。臨床で壁にぶつかったときだけではなく、日常的に行っている看護に対しても、看護学科で教えて頂いた「考えること」を心がけました。そのことが大学院進学とその後のキャリア形成につながりましたが、「看護を考えることは楽しいこと」であると気づきました。看護学科の先生方は、いつも真剣に、楽しそうに、学生に接してくださっていたことが思い出されます。私も「看護を考える楽しさ」を伝えられる教員を目指したいと思います。

ご縁があり大分で学部・大学院教育を担当させて頂いています。また、大分県看護協会学会委員を拝命しています。同窓生の皆様をはじめ、大分県の看護職の皆様と、大分県の保健・医療・福祉について考えていきたいと思います。

看護管理の道を志す

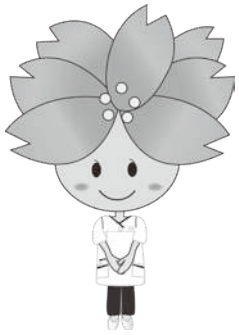
大分大学医学部附属病院　副看護部長　藤本　和之

看護学科開講30周年おめでとうございます。第３期生の藤本和之と申します。2000年に卒業し、大分大学医学部附属病院に入職しました。以降、職場を変えることなく24年が経ちます。これまでのキャリアの中で、多くの事を学ばせていただき、2023年度より副看護部長を務めさせていただいております。卒後長い年月が経ちましたが、看護学科在学中のことはしばしば思い出します。それだけ今の自分の礎となっているのだと感じます。

実習の経験がきっかけで当院の小児科に入職したのが看護師としてのスタートでしたが、たくさんの患者さんや職員との出会いを経て思うことは、それらの人々への感謝の気持ちと、恩返しをしたいという気持ちです。私はそれを原動力に仕事をしています。看護助手も含めると800名規模という看護職員のマネジメントを実践する責任の大きさを痛感しながら日々奮闘しております。

現在は主に医療安全管理、感染管理、災害対策、RRS、総合患者支援、地域連携、経営管理、病院機能評価などを担当しています。直近では７月に受審した病院機能評価に向けて医療・看護の質改善に力を注ぎました。例を挙げればRRS担当の副看護部長として「急変リスク予見システム（仮称）」の開発に取り組みましたが、その仕組みや成果について病院機能評価で高い評価を頂いたことはとてもうれしかったです。

私たちが目指すべき医療・看護の水準について何度も自問自答し、業務改善をしてきましたが、社会は常に変化し続けているため、私たちも進化し続けなければならないのだと覚悟を新たにしたところです。これまでのご縁を大切に、頼もしい同志たちとともに職責を全うしたいと思います。



4期生（平成12年度卒業）

看護のかたち～学び、実践、管理へ～

西別府病院　**藤原ゆかり**

私は、看護学科４期生です。卒業後、千葉県のがん専門病院に就職し、その後熊本大学で養護教諭について学びました。大分県に戻ってからは、国立病院機構大分医療センター、別府医療センターを経て、現在は西別府病院の重症心身障害児者病棟で看護師長をしております。たくさんの経験や寄り道をしましたが、現在は看護管理の魅力を感じながら、充実した日々を送っております。

県内初の看護系大学として創設された大分医科大学（現大分大学）医学部看護学科での学生生活は、楽しく充実したものでした。医学部の学生と同じキャンパスということもあり、サークルや授業を通じて交流する機会もあるため、医師を目指す友人と交わす会話の中で、お互いの職種を尊重する姿勢や、看護の専門性を追求する思いが芽生えました。そして現在、共に現場で働くこともあり、それぞれの希望が未来に繋がったという実感があります。

私の看護師人生は急性期病院での経験が主流であり、現場で様々な分野について専門的に学習し、また30代からは管理を学びながら、現場での実践を行ってきました。現在は看護師長として病棟を管理する立場にありながら、結核、重症心身障害、筋ジス、神経難病などセーフティーネット系医療の役割を担う病院で、日々学びながら看護管理を実践しています。いくつかの病院を経験して思うことは、看護の力を求めている人々が数多くいること、そして私たちがまだ知り得ないニーズを抱えている人々がいるということです。看護師人生の折り返しを迎えた今、これからさらに視野を広げ、スタッフのため、患者さんのために、看護管理者という立場で看護の素晴らしさを発信していきたいです。

創立30周年に寄せて

豊後大野市役所　**山口　真弓**

大分大学医学部看護学科創立30周年にあたりまして、心よりお喜び申しあげます。

私は看護学科４期生として入学しました。入学の動機が保健師になることでしたので、地域看護学や地域での実習に興味深く取り組むことができました。特に４年次の地域実習での健康教室の経験は「伝えること・伝わること」の楽しさを実感する機会になりました。「伝えること・伝わること」を楽しむということは今でも保健師としてのモチベーションを高める原動力となっています。また同じ４年次の病棟実習のときには担当した患者さんとの距離感をつかめず自分本位の関わりを持ち拒否をされたことがあります。自分はコミュニケーションを取ることが得意だと思っていたのでとてもショックを受けたことを覚えています。相手との距離感を常に意識しながら丁寧に関わることは今も大切にしていることです。

現在は大分県豊後大野市役所で保健師として勤務しています。今年で入職して22年目になります。３年目には７町村合併という経験をしました。衛生部門だけでなく、健診部門に出向し６年、福祉部門に６年と他部署での経験も積むことが出来ました。その22年間の経験があってもなお、保健師としての意識の根底に学生時代に感じたことを深く考えたことがあるのだと感じてます。次の段階として、人材育成があります。自分の経験を後輩に「伝えること・伝わること」をどう楽しめるか考えています。世代間の垣根を越えつつ対話を心がけ、距離感を大事にしながら人材育成にも挑戦していこうと思っています。

最後になりましたが、看護学科のさらなるご発展と卒業生、在校生の皆様のご活躍を心から祈念しております。

5期生（平成13年度卒業）

起立性調節障害の子に「選択できる未来」を手渡す起業家としての道

発達科学コミュニケーション　大下　真世

私は、大分大学医学部附属病院にて６年間勤務しました。結婚後、３人の子育てをしながら、保健師として復帰し、発達障害児の親子教室を担当しました。「ママが変われば子どもが変わる」、ペアレント・トレーニングの素晴らしさに感動しています。

息子が中学生で起立性調節障害を発症しました。半年間は、なすすべなく「ただ見守るだけ」の生活になりました。しかし、半年後に出会った発達科学コミュニケーション（ペアレント・トレーニング）で発達の土台から積み上げることができ、自信とやる気を回復しました。現在は、科学甲子園ジュニア全国大会出場、アメリカ留学等積極的に活動するまでに成長しました。

現在は、その経験をもとに起業し、全国の起立性調節障害や不登校のお子さんのママを対象に発達科学に基づくプログラムをオンラインで伝えています。

これまで学んだ看護師としての確かな知識や研究力、保健師としての経験、何よりもわが子の大きな困難への対応を通して、「ただ回復を待つだけ」になっている起立性調節障害の子へのサポートに対して、私の使命感がふつふつと湧きあがりました。そして、「起立性調節障害の子に選択できる未来を手渡したい」そんな強い思いで起業を決断しました。今では、人の役に立ちながら、「子育て」も存分に楽しみ、思った通りの収入も叶えることができる、新しいライフスタイルを手にしています。

起立性調節障害の子は病院やカウンセリングだけでは治っていきません。「大人になったら治りますよ」「温かく見守りましょう」そんな聞こえのよいアドバイスに翻弄されずに、「起立性調節障害の子の回復はママが促す！」発達科学に基づいたこの新常識を世の中に広めるため、日々邁進してまいります。

母子手帳交付の窓口から

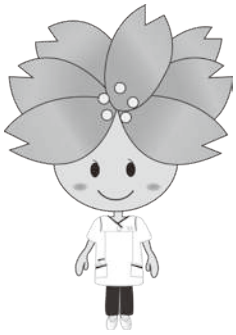
横浜市港北福祉保健センターこども家庭支援課　福田　直子

看護学科を卒業後、助産師学校に進学し卒業後は病院で助産師として勤務していました。ライフイベントの為病院を離れ、地域で働くようになり、現在は母子手帳交付時面談、妊娠中の相談支援、産後訪問を主な仕事とする母子保健コーディネーターとして働いております。

合計特殊出生率が1.20の日本は国や自治体も子育て支援に力をいれていますが、経済面、子どもを持つメリットがないなど様々な理由で少子化に歯止めがかかっていません。理由の一つにジェンダーバイアス等もあり、日本はまだ妊娠出産による女性の負担が大きいと感じています。

母子手帳交付を奥さんに頼まれて取りに来たという男性が多い中、奥さんが仕事のため自らの意思で取りに来た方がいました。これから起こる事をすべて自分の事として受け止めており、母子手帳に保護者の名前を書いておくことを伝えたら、その場で夫婦それぞれの名前を記入する姿も印象的でした。話を聞くと、その方は父子家庭で育ち、父親が仕事と家の事をするのを当たり前のようにみてましたと話されました。シンプルに、命を育む事は夫婦で責任を果たす事という考えは、両親教室等で親になる直前に学ぶというより、幼少期など人格を形成する時期から感じとれる影響は大きいと感じた出来事でした。一人ひとりの価値観が風土を作り、結果として社会を変えて行く事につながっていくと感じています。

男性の育休取得が進むなど制度面も後押しし、少しずつ社会の変化を感じる事はありますが、今後は何らかの形で幼少期からの土台づくりの部分に携わっていく活動ができたらと思っています。



6期生（平成14年度卒業）

学ぶことで得られるもの

学校法人高木学園　福岡国際医療福祉大学　生涯教育センター　**秋吉　和恵**

看護学科30周年おめでとうございます。卒業生であることを誇りに思います。現在私は、福岡国際医療福祉大学 生涯教育センターの認知症看護認定看護師教育課程で、教員として働いています。

看護学科には、6期生として入学しました。学生時代は、袴に憧れて入部した弓道と、遠征費を捻出するためのアルバイトに明け暮れていました。卒業できたこと、国家試験に合格できたことが、奇跡だと思っています。

卒業後は病院に就職し、回復期リハビリテーション病棟、手術室、急性期一般病棟、地域包括ケア病棟で勤務しました。認知症の方はどの部署にもいましたが、接し方が分からず、苦手意識を持っていました。看護師15年目の時に病院の認知症看護研修を受講し、知識不足を痛感しました。認知症を深く学びたいと思い、認定看護師教育課程に進学し、資格を取得しました。

資格取得後に副看護師長になり、認定看護師の役割との両立に悩むことがありました。そのような中、大分県看護協会のファーストレベルを受講しました。研修で「キャリアアンカー」という言葉を知り、看護師としてどう働いていきたいか考えるようになりました。その後、現在の職場とのご縁をいただき、20年務めた病院を退職後に転職しました。

学生時代も今も勉強は苦手ですが、学ぶことで得た知識や人とのつながりが、自分の力になると感じています。今後は、地域で暮らす認知症の方の支援に携わりたいと考えています。教員の経験を通して認知症を学びなおし、生まれ育った由布市で、認知症の人やご家族・地域の方と関わることが、私の夢です。

大学での学びから芽生えた看護観

大分県立病院　**竹下佳代子**

この度は大分大学医学部看護学科創立30周年おめでとうございます。私は6期生として卒業後、大分県立病院に就職し、現在は血液内科・耳鼻咽喉科の混合病棟で主任看護師として勤務しています。大学では様々な学びを得ましたが、その中で一番印象に残っているのは病棟実習です。患者の思いに寄り添い生きる希望を支えるために、看護師をはじめ様々な職種とのチーム医療の重要性を感じることができました。悩むことも多い実習でしたが、先生方から助言をいただき、同期と励まし合いながら乗り越えることができました。その時の経験が「患者と家族がより良い状態になるために支援したい」という看護観に繋がっていると思います。

現病棟で勤務する中で、造血細胞移植について悩む患者や家族を支えたい思いが膨らみ、認定造血細胞移植コーディネーター(HCTC)資格を取得しました。造血細胞移植は完治を目指すことができる一方、強い身体的・精神的苦痛を伴い、時に生命に関わる重い合併症や再発のリスクもある治療です。また、患者・家族背景は様々で、家族をドナーにすることへの苦悩・ケアギバーの不足・経済面の問題・成長過程での問題・家族関係など多岐にわたります。これらの問題を把握し、造血移植医療チームや関連機関との連携を行うとともに、患者・ドナー及びそれぞれの家族の支援を行うことで、質の高い医療を提供できると思います。

患者の命に向き合うことは大変なことも多いですが、看護師・HCTCともに、とてもやりがいのある職業です。今後も造血細胞移植医療チームスタッフと協力し、よりよい看護を提供していきたいと思います。

7期生（平成15年度卒業）

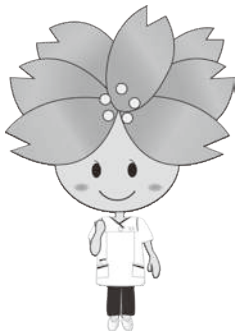
これまで、そしてこれから

熊本保健科学大学看護学科　井上加奈子

私は現在、地元である熊本の大学で基礎看護学の教員として看護基礎教育に携わっています。大学に入学したばかりの学生に、看護の基礎を教えるということの重みを感じながらも、その奥深さにやり甲斐を感じながら、日々、教育、研究活動に取り組んでいます。

学部時代を振り返ってみると、自由な雰囲気のなかで、のびのびと学ばせてもらったことを思い出します。先生方の看護に対する熱いまなざしを肌で感じながら、友人たちと看護について熱く語り合い、専門的な知識や技術はもちろんですが、人との向き合い方や「看護とは何か」を問い続けることの大切さを学びました。実習で出会った患者さんには、生きることの意味や人生の重み、そして看護の可能性を教えていただきました。そして、どんなときも学生の考えや意見を受け止め、学生が抱いた問いについて共に探究し、向き合ってくださった先生方の姿は、看護教員である今の私の在り様につながっていると思います。このような看護学科での経験、そしてそこで得た学びのすべてが、看護専門職としての私の礎になっており、看護学科で看護学生としての一歩、そして大学教員としての一歩を歩み始めることができたことは、私の誇りでもあると言えます。

今、私は大学院の博士後期課程に在籍しています。仕事と博士後期課程の両立に苦労しているところですが、「これから」が「これまで」を決めると思って、日々奮闘中です。目下、挑戦していることは「博士の学位取得」ですが、現在取り組んでいる看護学教育に関する研究を発展させながら、社会や看護学の発展に少しでも貢献できればと思っています。そして、看護基礎教育に携わる限り、学生とともにより良い看護について探究していきたいと考えています。



私の人生に影響した２つの転機

周南公立大学人間健康科学部看護学科　田淵　啓二

看護学科の７期卒業生の田淵啓二と申します。現在は大学で高齢者看護学の教授を務めております。

私の人生を振り返ると、大きな転機が二つありました。一つ目の転機は27歳の時に青年海外協力隊に臨床工学技士として参加し、ジャマイカへ派遣されたことです。この経験は、住み慣れた環境から勇気を持って一歩外へ踏み出し、新しいことに「挑戦」することで、多くの貴重な経験が得られることを教えてくれました。二つ目の転機は30歳の時に大分医科大学医学部看護学科に入学したことです。看護師と保健師の資格を取得できたことは、それからの私が社会と「安定」してつながるための大きなアイデンティティとなりました。「挑戦」と「安定」という一見相反する要素をバランスよく自分の人生に取り入れる準備が整ったのは、大分で看護学生として４年間を過ごせたおかげだと感じています。約20年の臨床経験を経て、現在は看護教員として働いておりますが、人生の節目や困難な選択の時期を迎えるたびに、過去の二つの転機が私を支えてくれていることを実感し、その経験に出会えた幸運に感謝しています。

看護教員としては、自分の経験や知識を次の世代に伝えていくことが自分の使命であると考えています。看護職を目指す若者や、看護職の海外での活動を応援し、外に目を向けて活動しようとする人々のきっかけづくりやサポートをしたいと思っています。

私の人生において、大分で過ごした４年間がその後の人生に与えた影響の大きさを再認識することができました。ご指導いただいた先生方や、励まし合って勉強した旧友に心から感謝の気持ちを伝えたいです。

8期生（平成16年度卒業）

看護管理者としてのこれから

大分大学医学部附属病院　**近藤あゆみ**

この度は、大分大学医学部看護学科30周年を心よりお祝い申し上げます。

私が８期生として卒業して、20年が経とうとしています。振り返ると、看護学科での４年間はあっという間で、どのような看護師になりたいかと日々考えながら、学んでいたことを思い出します。

卒業後、大分大学医学部附属病院に入職し、手術部に配属されました。学生時代より周術期看護に興味をもっていたため、様々な術式について学ぶことや多職種で連携することが楽しく、ほどよい緊張感をもって過ごすことができました。その後、外科病棟での周術期看護を経験したことで感染管理に興味を持ち、感染管理認定看護師の資格を取得しました。感染管理は診療科や部署を限定することなく重要であり、感染を予防することが患者さんの安全・安心につながると考えます。

現在は看護師長として手術部に所属しており、手術部の感染対策の徹底と周術期の感染予防を目標に看護管理を実践しています。日々悩むことも多いですが、感染管理認定看護師の資格は、私にとって強みであり、今後は手術部にとどまらず、病院全体の感染管理に視野を広げた看護管理を実践していきたいと考えています。

「倒れる時は、前のめり」

市立豊中病院　**鈴木　徳洋**

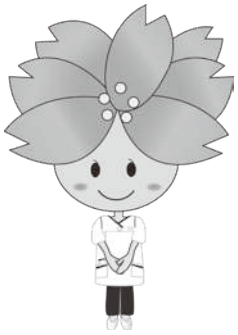
大分大学医学部看護学科が30周年を迎えられたことに、心からお祝い申し上げます。

私は臨床検査技師としての経験を積んだ後、青年海外協力隊に参加し、その活動を終えた後に再び海外での活動を志しました。その際、幅広い領域で活躍できる看護師の可能性を感じ、大分大学医学部看護学科に入学しました。看護学科では、10歳年下の同級生たちから多くの刺激を受け、楽しく充実した４年間を過ごしました。この４年間は、入学時に抱いていた「看護」という概念への漠然とした疑問を解消するための貴重な過程でした。学年が進むにつれ、科学的根拠に基づく看護を学び、それが現在の私の基盤となっています。

卒業後は、国立循環器病センターや現在の勤務先で約10年間、集中治療室に勤務しました。2015年には感染管理認定看護師としての活動を開始し、2020年には特定行為研修を修了しました。現在は、感染管理特定認定看護師として感染対策に加え、感染症診療にも取り組んでいます。

2020年からの新型コロナウイルス感染症パンデミックという未曾有の危機に直面し、多くの貴重な経験を得ました。この時期はまさに「ピンチはチャンス」であり、人間の行動変容や要因などの知識やITスキルをどのように活用するかといった重要性を痛感しました。

今後は、これまでの経験を礎として、行動経済学とデザイン思考を活用し、感染対策だけでなく院内の様々な課題を解決して行きたいと考えています。今後も看護師という枠にとらわれず、「倒れる時は、前のめり」で失敗を恐れず、常に新しい挑戦を続けていきたいと考えています。



9期生（平成17年度卒業）

楽しみながら学び続ける

大分大学医学部附属病院　佐藤　千鶴

MLBの大谷君の応援に精を出し、スタバの桜と桃をこよなく愛する９期卒の佐藤と申します。大学卒業後は附属病院に就職し、今年の４月からがん相談支援センターで勤務しておりました。現在第２子妊娠中で、子育てをしながら貴重な産休を過ごしています。

卒業後は精神科、内科病棟勤務を行う中でがん患者さんの苦痛緩和に興味を持ち、もっと勉強したい！という気持ちが強くなり卒後８年でCNSを目指し大学院へ進学しました。2016年にがん看護CNSを取得し、内科勤務を経て緩和ケアセンターで５年間ACP、症状緩和等のケアに携わりました。不妊治療や家族の体調不良等で一旦退職し、２年間専業主婦、帝王切開での出産・育児を経験しました。復職後、がん相談支援センターでがんゲノム医療、がん地域連携パス、アピアランスケアなどに携わり現在に至ります。

振り返るとどの時期にも、壁にぶつかることは多々ありました。看護学科や修士課程で出会った仲間の存在、恩師から学ぶことの楽しさを教えていただいたからこそ、乗り越えられて今があるのだと思っています。

復職して数か月、仕事と育児の両立の難しさを痛感しました。今までのペースで仕事ができないことへの焦り、今しかない育児もちゃんとしたい！という気持ちのせめぎ合いの毎日でした。離職中、患者や家族側の立場に立ったり、出産・育児を行ったりしたことは今後の人生、看護に影響する貴重な経験になったと思います。40代に突入した自分の身体を労りつつ、仕事も育児も「楽しみながら学び続ける」ことに挑戦したいと思っています。

診療看護師（NP）としての今後の展望

社会医療法人関愛会　大東よつば病院　医療法人彩輝　ヒカリノ診療所　谷山　尚子

私は現在プライマリ・ケア領域で診療看護師（NP）として活動を行っております。主な業務内容は在宅療養支援病院での病棟管理・退院支援・訪問看護、在宅療養支援診療所での訪問看護です。

私が地域医療を志向するようになったのは、本学実習中に医療依存度が高い高齢患者を受け持ったことが一つのきっかけです。患者の希望で自宅退院を調整中でしたが全身状態が不安定で、その当時、私は当該患者が自宅療養する姿を想像できませんでした。残された余生をより良いものにするためには在宅医療による手厚い体制が必要でしたが、それを実現するために団結した在宅スタッフの姿に感銘を受けるとともに、家に帰ることができると分かったときの患者の喜ぶ姿を今でも覚えています。そして私は今、診療看護師（NP）としてその現場で働いています。

高齢化の進展に伴い、医療提供体制のパラダイムシフトが求められる中、地域では多併存疾患患者や医療依存度が高い患者が増加し、限られたリソースの中で持続可能な医療介護提供体制の構築を模索する必要があります。その中で我々診療看護師（NP）がもつ診療の視点および高度実践看護師としての視点は患者の多様なニーズに応えるために非常に有用であると現場で働きながら実感しています。今後も診療看護師（NP）としてより多くの患者家族介入を行っていくとともに、プライマリ・ケア領域における診療看護師（NP）の実践について、その有用性を検討していけたらと考えています。

また、地域に点在する多くの患者を支えるためには人・モノ・カネに係る多くのコストが必要であり、高品質で効率的な医療を展開する上で多職種連携が注目されています。現在、博士課程で本件をテーマに臨床研究に取り組んでいますが、研究成果を医療現場に還元できるよう研鑽を積んでいければと思います。

10期生（平成18年度卒業）

セルフケアを意識した療養指導

大分大学医学部附属病院　工藤　美佳

看護学科10期生の工藤です。大学卒業後から大分大学医学部附属病院で勤務をしています。現在は内科外来で勤務しており、看護相談や糖尿病透析予防指導、フットケアを中心に業務を行っています。卒業後４年目のときに大分県糖尿病療養指導士（大分LCDE）の資格を取得しました。大分LCDEとは糖尿病治療に最も大切な自己管理を、患者に指導する大分県の医療スタッフで、病院内での活動だけでなく、糖尿病予防と糖尿病を持つ方への生活の質（QOL）の向上を目指し、院外での啓発活動を行っています。また、新たに大分LCDEの資格を取得する方の研修会のサポートなども行っております。

学生時代から、疾患の予防行動やセルフケアについて興味を持ち学習をしてきました。就職後も、患者さんの療養指導において、セルフケアを考える機会が多くありました。関わりの中で、患者さんの行動変容につながったり、相談してよかったという声をもらうことで、新たな気づきや学びとなり、次の看護へつながっています。

現在３人の子供の子育て中でもあります。なかなか時間の確保や調整が難しいことも増えてきていますが、いろんなツールを活用し、チームで協力しながら看護を続けていけるように取り組んでいます。今後も患者さんの生活にあわせた療養指導や、現在行っている糖尿病透析予防指導、フットケアの介入を継続していきつつ、また、施設内での後輩育成や地域での大分LCDEの活動の継続を行い、大分県内の生活習慣病の予防活動に貢献していきたいと考えています。

私の礎となるもの

大分市立春日町小学校　生野　祐美

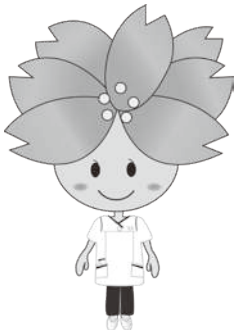
私は現在、大分市内の公立小学校で養護教諭として勤務をしています。小学校の保健室では、健康診断、病気やケガの対応はもちろん、子どもの健康課題を捉えて保健指導をしたり、子どもの困りごとの解決のための心理的ケアをしたりしています。さらに、子どもだけではなく保護者との面談を行うことや、専門機関と連携を図ることも多く、目まぐるしくも充実した日々を送っています。

私は養護教諭として働きはじめて今年で13年目ですが、現在の私の価値観の礎は、大分大学医学部看護学科で過ごした４年間に築かれたと思っています。様々な地での看護実習の経験は、私に『看護』の認識の幅を広げてくれました。また、大学時代にピアカウンセリング活動に参加したことがきっかけで、コーチングなどのコミュニケーション技法に興味を持ち、子どもたちを心身両面からサポートしていきたいと考えるようになりました。

大学を卒業した後は、県外の医療機関の小児と精神の２つの病棟で勤務しました。看護師として医療機関で働いた中で学んだことは数えきれませんが、今でも看護師をしていた頃の経験が活きていると感じることが多々あります。職種は異なりますが、自分の経験はずっとつながって今の自分の支えになっているような気がします。

最近、学校現場では、特に子どもたちの心に寄り添うことの重要性を感じる機会が多く、もっと学んで現場で役立てたいと思い、令和３年に公認心理師の資格を取得しました。

今後も、目の前の子どもたち一人ひとりに真摯に向き合い、寄り添いながら子どもたちの安心できる居場所を保証し続けられるよう努力していきたいと思っています。



11期生（平成19年度卒業）

連携し、継続することの重要性

神戸大学医学部附属病院移植医療部レシピエント移植コーディネーター　香川　友紀

皆さんは『認定レシピエント移植コーディネーター』（以下RTC）という名前を聞いたことがありますか？初めて耳にされた方や移植と付いているので、不慮の事故で脳死になられ、臓器提供をされる方に関わるスタッフを想像された方が多いかもしれません。

私が担っているRTCは、臓器提供を受ける方（レシピエント）に関わるスタッフになります。私は、移植を希望する患者・家族の初診時から継続的に関わり、移植を受けるにあたっての連絡調整、意思決定支援、患者指導などを行っています。そのためには、多くの診療科の医師や看護師との連携・調整を密に行っています。さらに、他院の医療スタッフや日本臓器移植ネットワークとの連携を密に取り、情報交換を行っています。

私は、新人の頃から泌尿器科病棟で働いていたため、入院中の腎移植患者の術後管理や患者指導を行っていましたが、それは移植患者への関わりのほんの一部でした。RTCを目指して、入院前後の移植患者や脳死下移植など突然移植になった患者へも関わるようになったことで、移植患者には、多職種と連携し、継続して関わっていく事が重要だと学びました。連携の重要性は、看護学科での学びでもあり、学生時代の実習では、仲間と連携しながら乗り越えた事を覚えています。大学時代に得た仲間とは今でも繋がっています。

移植患者は移植をしたから治療が終わりではなく、頂いた臓器機能を維持するためには移植をしてからの自己管理が必要不可欠です。患者の自己管理能力を継続させるために、患者会など移植後患者の情報交換の場を設け、患者・家族に継続して関わっていきたいと考えています。

看護師として歩んだ軌跡とこれからの挑戦

JCHO南海医療センター　三股阿沙美

私は現在、大分県佐伯市で手術室副看護師長と兼任して感染管理認定看護師として働いています。手術室では11年目を迎え、プレイングマネージャーとして日々奮闘しています。感染管理認定看護師として活動を始めた年からコロナ禍に見舞われ、クルーズ船患者の対応、沖縄の入院待機ステーション、関連病院への転勤など特殊な経験を積む事ができました。今年度初めて更新審査を迎え、とても濃い5年間だったと振り返りました。

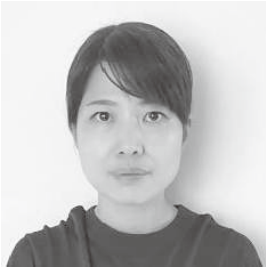
学生時代、毎日がとても楽しく、今でも交流の続く多くの友人に出会うことができました。一方、授業態度は真面目とは言えず、試験前追い込まれるとパソコン室、通称パソ室でよく徹夜もしていました。清拭の演習試験で単位を落としかけたのも懐かしい思い出です。そうして迎えた看護師1年目は、自分の不出来さに自己嫌悪の日々でした。患者さんに与えた不利益は、今も忘れません。新卒で就職した病院を早々に退職し、現職に至ります。そこでやっと心を入れ替え、患者さんにとって自分がどんな看護師でありたいかを考え看護に取り組んできました。尊敬する上司に出会い、学ぶ楽しさを知りました。10年以上が経ち、ようやく看護師として自信をもって患者さんの前に立てていると感じます。学校は看護や医療の知識を得るだけでなく、看護師として必要な思考力や心得を学ぶ場だったのだと今になって思います。

看護師は経験や年齢を問わず、常に学ぶことが求められる職業であると考えます。大学院？看護管理者？感染管理を極める？…今はまだどれもぼんやりしています。しかし、常に学ぶ姿勢を忘れず患者さんと向きあっていく事は、これから先もずっと私の挑戦の一つです。

12期生（平成20年度卒業）

看護学科での学びと地域で行う看護支援について

由布市役所　健康増進課　**牛嶋　由依**



わたしは現在、由布市役所で保健師として働いています。母子保健を担当しており、妊娠期から未就学児の家庭を主に支援しています。

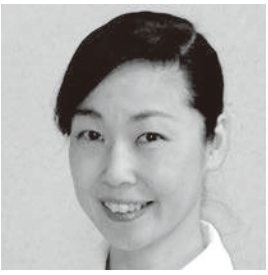
安心して子育てができるように、日々の家庭訪問や健診等で親と子の心身の健康状態の確認を行っています。中には、望まない妊娠や子どもへの愛着形成が不十分であるなど様々な理由で子育てが困難と感じる家庭もあります。そのような時には、病院や保育機関等、関係機関との連携を図り、より良い支援ができるように努めています。

わたしは、看護学科で過ごした４年間の中で、「人は様々な価値観や考えがあるため、対象者であるその人になることはできない。しかし、対象者の視点に立ち、寄り添った支援について考えることが重要」と学んだことが強く心に残っています。その学びから、現在も現場で、対象の方がどのような気持ちであるか、どのような支援を望んでいるのかなど常に考えるようにしています。また、対象者の思いや考えについても共感的姿勢であることを大切にしています。看護学科での学びが、私が行う支援の基礎となっていると感じています。

日々、市民の健康の維持・増進のために、他の保健師と共に努力しています。しかし、対象者への支援の効果等を、データに基づいて客観的に評価することが少ない現状です。今後の挑戦として、研究的手法で支援の評価や今後改善すべきことなどを導き出すことができたらと思っています。

看護師の職場は無限

このみの空企業組合　代表理事　**小野里晴香**



私の実家は、以前は医大ケ丘三丁目にありました。帰省した際に大学敷地内に新しいビルが建っているのを何度か見かけていましたが、そのビルが看護学科であることは数年後に知り、その数年後に自分が入学することになるとは思いもよりませんでした。

国際線客室乗務員として５年間勤務した後、育児をしながら会社員を務め、その後看護学科に入学しました。１年生のときに基礎の授業でプロセスレコードに初めて触れ、「これは何？看護に使うのですか？」と先生に質問したことを覚えています。言いっぱなしやりっぱなしの人生だった私は、看護学のおかげでかなりの軌道修正をすることになりました。

卒業後は大分大学医学部附属病院で９年間勤務、母校の看護学科の基盤看護学領域で１年間勤務したのち大学法人を退職、2019年に設立発起人６名とともに法人を設立しました。法人の主な業務内容は添乗看護（高齢者や障がい者の旅行・移動支援）と介護者の育成（主に外国人技能実習生）などです。設立から半年でコロナ禍に突入し、旅行や講習は皆無となり、法人存続のためにありとあらゆる仕事をしました。母校の非常勤講師をはじめAPU学外講師、各種講習・講演、訪問看護師と、数えればきりがありません。

しかしコロナ禍の数年間で経験した仕事のおかげでさまざまな出会いがあり、現在大きなプロジェクトをいくつか進めています。一つは、インバウンドや県外からの旅行者に向けて添乗看護師がサポートする大分県観光推進事業です。複数他社や学生らと協同で形にしているところです。講演では必ず、看護師が活躍する場所は病院だけではなく地域、海外、上空、果ては宇宙であると伝えています。

13期生（平成21年度卒業）

私が歩む看護の道

大分大学医学部附属病院　井澤由季奈

このたびは、大分大学医学部看護学科が創立30周年を迎えられましたことを心からお喜び申しあげます。30周年という節目に、このような機会を与えてくださり、ありがとうございます。

私は13期生として看護学科を卒業しました。卒業後は、大分大学医学部附属病院に就職し、集中治療部・高度救命センターで10年勤務した後、出産・育児休暇を経て、現在は４歳の双子を育てながら外来看護師として勤務しております。

学生時代は部活動とアルバイトを行いながら学業に励んでおりました。しかし、看護学科の授業は学ぶ内容が膨大であり、加えて看護学実習もあるため、厳しくも忙しい学生生活を必死に送っていたように感じます。そのような学生生活を頑張れたのは同期メンバーの支えがあったからであり、今でも定期的に交流しています。

現在看護師13年目となり、日々の看護業務では、患者さんを生活者として捉えた看護を実践し、日常生活を送りながら困ることなく治療を継続できるよう介入することを目標として実践しています。また、外来診療の専門性に対応していきたいと考え、弾性ストッキング・圧迫療法コンダクターの資格取得のために県外の研修参加や事例提出に励んでおります。仕事に育児と、学生時代と変わらぬ多忙さではありますが、このように多方面で活動できているのは、看護学科での学びと経験のおかげであり、今日の私の原点であるといえます。在学生の皆様におかれましても、自身の夢や目標に向かって充実した学生生活を送ってください。皆様が臨床の現場へ来られる日を心よりお待ちしております。

このたびは、創立30周年、誠におめでとうございます。

看護学生時代の経験から考える認知症看護認定看護師の役割

臼杵市医師会立コスモス病院　髙橋　鉄平

大分大学医学部看護学科13期生として2010年に卒業後、大分大学医学部附属病院にて３年間勤務し、現在は臼杵市医師会立コスモス病院にて認知症看護認定看護師（以下、DCN）として勤務しています。４月からは専従のDCNとしての活動を開始し、神経内科医や薬剤師など多職種で構成する認知症チームのリーダーとして、より多くの患者さんやスタッフの支援ができるよう努めています。

DCNを目指し、患者と共にスタッフの支援も行いたいと考えるようになったきっかけは、学生時代の介護施設での老年看護学実習での経験が大きく影響したように感じています。その実習で私は、リウマチによりポジショニングや移乗時に疼痛のある入所者の介助方法について工夫し、実習終了後も同じ支援が継続できる様、指導教官の指導を受けながら介護士に向けた研修を開くことができました。「患者への良いケアを継続するには、スタッフの支援が欠かせない」このことが、現在のDCNとしての活動の基盤となっています。

DCNを取得する前、身体拘束をされていた認知症の患者の家族からの相談に対して、解決できる知識や環境がなく、悔しい思いをした事がありました。その時に、実習での経験を思い出し、自分自身がもっと知識やスキルを身に着け、患者だけでなく、家族やスタッフの支援をしたいという気持ちが資格取得への原動力になった気がしています。

現在、特定行為研修を受講しており、今後は薬の調整などを含め、より多面的な支援ができるよう努めていきたいと考えています。そして、地域から信頼され、相談される立場となれるよう、一つずつ真摯に課題と向き合っていき、一人でも多くの人の力になりたいと考えています。

14期生（平成22年度卒業）

遺伝カウンセリング：一人ひとりに寄り添う医療

大分大学医学部附属病院　遺伝子診療室　**塚谷　延枝**

私は、大分大学医学部附属病院遺伝子診療室で看護師資格を持つ認定遺伝カウンセラー® として遺伝カウンセリングに携わっています。遺伝カウンセリングでは、染色体や遺伝子が関わる病気や体質について様々な悩みや不安の相談を受けています。認定遺伝カウンセラー® は学会認定の資格で、全国で388名ですが、大分県では私一人だけです。

近年、医学や遺伝子解析技術の進歩により、医療における遺伝情報の活用が急速に進んでいます。遺伝には「継承性」と「多様性」という二つの意味があります。「継承性」とは、親から子へ遺伝情報が受け継がれること、「多様性」は、私たち一人ひとりが遺伝的に異なり、全く同じ人が存在しないこと（唯一性）を意味します。遺伝はすべての人に関わる重要な現象ですが、病気に関連する場合、患者さんやご家族が様々な悩みや不安を抱えることも少なくありません。遺伝カウンセリングでは、臨床遺伝専門医と連携し、遺伝や病気に関する正確な情報提供と心理的サポートを通じて問題解決を支援しています。私は特に「話を聴く」ことを大切にしており、学生時代に学んだ傾聴の姿勢が、私の遺伝カウンセリングの基盤となっています。

多くの方が遺伝に関する悩みを相談できる場があることを知らない現状があります。遺伝カウンセリングはまだ広く知られていませんが、その存在をより多くの人に知ってもらい、悩みを相談できる場があることを伝えたいと考えています。今後も遺伝カウンセリングの充実を図るとともに、一般の方々にも遺伝に関する知識を普及し、誰もが安心して相談できる環境を整えていきたいと思います。

看護の意義を学んだ看護実習

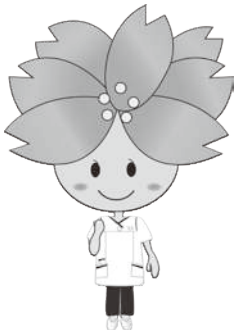
一般財団法人平成紫川会　小倉記念病院　**松村みゆき**

私は卒後より現在まで、福岡県北九州市にあります小倉記念病院にて勤務をしております。当院は救急告示病院として心臓血管外科、循環器内科、脳神経外科に特化しており、さらには地域医療支援病院として、地域住民へ適切な医療の提供を行っています。

私はこれまで脳神経外科病棟での経験が長く、その経験を活かし2020年度より看護部主任として病棟や手術室での管理業務、コロナ病棟の立ち上げにも携わってきました。また福岡ISLSや福岡県災害支援ナース、急性期ケア専門士として、看護の質の向上を目指し院内外での活動も行っています。

私は看護学科で、「看護師の仕事は、患者のこれからの生活設計の手助けをすること」ということを学びました。約15年前、成人看護学実習で脳神経外科の患者を受け持った際に、歩行訓練を提案しましたが受け入れてもらえなかったことがありました。その頃の私は麻痺を改善することばかりに目を向けてしまい、患者の社会的背景や普段のライフスタイルを考えることができていなかったのです。患者から「私には歩くことはそんなに必要ない」と言われて気付き、そこから患者と共にどの身体機能の回復が優先されるかを考え、リハビリプログラムを計画することができました。このような経験を通して急性期看護への興味を持ち、発症後間もない患者の看護に関わりたいと考え、急性期病院への就職を決めました。

入職後、臨床での勤務は多重業務に追われ、実習のように患者一人ひとりにかける時間も取れず、うまくいかないことも沢山ありましたが、自分自身の成長と共に患者に寄り添える後進の育成や専門性の高い病棟作りを目指して、看護管理の道を突き進んでいきたいと考えています。



15期生（平成23年度卒業）

大学での学びと今

JCHO南海医療センター　大垣　香菜

私は現在、循環器内科、心臓血管外科を主とした混合病棟に勤務しています。急性期の患者さんや、慢性期から終末期の患者さんと、様々なステージの方の看護を行っています。日々変化する患者さんに、何がこの方にとって最善か、疾患だけでなく生活背景や想いをアセスメントし看護実践できるよう、チームの一員として頑張っています。

学生時代は、実習や授業でグループワークをする機会が多くあり、当時は苦手意識がありました。しかし、自分の意見を言語化することの大切さや、相手の意見を受け入れ問題解決に向けて話し合うことの大切さを学びました。現在は、積極的に意見を言い、カンファレンスや多職種連携の場面で活かされていると感じています。また、学生時代に学んだ「寄り添う看護」は、忙しさの中でも、日々患者さんやご家族への関わりを振り返り、心に寄り添うという私の看護観の礎となっています。

現在、心不全療養指導士取得に向けて勉強している段階です。今後は、慢性疾患を抱える患者さんへの看護に対して知識、技術を深めていき、一人ひとりの患者さんが、少しでも自己管理を継続しながら生活できるよう援助していきたいと考えています。また、得た知識を後輩などスタッフにも伝えていき、多職種のチームで考えながら、よりよい実践をしていきたいと思っています。

最後になりましたが、看護学科30周年、誠におめでとうございます。ますますのご発展をお祈りしております。

コミュニティナースとしての活動

GOODSTORIES合同会社　佐野　真樹

私は、卒後に大学の附属病院で勤務した後、コミュニティナースの活動拠点として、『public house えてふぇて』という飲食店兼コミュニティースペースを、同じく看護師である妻と開設し運営しています。コミュニティナースとは、「地域の住民たちとの関係性を深めることで、健康的なまちづくりに貢献する医療人材」のことで、全国に活動が広がっています。

私がこの活動に興味を持ったのは、看護学科で看護の可能性の大きさを学び得たためだと考えます。対象を深く理解するためには全人的な捉え方が必要であり、疾患・治療だけではなくその人の生活や暮らしに寄り添って考えることが大切なことだと学びました。講義の中でICFの生活機能モデルに触れた際は、「活動」や「参加」の部分に看護が働きかけるにはどのようなことが出来るだろうか、と思いを巡らしていました。病院勤務では、入退院を繰り返す患者と接することが多く、退院した後の地域生活が豊かであるには何が必要だろうかと考える契機となりました。

このような学びと経験から、暮らしの身近なところで、元気なうちから、毎日の嬉しいや楽しいを一緒に作り、ウェルビーイングに寄与するコミュニティナースの実践につながりました。

現在は、気軽に集える場としての機能の他、外出の動機となり住民同士のつながりを作るためのマルシェ、認知症になっても住みやすい町づくりを目指すオレンジカフェ、多世代交流や体験提供の場としてのこども食堂などを実施しています。今後は、「まちの保健室」としての機能を充実させ、地域の人の力をより引き出し、まちの可能性を広げるべく、行政とも連携しながら活動を拡充させていきたいと考えています。

16期生（平成24年度卒業）

大学での学びと現在の活動

大分大学医学部附属病院　**仙波　亘策**

私は看護学科を卒業後、附属病院に入職し、今年度から医療安全管理部の専従副看護師長として勤務しています。附属病院の医療安全管理に携わることになるとは、学生時代には想像もしていませんでした。医療安全管理部では、医師・薬剤師・看護師・事務職員など、多職種で構成されており、各部署から報告されたインシデント等について情報収集を行い、多職種の視点で原因の分析や再発防止策の検討を行っています。また、院内研修を通じて職員に安全教育を行う役割も担っており、職員が医療安全に対する理解を深め、現場で実践できるよう支援しています。現在の仕事は、病棟で患者さん一人ひとりと直接向き合う業務とは異なり、組織全体を俯瞰しながら活動する必要があり、病棟での実践とは違った難しさがあります。しかし、一つ一つの取り組みが患者さんだけでなく、スタッフの安全を守ることに直結するため、大きなやりがいを感じています。

大学の授業や実習では、グループワークを行う機会が多くありました。その中で、相手の立場を考えながら意見を聞き、自分の考えを整理して伝えることを学びました。この経験は、他職種や様々な病棟のスタッフと関わる機会が多い現在の業務の中で活かされていると感じています。

医療安全は、医療の質を保証する上で重要な要素であり、医療の質そのものであるとも言われています。医療安全管理部に配属されたことをきっかけに、さらに医療安全に関する学びを深めたいと考えています。また、附属病院の看護管理者の一員としての役割が発揮できるよう取り組んでいきたいと考えています。

“みりょく”ある中堅期保健師に向けて

大分県南部保健所　地域保健課　疾病・感染症対策班　**芋迫英里香**

保健師として働いて約10年が経過しました。現在は、精神保健分野（精神保健福祉対策、自殺予防、依存症対策等）を担当しながら、疾病の発症予防や重症化予防ができる地域づくりを目標に業務を行っています。

また、中堅期の保健師として、人材育成や組織運営の役割も担う年代になり、良き先輩後輩に恵まれながら、地域住民の健康づくりに向けた保健活動に奮闘している日々です。

県保健師は定期的な人事異動があり、これまで多くの分野に携わることができました。働き盛り世代の健康づくりや健康経営の推進、がんサロンの運営支援、高齢者の介護予防と自立支援、医療と介護の連携強化、新型コロナウイルス感染症の対応等々。また、県内での豪雨災害や、令和６年１月に発生した能登半島地震では、保健師チームとして被災地に派遣され、災害時の保健活動にも従事しました。

どの場面においても大学での学びが基礎にあり、悩んだ時には“看護の本質ってなんだったかな？”と、学生時代に関わった事例や実習で感じ得たこと、理論やモデル等に立ち返ることも多いです。

今年度は、県保健師の人材育成の一環として「国立保健医療科学院」の長期研修（約３ヶ月）を受講し、公衆衛生の向上を目指す全国の医師や保健師と一緒に、実務から離れて保健活動に向き合える貴重な機会をいただきました。

また、現在は保健師海外視察研修のプロジェクトチームにも参加しており、国や制度の違いの切り口から、保健師の立ち位置や求められる役割等について、チームメンバーと一緒に調べたり学んだりしています。

このように、通常業務に加え、この時期だからこそできる機会を捉え、様々な体験のなかで保健師の活動や基盤について一歩外から眺め、保健師の“みりょく”（魅力、見力、看力etc）って何だろう？と考えたりしながら、看護の基礎に立ち返りつつ、中堅期ならではの味が出せるよう、幅広い視野や多様な考えを養っていきたいと思っています。

17期生（平成25年度卒業）

これまでの学びと今後の目標

大分市役所 健康課　井川　祥子

私は現在、保健師として大分市に就職し、地域保健活動を行っています。医療が必要になる前の段階から予防の必要性や方法について助言したり、妊産婦の健康管理や乳幼児の順調な発育・発達を支援したりしています。対象者と関わる時は、どういう状況でどのように現状や今後について捉えているかを把握し、相手に必要な情報は何かを考えながら日々仕事に励んでいます。

地域に住む方々と関わる時、自分が関わるのはその方の人生の一時点であることを意識し、今までの生き方・考え方や今後どうなりたいと思っているか、そのために今できることは何かを一緒に考えるようにしています。「点ではなく線でみる」という捉え方は学生時代と看護師時代に学び、今もそれが役立っています。

私は、その人自身がベストだと思える選択ができるように色んな選択肢を提供できる保健師になりたいと考えています。本人や家族が納得して今後の人生をより健康に過ごすお手伝いができれば最高です。そのために、様々な部署で視野を広げる経験をしつつ、色んな価値観や取り組みを知ることにより、ものの見方や考え方の柔軟性を養いたいです。

そして、積極的に新しいことに挑戦し、ワクワクしながら仕事をしたいです。そういう気持ちで切磋琢磨し合いながら働けるよう、自分にできることを常に考えたいと思います。

より良い看護を学び、伝え続けていきたい

大分大学医学部看護学科　実践看護学講座　成人看護学領域　佐藤昂太朗

私は現在、大分大学医学部看護学科の実践看護学講座　成人看護学領域の助手として、恩師の先生方や学生とともに看護学を探究する日々を過ごしています。

今に至る経緯ですが、大学時代から救命救急領域での看護実践に憧れを抱き、卒業後は大分大学医学部附属病院に就職しました。就職後は、３つの外科・内科病棟、救命救急センター、放射線部・内視鏡部と様々な領域での看護を学ぶ機会を頂きました。部署によって特色があることを学びつつ、看護の根幹は同じものだと、実践を重ねていく中で気づくことがありました。また、プライベートでは年齢を重ねていくにつれて、結婚や出産、育児、病気や別れ等、山あり谷あり様々なライフイベントを経験しました。自分がその立場になったからこそ、患者様の気持ちがより身近に感じたと同時に、真に理解することの難しさや、看護観や倫理観の重要性を改めて考えさせられました。このような気づきや学びは、自分を成長させてくれたと同時に、看護学をより探究し、実践を通じて伝えていきたいと思うきっかけになりました。そんな時、偶然にも母校で教員になる機会を頂き、今の職場に辿り着きました。人生はいつ何がおきるか分からないなとつくづく実感しています。

今、自分が挑戦していることは、より良い看護とは何かを日々考え、伝え続けていくことです。そのためには、より深く看護を学ぶことが大切と考え、大分大学の大学院修士課程に進学しています。仕事に勉強にプライベートに目まぐるしい日々ですが、周囲の温かい支援に感謝し、臨機応変に、そしてパワフルに挑戦し続けていきたいと思います。

18期生（平成26年度卒業）

「暮らし」と「医療」をつなげる～その人らしい最期を迎えるために看護師にできること～

ゆめの木訪問看護ステーション　**尾﨑俊太郎**

私は看護学科を卒業後、地元である宮崎県立病院へ就職し、６年間働いた後に、市役所の保健師に転職しました。その後、延岡の地域医療に携わりたいという強い思いがあり、公務員を退職し、現在は訪問看護ステーションの管理者として日々奔走しています。

看護学科で一番印象に残っていることは、急性期看護学実習での手術室見学です。私は膀胱癌の患者さんを担当させてもらい、その方の手術を見学しました。尿管を電気メスで切断した時に「この人はもう自分の意志で尿を出すことが出来ないんだ」と悲しくなったことを覚えています。手術としてはほんの数秒の出来事であり、一工程に過ぎませんが、この数秒でこの患者さんの今後の生活が激変してしまうことに大きな衝撃を受けました。それから、がん看護に興味を持ち、入職時はがん治療センターでがん看護を学び、緩和ケアにおける疼痛コントロールなど現在の訪問看護に活かされています。

私の住む延岡市は高齢化率が高く、令和５年時点で35％でした。超高齢化社会である日本では、医療資源を適切に配分できるよう在宅医療が必須となってきますが、延岡市は訪問診療に特化したクリニックが少なく、自宅で生活できなくなった住民は施設入所や入院を余儀なくされてしまっているのが現状です。訪問看護師として、これまで培ってきた知識や、人と関わることが得意な自分の特性を活かし、医師やケアマネジャーをはじめとする他職種と足並みを揃えながら患者やその家族を支えていき、延岡市でも自宅で最期を迎えるのが当たり前になるような「文化」を作っていけるよう、看護の力で地域医療を発展させたいと思います。

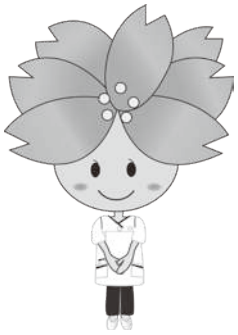
看護学科での学びから培われた自己の看護

大分大学医学部附属病院　看護師　**本　香織**

この度は、看護学科創設30周年、誠におめでとうございます。私は18期生として卒業し、現在、附属病院の整形外科・放射線科の病棟で看護師として勤務しています。特定機能病院の看護師として、急性期における合併症の予防や化学療法時の看護を実践しながら、退院後の生活を見据えたADLや、セルフケア能力向上へ向けたかかわりに取り組んでいます。

実は、私は大学を一度退学し、再入学した経験があります。子どもが３人いる中、30歳で再入学を志すきっかけとなったのは、退学時にチューターの先生から再入学の制度について伺っていた事でした。あの時先生に声をかけて頂いていなかったら、看護師として働くことはできていませんでした。先生へは、この場を借りて深く感謝申し上げたいと思います。そして入学後もたくさんの先生方、同級生、家族のサポートを得て学習することができました。そのため、人間は様々な背景を持ち生活しており、助け合って生きている事を、身を持って実感しました。私が現在、様々な患者さんの背景を理解し、退院後の生活を見据えた個別的なサポートをしていきたいと思えるのも、看護学科でのこのような経験があったからだと考えています。

今後も看護学科での学びや、これまでの看護師としての経験を活かし、患者さんの退院後の生活を支えていきたいと思います。最後になりましたが、30周年を節目に看護学科が今後も益々発展されることを願っています。



19期生（平成27年度卒業）

わたしが保健師として大切にしたいこと

由布市役所　**池田　眞理**

私は現在、市町村の保健師として仕事をしています。今の主な業務内容は、国民健康保険の方の健診受診後の特定保健指導などです。健康診査を受け特定保健指導の対象になった方が、生活習慣病を予防するため、生活改善の必要性に気づき行動変容につなげることができるように、家庭訪問などで個別の支援をしたり、市の現状に合わせた特定保健指導の実施体制などを考えたりもしています。

市の保健師として、市民の方ひとりひとりがいつまでも健康に地域で生活していくことができるように、日々の業務に努めているところです。

学生時代のことでよく記憶にあるのは、地域看護学の実習で「目的的に情報をとっていきなさい」とご指導を受けたことです。「なぜその情報が必要だと思ったのか、なぜ自分がそうしたいと思ったのか」しっかりと考えていくことが大切なのだと実習や研究を通して教わりました。正直に言うと、学生時代はあまりその言葉の意味を自分の中に落とし込むことができていなかったように思います。しかし、実際に保健師として働く中で、市民の方や地域を支援していくためには、土台となる支援の根拠をしっかりと考えていく過程がとても大切なことだと実感しています。「これをする目的は何なのか…」と日々自分自身に問いかけながら仕事をする中で、学生時代に先生方がおっしゃっていた言葉の意味を痛感しているところです。

入庁して８年になりますが、まだまだ保健師としては未熟で、日々勉強中です。目指す保健師像は、個の支援を大切に出来る保健師です。関わるケース１つ１つを大切にして、市民の方にとって頼りになる保健師になれるように頑張っていきたいと思います。

大分大学医学部看護学科で過ごした学び

滋賀医科大学　**坂本　真優**

私は、大分大学医学部看護学科に、第19期生として入学しました。現在は、滋賀医科大学医学部看護学科で、精神看護学領域の助教として勤務しています。学部生の頃、看護学実習において、自分自身の疾患や特性、そこから生じる様々な物事について『自分ではうまく表現することのできない苦しみ・辛さ』を抱えている方々に出会いました。出会いを通し、患者さんの発言の意味は何か、その行動の意図は何かについて、表情、行動等、患者さんの発するサインを丁寧に受け取るために、看護理論や疾患に関する知識から根拠を持つアセスメントを行うことを学び、看護師には常に患者さんに注意を払い、その時々に必要な看護支援を適切に提供する責任を持つことを学びました。

今後挑戦したいこととして、患者さんを理解し支援しようとするときに、看護師の行う繊細な判断や実践は目に見えにくく、伝わりにくいものも多いです。精神看護の現場で発揮されている、看護師の専門職としての力を発信していけるよう、学習を続けながら研究に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりますが、私は学部、修士の６年間の在籍期間、全領域の先生方に本当にのびのびと育てていただきました。厳しくも温かい指導をいただき、常に味方でいてくださったこと、毅然とした姿勢で多職種と交流する姿を示してくださったことは、今の私が学生や患者さんと向き合う姿勢の礎となっています。大分大学医学部看護学科の益々のご発展を、心からお祈り申し上げます。

20期生（平成28年度卒業）

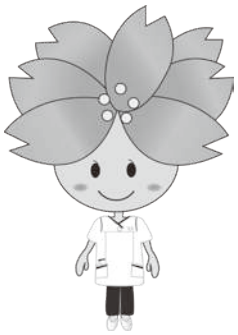
摂食嚥下の看護

大分大学医学部附属病院　小田真里佳

卒業後、附属病院に就職し現在看護師８年目として働いています。入職後６年間は耳鼻咽喉科・歯科口腔外科病棟、昨年からは小児科病棟に異動となり小児を対象とする看護の楽しさや難しさを感じながら奮闘する日々を送っています。

大学の総合実習では摂食嚥下障害を持った患者さんを担当させていただき、食べることが障害される苦悩を患者さんの経験を通して知ることができました。その中で医師、看護師、言語聴覚士、栄養士と言った多職種で患者さんを支え、リハビリや食事形態、食べ方の工夫をしながら再び食べることができるように支援していくことの重要性を学びました。実習期間の中で患者さんの望む形態まで引き上げることはできませんでしたが、食べるという楽しみを支える看護の素晴らしさを感じることができました。入職後も縁があり嚥下に関わる病棟で働くことができ、看護師として摂食嚥下の看護に関わることができました。長期的に患者さんと関わることで変化を感じたり、目標を達成する喜びを知ることができました。

昨年度は、院内認定看護師の育成を目的としたアクティブナース研修を受け、改めて食支援を学ぶ機会を得ることができました。研修を経て摂食嚥下の正しい評価や介入の方法を広め一人でも多くの患者さんが食べるという楽しみを失わないように支援していきたいと思うようになりました。現在小児科病棟で働いていますが、小児科では意思疎通が難しく指示が通らなかったり、口を動かす体操も真似してもらうことは困難であり、今までと同じ方法ではうまくいかず悩むことも多いです。研修を受けて知識を得たり、言語聴覚士と協働し対象に合う方法を検討したりして、学びながら小児科の摂食嚥下の支援をしていきたいと思います。



医療は患者主体である

平成紫川会小倉記念病院　松尾　和馬

私は新卒から８年目の現在まで、平成紫川会小倉記念病院の手術室で多忙な日々を過ごしています。当院は北九州市に在り、政令指定都市の中でも高齢化率が高く、患者の病態は様々なものとなっています。高齢化、多様化する患者に対して、カテーテル手術やロボット支援下手術の件数が増加しているため、後輩指導や理解しやすい手順書の作成を行っています。

私が学生時代に学んだことは、「痛みは千差万別であり、主観的情動体験である」ということです。大学病院の実習では多くの患者に関わらせていただき、手術起因の痛みだけでなく、心の痛みに対するケアも学ぶことができました。

現在、手術室で勤務しているため、多くの手術起因の痛みの訴えを間近に見ています。学生の頃からの学びも踏まえ、可能な限り痛みを軽減したいと思い、多職種による疼痛コントロールに特化した術後疼痛管理チームを立ち上げ、昨年度より活動を行っています。手術が終わった後は病棟スタッフや主治医だけに管理をお任せするのではなく、専門の疼痛管理チームが介入することで個別性のある疼痛コントロールが可能となるような活動です。一方的に疼痛管理を行うのではなく、あくまでも患者がチームの中心になり主体的に参画することで、質の高い疼痛コントロールにつなげることができると考えています。これは疼痛管理に限ったことではなく、医療全体に言えることだと思います。

これから先、手術室以外でも勤務することになると思いますが、これまでの経験から得た私の信念として、「医療は患者主体である」ということを忘れることなく、適切で可能性の高い医療を提供していきたいと思います。

21期生（平成29年度卒業）

学生時代の経験は人生を作る

日本ストライカー株式会社　ジョイントリプレースメント/サージカル事業本部　Makoセールス＆MPS　Mako Product Specialist　**川路　梨紗**

この度は看護学科30周年おめでとうございます。急性期病院にて手術室や救急外来での勤務を経験し、現在はアメリカに本社を置く医療機器メーカーに所属しています。担当は国内各地の病院で手術用ロボットを操作し手術のサポートをすることです。

私の目標は「この人なら安心してこの手術を任せることができる」と思っていただくことです。これは学生時代からの看護観と変わりません。手術室勤務時代も「安心して手術を任せられる看護師」を目指していました。手術を受ける患者と同じように初めて手術を行う医師も多くの不安を感じています。専門職として手術室スタッフを支えたいと思い現職に至りました。

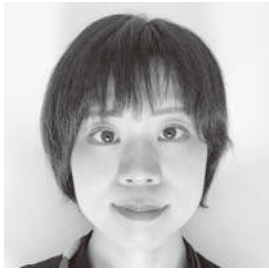
安心して手術を行ってもらうべく、多くの時間を勉強と練習に費やしました。研修は非常に大変でプレッシャーに押し潰されかけたこともありましたが、学生時代に一所懸命に頑張った経験があったため乗り越えることができました。実習やグループワーク等、過密なスケジュールを同期たちと励まし合い取り組んだ日々は忘れられません。現職に至った理由、仕事で大事にしていること、勉強の仕方等、学生時代に培った様々な経験は私の貴重な財産となっています。現在は国内を飛び回って働いていますが海外も身近に感じる仕事です。今後は世界にも目を向けて挑戦していきたいと思います。

母校が30周年を迎えたことを大変嬉しく思います。そして戦友である同期たち、育てあげてくださった先生方には改めて感謝申し上げます。後輩たちには夢を持って学んでいただきたいです。

大分大学医学部看護学科のさらなる発展と、卒業生、関係者の皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

地域住民に寄り添った保健師に

大分市役所　**山本　和**



私は、大分市役所で保健師として働いています。保健師の仕事は、健康寿命の延伸を目指すとともに、地域の健康課題を見極め、住民とともに、予防活動を進めることです。具体的には、乳幼児の発達支援、生活習慣病の重症化予防、高齢者の介護予防、自殺予防、感染症の蔓延防止など、市民の健康を守るために幅広い活動を行っています。

令和３年度からは保健予防課の感染症対策担当班に所属し、新型コロナウイルス感染症に対して最前線で業務にあたりました。陽性者の健康管理から入院調整、行動調査による濃厚接触者の特定とPCR検査の実施、施設に対する感染症予防の指導など、業務は多岐に渡り、毎日深夜まで続く業務に、職員全員、疲労困憊でした。そのような中でも強く感じたことは、看護学科で学んだ「対象を生活者としてみる視点」が大切だということです。不明点や偏見も多い新興感染症が蔓延し、誰もが不安を抱える中で、つい感染症予防にばかり目が向きがちでした。しかし、相手の気持ちに寄り添うこと、その人の普段の生活と予防行動の折り合いをつけていくことの重要性を改めて実感しました。

今後は、これまで以上に地域に出向いて、住民との関係性をもっと築いていきたいです。「困ったことがあったらあの人に相談しよう」と気軽に頼ってもらえるような存在を目指します。また、今後は事業の企画運営にも挑戦していきたいと考えます。これまでの地区活動で感じてきた住民ニーズを基に、いま求められている事は何かを考えて形にしていけたらと思います。

22期生（平成30年度卒業）

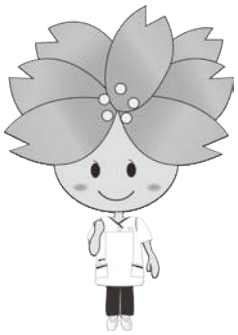
看護で大切にしていること

大分大学医学部附属病院　**園田真梨香**

私は現在、大分大学医学部附属病院の５階東病棟（腎臓外科・泌尿器科・麻酔科）で勤務しています。５階東病棟では、ロボット支援下手術や腎移植を含む外科的治療や抗癌剤、疼痛管理を受ける方を対象とした看護を行っています。現在入職して６年目です。３年間は慢性期病棟で働き、今の病棟では３年目となりました。

私が看護学科在籍中に印象に残っているのは、ローテーション実習です。ローテーション実習では、患者とコミュニケーションをとることで患者理解が深まり、信頼関係を築くことができ、よりよい看護につながることを学びました。慢性期実習で受け持った患者さんと最後の挨拶をした時、お互いに泣いて挨拶をしたことが今でも強く印象に残っており、看護のやりがいを感じた経験でした。実習でのこの学びは働き始めてからも大切にしていることの１つです。コミュニケーションを通して、患者さんが今までどのような生活を送っていたのか、これからどのような生活を送りたいのかを知り、同じ目標に向かって看護師が支援していくことが大切だと考え、日々の看護を行っています。日々業務に追われていると、患者さんとあまり話せていないなと反省することもありますが、患者さんと意図的にコミュニケーションをとり、一緒に退院後の生活を考えていくことをこれからも大切にしていきたいと思います。

現在は実習指導者として看護学科の学生と関わる機会も多くなっています。実習を通して、看護の楽しさを共有し、看護観を深めることができるように関わっていきたいと思っています。



切れ目のない看護の提供を目指して

大分大学医学部附属病院　**川西　優花**

私は看護学科を卒業した後、大分大学医学部附属病院の消化器内科で働いています。消化器内科では診断のための内視鏡検査や内視鏡的治療、肝疾患の治療など様々な検査・治療が実施されています。また、最近では病棟外来一元化のもと、外来看護にも携わり、退院後の患者さんへの継続看護にも力を入れています。

消化器内科で働く中で、大切だと感じたことは患者さんの意思決定を支え、患者さんの望む生活が送れるような介入を行うことです。私は看護学科に在学中、実習を通して患者さんを「生活者」としてとらえることの大切さについて学びました。消化器内科では、長い経過をたどる患者さんが多く、その疾患の診断から関わることも少なくありません。入院中に検査をし、外来で診断を受け、入院して治療を受ける、この一連の関わりの中では、患者さんの揺れ動く心のケアも必要となってきます。患者さんの人生観や価値観、希望を知るためにACP（アドバンス・ケア・プランニング）を活用して患者さんの意思決定を支え、外来でも継続した支援を行うことで、患者さんが自身の生活を大切にしながら安心して治療を受けられることに繋がると考えています。

今後はそうした患者さんへの継続した支援に力を入れ、病棟でのACPカンファレンスの実施や外来での意思決定の関わりをより積極的に実施していきたいと考えています。患者さんが安心して治療を受け続けることのできる環境を作り、切れ目のない看護の提供ができるよう、日々邁進していきます。

23期生（令和元年度卒業）

手術室看護師として患者に寄り添う看護

大分大学医学部附属病院　看護部　手術部　**横地　美月**

私は看護学科を卒業してから附属病院に就職し、現在は手術室看護師として勤務しています。看護学科では、患者一人ひとりの個別性を尊重し、その人に最も適した看護を提供する重要性を学びました。この学びは、手術室看護師としての業務において最も大切にしている基盤となっています。

手術室看護師として5年目を迎え、全ての診療科の手術に対応できるようになりました。外回り看護師として患者さんと関わる機会も多くあります。外回り看護師としての業務を行う中で、手術室看護師は患者さんの不安や緊張を和らげ、安心感を持って手術に臨んでもらうための環境を整えることが求められていると感じています。手術は患者さんにとって一生に一度の経験であり、その瞬間を共に過ごす看護師として、どのように寄り添い、支えられるかが非常に重要です。同じ手術を受ける患者さんであっても背景は様々であり、看護学科で培った「患者の個別性を踏まえた看護実践」は、この手術室という特別な環境においても、大きな意味を持つことを実感しています。

今後は、手術室看護師としてさらに技術や知識を深め、より高度で専門的な看護を提供できるようになりたいと考えています。具体的には、周手術期看護に必要な知識を積極的に学び、自身のスキルを向上させていくつもりです。また、手術室という場での看護師の役割を再認識し、後輩たちへの指導や、医療チーム全体の連携をより強固にするための取り組みにも挑戦したいと考えています。

看護学科での学びを基盤に、これからも手術室看護師としての道を邁進し続け、患者さん一人ひとりに寄り添う看護を提供できるよう努めていきたいです。

看護学科での学びと産業保健師としての活動

味の素食品株式会社 静岡工場　**宮﨑　理紗**（旧姓：有田）

この度は大分大学医学部看護学科が30周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。

私は大分県で生まれ育ち、地元の行政保健に携わりたいと考え、大分大学医学部看護学科へ23期生として入学しました。卒業後は臨床経験を積むために名古屋大学医学部付属病院で看護師として3年勤め、現在は産業保健師として2年目になります。

現職では、労働による健康障害の予防に加え、働く人の疾病予防や健康増進に向けた活動を行っています。産業保健領域では「企業の利益につながるか」という視点も忘れずに活動を展開するよう心掛けています。

看護学科での印象的な学びはフィリピン研修であり、環境や思想を含むヘルスリテラシーが健康に与える影響を強く感じました。また、卒業研究のテーマに「ナッジ」を掲げ、ポピュレーションアプローチや健康無関心層へのアプローチについて学びを深めました。

卒業後は看護師として働く中で、仕事を理由に受診を後回しにした後悔や治療のために退職した声を聴き、働く世代の健康管理に携わりたいと考え、産業保健領域へ入りました。

産業保健領域では働く人が対象のため、「健康管理を目的に来る人ではない」という点が医療機関と異なります。この働く人が、楽しく健康への関心を高めることに貢献できるよう、大学での学びや経験を活かして活動を続けていきたいです。

今後も様々な場所で働く予定のため、多様な職場での学びや経験を楽しみながら、最終的には地元の健康を高める活動ができればと考えています。

未筆ながら、大分大学医学部看護学科の一層のご発展と皆様方のご活躍をお祈りいたします。

24期生（令和2年度卒業）

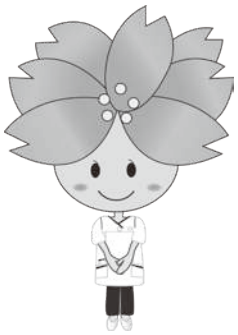
看護学科30周年記念に寄せて

株式会社アイロムOM　**末永名央人**

私は、看護学科を卒業後、株式会社アイロムOMに入社し、臨床研究コーディネーターという職種に就き、主に医療施設で活動しております。今回は臨床研究の中でも治験に絞ってのお話になります。治験とは我が国において未承認、いわば世に出回る前の医薬品または医療機器のデータ収集を目的とした研究を指します。私たちは製薬会社から研究を受託した医療施設にて、医療スタッフを支援しながら、有効性と安全性を柱とした情報を収集し、製薬会社への報告を行っております。

私は、患者の尊厳と心身の安全を最優先事項とし、個人の特性把握と疾患理解をもとに、他と連携しながら、患者一人ひとりにそったケアを構築することを看護学科で学びました。「看護師」とは異なった職ではありますが、私たちが接する相手もまた患者であります。未承認の研究段階である医薬品や医療機器に不安を持ちながらも、数少ない選択肢の中で、少なからず治験に期待を寄せ参加しています。私は個々人に合わせたコミュニケーションを取りながら、症状や不安を聴取し、医療スタッフと連携して、患者に適した医療が円滑に行われることを目指しています。

日々進歩する医療とともに、臨床研究もオンコロジー領域や再生医療を取り入れた治験等開発が進んでいます。また、リモート化やグローバル化なども発展を続け、臨床研究コーディネーターに求められるタスクが複雑化しています。変化に沿った技術を習得したいと思っていますし、常に安全に配慮しながら、患者一人ひとりに寄り添うということを心の中心に置いて、これからも治験に携わっていきたいと思っています。



在学時代の経験を活かした保健活動

大分県福祉保健部健康増進室生活習慣病対策班　**行部　千文**

私は、大分県で保健師として勤務しており、採用4年目になります。3年間保健所にて結核対策や難病対策を担当し、今年度から県庁にて、糖尿病性腎症重症化予防推進事業を含む、糖尿病対策を担当しています。

看護学科在学時の経験が、私自身の保健師活動に大いに活かされていると実感しています。例えば、老年看護学領域の総合実習で、認知症当事者やその支援者との関わりから、ピアサポートの意義や関係機関との連携の重要性を学びました。そして、実務でも、同じ悩みを抱える難病患者同士の支援として、ALS患者のマッチング訪問やパーキンソン病の患者・家族交流会等の企画を行うことができました。

また、看護研究では、自作の動画を活用した高齢者のレクリエーション活動について検討し、ICTの有効性について学びました。実務の中でも、コロナ禍において看護職が採痰技術を習得できる機会を設けたいと考え、結核拠点病院の感染管理認定看護師及び慢性呼吸器疾患看護認定看護師と連携して、採痰実技動画を作成することができました。作成した実技動画は、結核の早期発見・早期治療に向けて、地域の医療機関に貸し出せるようDVDを作成し、結核採痰研修会でも活用しました。

私は、このような保健活動を通して、地域の課題を把握し、個から集団、集団から地域へと事業を展開する重要性を学びました。今後も、PDCAサイクルを意識した保健活動を展開し、施策形成ができる保健師を目指していきたいです。

25期生（令和3年度卒業）

大分大学医学部看護学科創立30周年に寄せて

東部保健所国東保健部　**後藤　彩夏**

大分大学医学部看護学科創立30周年、心よりお祝い申し上げます。

私は25期生として卒業し、早いもので2年半が経ちました。大学生活を振り返ると、長いような短いような、多くの先生方や仲間に支えられた4年間でした。25期生は、3年次から新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けました。友人と会って一緒に講義を受けることは少なくなり、病院実習の時間も制限され、感染対策を十分に行い、短時間で患者さんとコミュニケーションをとったり、情報収集したりと、実習を行う難しさを実感しました。たくさん悩みながらの実習でしたが、先生方から助言をいただいたり、同期のみんなと励まし合いながら乗り越えることができました。

大学卒業後は大分県の保健師として就職しました。当時もコロナ禍真っ只中で、感染者が最も多い第7波の時期でした。担当業務はあるものの、コロナ対応が中心で、十分な保健活動ができない事にもどかしさを感じることもありました。毎朝、陽性者の健康観察から始まり、疫学調査を何件しても終わりが見えず、気づけば夜を迎える毎日でした。そんな苦しい状況も経験しましたが、改めて健康づくり、予防活動の大切さを再認識する機会になりました。

大学生活、入職当時の経験を振り返ると辛かったことは多かったですが、乗り越えた経験が今の私を支える強みになっています。現在は通常の保健活動に戻り、難病保健、精神保健、母子保健など様々な分野に携わることができ、とても充実した毎日を送っています。

保健師としてのキャリアはまだ始まったばかりですが、地域住民との出会いを大切に、持ち前の明るさを発揮しながら、楽しく保健活動ができるよう努力していきたいと思います。

大学時代に学んだ大切な考え方

公益財団法人　がん研究会　有明病院　**中野　真帆**

私は現在、がん看護を学びたく、がん研究会有明病院の消化器化学療法内科で看護師3年目として働いています。

大学時代には、座学と実習それぞれで多くのことを学びました。座学では、グループで「Paper patient」をアセスメントし、必要なケアは何かを話し合いながら看護計画を立てる時間がありました。私は当初、患者の「辛い」「悲しい」といった言葉を直接的に精神的苦痛と結びつけていました。しかし、グループメンバーや先生方とともに一つひとつアセスメントしていく中で、感情を表す言葉は、身体、精神、社会、スピリチュアル的な4つの側面に影響されていることに気づきました。これは、1年生のころから繰り返し教えられていたことでしたが、実際に自分の中で深く理解できたのは、この経験が大きかったと思います。この経験以降、私は患者の言葉の受けとめ方やアセスメントの視点が変わり、患者へのアプローチ方法も広がりました。

実習期間はコロナ渦で、多くの学校が実習を行えない中、私たちは先生方の尽力のおかげで実習に行くことができました。実習では、実際に患者を目の前にして戸惑ったことを覚えています。毎日のカンファレンスや先生・看護師からのアドバイスを受ける中で、私は病気をもった患者と健康な自分を無意識に異なる存在として考えていたことに気づきました。患者も私と同じ人間であり、人間同士の関わり方に違いはないということです。当時の私は病気を持つ人に何かを「してあげよう」とする傲慢な考えを持っていましたが、患者と看護師という立場の違いはあっても、まずは人間同士として、互いに教え合い、助け合いながら関係を築いていくことが重要だと実習を通じて学びました。

私は将来的には終末期医療に携わりたいと考えています。最期の時間を患者やその家族と共に過ごし、素敵な時間を共に創り出せる看護師になりたいと思います。大学で学んだことを基盤にして、これからも目標とする看護師像に近づけるように努力を続けていきます。

26期生（令和4年度卒業）

看護学科での経験と今後大切にしたい看護について

大分大学医学部附属病院　2階東病棟　**片岡　桃音**

現在私は、大分大学医学部附属病院の脳神経外科・眼科の混合病棟において看護師として働いています。脳神経外科では、意思疎通の難しい方、運動障害や嚥下障害などを抱えている方が多く、一人ひとりに合わせた日常生活動作の援助やリハビリテーションが必要です。そのため、日々、細かな観察やアセスメントを繰り返しながら看護を行っています。眼科では、患者さんの見え方を把握し、医師からの安静・保清の指示に応じた日常生活動作の援助や退院に向けた点眼指導などを行っています。

私は大分大学医学部看護学科を2023年3月に卒業しました。2年生の頃からコロナ禍となり授業や演習、実習に制限がある中で、大学の先生方や病棟スタッフの方々、患者さんやそのご家族など多くの人々の協力のもとさまざまな経験や学びを積むことができました。実習では、一般的な技術を基盤として、患者さんに看護を提供します。その中で、しっかりと患者さんを知り、その時々の状況を把握し、アセスメントした上で、ご本人の大切にしたいことや持てる力を尊重した個別的な看護を行うことが、患者さんの希望に沿った生活を支えることにつながると学びました。これができる看護師になりたいと、自分の看護観を深めるきっかけになりました。

実際に看護師として働き始めると患者さん一人ひとりに十分に時間をとることが難しい現状に悩むこともあります。しかし、自分の理想とする看護師像に近づくことができるよう、目の前の患者さんを知ろうとすることを大切にしながら、必要な情報は何かを考えられるようにアセスメント力を磨き、その情報を的確に得ることができるようコミュニケーション技法を習得・活用していきたいです。

30周年記念に寄せて

長崎大学病院　**米田　倖英**

この度は創立30周年を謹んでお祝い申し上げますとともに、このような形で携われる機会をいただきました事を心より感謝申し上げます。

私は2022年に大分大学卒業後、地元の長崎大学病院に就職し、新人看護職員研修プログラムに沿って消化器内科・外科病棟と心臓血管外科・放射線科病棟の2部署を経験しました。その後は希望していた消化器内科・外科混合病棟に正式配属となり、同期や先輩方に支えられながら学び多き毎日を過ごしています。

現病棟では消化器腫瘍を主要疾患として、化学療法や放射線療法、外科的手術や内視鏡的手術を行った患者さんの看護を中心に行っています。また、多職種で密に連携しながら、急性期・回復期・慢性期・終末期と多岐にわたる段階の患者さんが、安心・安全・安楽に入院生活を送れるようサポートしています。特に、消化器という疾患の特徴から食事形態や排泄方法が変化する方が多く、スムーズに在宅移行・社会復帰やセルフケア行動の獲得ができるよう、本人の希望を聞き、早期から退院後の生活を見据えた支援を行っています。また、質の高い治療や療養生活を可能な限り継続できるよう、適切な時期に緩和ケアを導入し、全人的苦痛の緩和にも努めています。

今年で看護師2年目となりましたが、熱心な先生方に囲まれ同じ目標を持った仲間と切磋琢磨しながら得た看護学科での学びや経験は、看護師として働く中での私の大きな軸になっていると感じます。悩んだ時は初心に戻り、学生時代に学んだ事や感じた事を思い返しながら、これからも日々、命と向き合い、考え、時には患者さんと悲しんだり喜んだりしながら、目の前の患者さんと真摯に向き合っていきたいと思います。

27期生（令和5年度卒業）

大学での素敵な出会いから学んだこと

佐賀県　伊万里保健福祉事務所　**濵井　優月**

私は現在、佐賀県で県の保健師として働いています。母子保健福祉を担当しており、主に小児慢性特定疾病に関する業務を行っています。日々の業務では、対象のお子さんとそのご家族が自立して安心安全に生活するために、私にできることは何かを考えながら活動しています。

私は編入生として看護学科へ編入学し、編入後はご縁あって高齢者施設でアルバイトをさせていただきました。アルバイトの経験から認知症、難病等に興味が出て、看護学総合実習と看護研究では老年看護学を選択しました。特に総合実習はとても楽しく、こんなに楽しい実習があるのかと思ったほどです。実習は認知症の方々が通所される施設へ行きました。認知症の方々同士で支え合う姿、自分にできることを見つけて活動される姿を見て、「みなさん、なんて生き生きしているのだ」と思い、認知症への自分自身の認識が変わりました。

また、その通所施設には認知症ピアサポーターの方が多く、ピアやピアカウンセリングについてもたくさんのことを学びました。今の仕事でも対象の方々のニーズを把握し、ピアカウンセリングを計画、実施することがあります。分野は違いますが、ピアカウンセリングがどれほど安心感を与えたり、不安の軽減につながったりするかを実習で目の当たりにしてきたため、一人一人の思いに寄り添いながら対象に必要なことを考えること、対象同士をつなげることも大切にしたいと思っています。

今後も、まずは、その都度自分が担当する対象の方の思いに寄り添い、出会いや関わりを大切にしていきたいです。そして、いつかは病気や障害による差別や偏見に関する仕事に携わりたいと思っています。これまで学んだことを活かし、自分にできることは何かを考えながらコツコツ努力していきたいです。

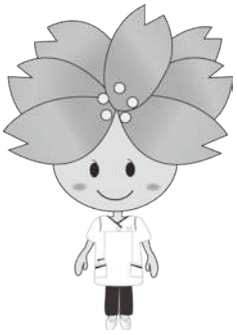
患者さんに丁寧に関わることの大切さ

大分大学医学部附属病院　**間越　みき**

私は昨年大学を卒業し、大分大学医学部附属病院で看護師として働いています。私達が入学した頃はコロナ禍で授業がオンラインだったため、思い描いていた大学生活とは異なるスタートでした。1年生の後期からは対面授業が始まり、同級生とも交流できるようになりましたが、コロナの感染状況によってオンライン授業に変更されたり、部活動が中止されたりとコロナに翻弄された大学生活だったと感じています。その中でも実習は大変でしたが、一人の患者さんと向き合い、患者さんのために何ができるのか考えながら看護を実践し、多くの学びを得ることができました。

働き始めてからは複数の患者さんを受け持っていますが、一人一人の患者さんとゆっくり関わる時間をつくることが難しくもどかしさを感じることがあります。様々な業務がありスピーディーさと丁寧さの両方が求められる中で、スピーディーさを優先すると丁寧さが欠けてしまいそうになることがありますが、忙しい時も患者さんには丁寧に関わることを心がけています。患者さんに「あなたが来てくれるとほっとする」と言われたこともあり、限られた時間であっても丁寧に関わることは患者さんとの信頼関係の構築に繋がることを実感しました。

今は目の前のことをこなすのに精一杯ですが、日々の患者さんとの関わりを通して「その人らしさ」を捉え、入院時から退院後の生活を見据えながら「その人らしさ」を大切にした看護が実践できるようになりたいと思っています。不足している知識を補うために学び続け、自分の看護観も大切にしながら看護師として成長できるよう頑張っていきたいです。



Ⅱ. 30周年特集

第2章　Innovation

１．看護学科の組織・教育・研究

■組織

看護学科の教育研究組織は、1994（平成６）年に開設して以来、図１に示す変遷をたどってきました。開設から2012（平成24）年度までは、基礎看護学講座、臨床看護学講座、地域・老年看護学講座の３講座でしたが、教育課程改正（Ver. 5）を契機に、保健師教育と看護師教育の統合教育の発展に向け効率的、効果的な教育研究活動を推進するため、2013（平成25）年度から基盤看護学講座と実践看護学講座の２講座体制としました。

現在、看護学科は、組織再編を検討しており、医学部、全学と協議しています。この10数年、国内外の社会情勢は大きく動いており、その変化は急加速しています。地球規模の気候変動、自然災害、新型コロナウイルス感染症等の新興感染症のパンデミック、また、日本国内では人口減少と少子高齢化に伴う人手不足や健康格差、テクノロジーの進化等により健康課題が複雑化、多様化してきました。これまで看護学科の組織は、教育をベースに各専門分野による講座・領域を編成していましたが、近年、教育も研究も単一の専門分野では解決できない課題を扱うようになり、従来の枠組みでは教育・研究の発展性に限界が生じると認識しました。すでに、2022（令和４）年度から適用した教育課程（Ver. 6）では、複数の科目を領域横断で展開しています。また、災害看護や看護教育に関する研究課題について、研究テーマに関心がある教員が集まりプロジェクトを組んでいます。従来の伝統的な組織を超えて、社会の変化に迅速に呼応する教育、研究、地域貢献を自由に展開できる組織づくりを目指します。

■教育

看護学科は、2014（平成26）年４月、国立大学としてのミッションとして「大分大学の理念等に基づき、看護師教育と保健師教育の共通基盤を統合し、（臨地実習を重視した教育により）大分県のあらゆる人々の健康生活を支援する専門職を養成する」と宣言しました。現在、国立大学42校中、統合教育を維持している大学は、本学を含めて６校です。

2024（令和６）年９月29日開催した看護学科30周年記念看護フォーラムでは、５人の卒業生がそれぞれの使命感・役割を自覚し、様々な場で対象の生活・人生に寄り添った看護活動の実際を発

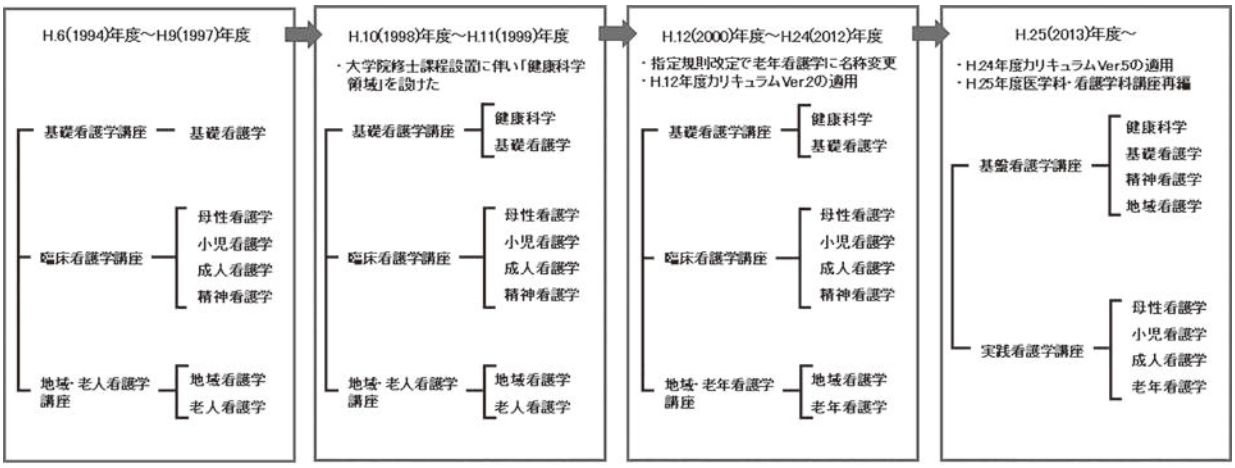


図１　看護学科の教育研究組織の変遷

表されました。２つの国家資格をもつ卒業生は、多様な場で、看護師あるいは保健師としての看護活動を柔軟に展開できる強みをもつ人材として、広く社会に貢献することを証明してくれました。

看護学科は、開設以来この特色を維持し、2022（令和４）年度から適用した教育課程Ver. 6においても保健師教育と看護師教育の統合教育の質強化をめざした内容に変更しました。また、統合教育の基盤になる看護学探究力を学修する教育体系を整えました。今後は、この教育課程を評価し、さらに統合教育の強みを活かした教育を展開します。そして、附属病院との連携協働を強め、教育環境の充実を図るとともに、学外に向けては、より地元に密着した教育の展開を目指したい。例えば、臨地実習の場の開拓はもとより、講義・演習科目で地域に出かけて、直接地域の人々にかかわり合い学ぶ機会を行政機関等と検討し創出したいと考えています。

■研究

過去10年の科学研究費取得率（図2）を振り返ると、平均新規採択率は21.8％、平均取得率は45.2％です。2015（平成27）年度から2023（令和５）年度にわたり発表された著書、原著、総説、学会抄録等の研究業績数（図3）は、コロナ禍において低下したものの徐々に挽回しています。また、優れた研究成果をあげた若手研究者に贈られる中塚医学賞には、毎年度、看護学科教員や大学院看護学専攻修了者が授与されています。

現在、看護学科では、研究交流推進部会がFDの一環で教員間での研究交流や科学研究費獲得にむけた勉強会を企画・実施しています。今後も学科内の研究交流を活発に行い、分野横断での共同研究を推進します。また、附属病院を含め医学部内や他学部との共同研究、大学院修了者との継続研究、学部生の研究発表の機会促進を念頭に、研究成果を確実に社会に還元する研究活動を学科一丸となってすすめます。

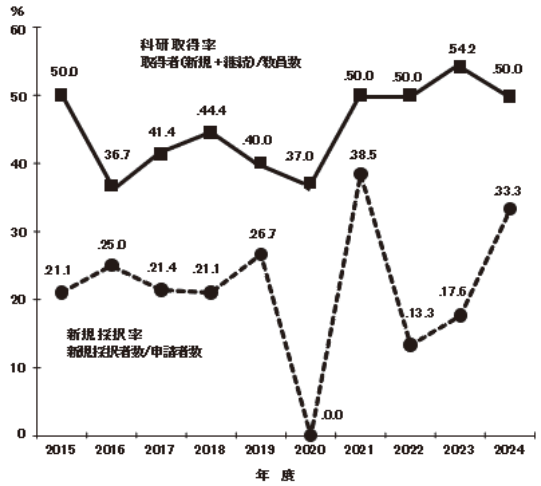


図２　看護学科の科研獲得状況（2015～2024年度）

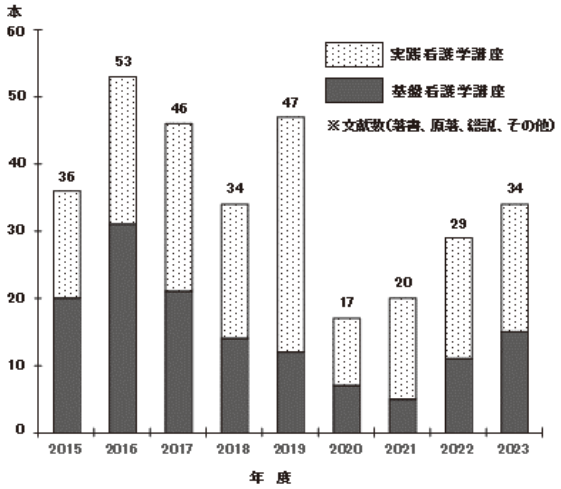


図３　看護学科の研究業績数（2015～2023年度）

2．在学生メッセージ

1年生

半年間の大学生活での経験

大分大学医学部看護学科　**長迫　沙弥**

現在、大分大学医学部看護学科に入学して半年が経ちました。未だに大学のことをよく知らない部分も多くありますが、この半年間の大学生活での経験をこのメッセージで振り返りながら皆さんにお伝えできたらいいなと思います。

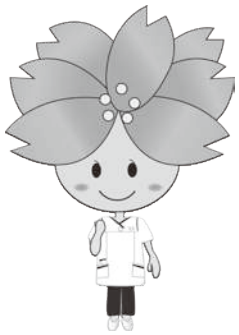
まず、大学生活を送る中で、一人暮らしや専門的な学修等、これまでの生活とは全く異なる環境になりました。そのため、最初は不安が大きく、このままやっていけるのか心配でした。しかし、看護学科の仲間や先生方が、優しく、コミュニケーションに長けている人が多かったため、すぐに打ち解けることができました。勉強のこともみんなで助け合いながら、課題や期末試験を乗り越えることができました。

また、１年の７月末から基礎看護学実習を１週間行いました。患者さんや看護師さんとコミュニケーションをとりながら、対象理解を深めるための工夫等を行いました。実際の現場で、看護について自分で考える機会を得られたことで、看護への理解が深まったと感じました。

サークル活動では、看護学科だけでなく、医学科の先輩とも関わることができます。先輩たちが、勉強の仕方など困ったことをたくさん教えてくださるため、不安になることなく大学生活を楽しんでいます。

まだ半年しか大分大学で学生生活をしていないけれど、周囲の人に助けてもらいながら勉強もサークル活動も楽しく行うことができていると感じています。

最後に、私は将来看護師として患者さんやご家族に信頼してもらえる看護をしたいと考えています。そして、がん看護に興味があるのでがん看護を専門的に学びたいと考えています。そのためにも、まずは基盤となる現在の学修を完璧にできるよう頑張っていきたいと思います。



大分大学医学部看護学科に入学して

看護学科　**原　　理紗**

大学生になった私は一人暮らしを始め、今までとは違う新たな生活を送っています。大学生活は入学前に想像していたよりも、とても充実していると感じています。九州地方だけでなく、他の遠い地方から来た友達もでき、多様な価値観を日々感じることができます。住んでいる場所が違っただけで物事のとらえ方や知っていることにも違いがあり、驚くことも少なくありません。

また、今までの学生生活と違い、同じ医療職を目指している人がほとんどのため、気の合う友達だけでなく将来に対する新しい知識や考え方を得ることができます。私は入学してまだ一年も経っていませんが、すでに自分の中での価値観が大きく変わりました。

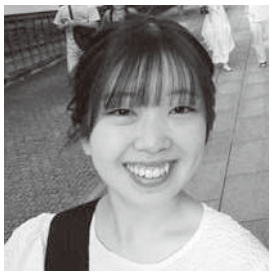
他にも大学での講義、実習、そして部活動もとても充実しています。看護学科の講義の一部は先進医療科学科と合同に行われています。話し合いの機会もあるので、他職種について知る機会になったり、知り合いもできます。また、大分大学では一年生の前期から実習があります。技術などはまだ身に付けていませんでしたが、同じ実習先だった人と仲を深めることができました。

大分大学医学部看護学科では看護師資格だけでなく、保健師資格も全員が取得することができます。私は看護師を目指していたため、大学に入学した後に保健師の仕事を知りました。私の周りでは保健師を目指す友達が多く、保健師についても興味が湧くようになりました。これからの大学生活では、様々なことに挑戦するだけでなく、専門的な技術と知識を身に付け、自分の将来を考えていきたいです。

2年生

大学生活を送る上で大切にしていきたいこと

大分大学医学部看護学科　**今永　　絢**



私は現在、学業に部活にアルバイトに、非常に充実した大学生活を送っています。看護学科は科目が多いので大変だと感じることもありますが、友だちと声をかけあい、時には息抜きもしながら、日々楽しく過ごしています。

１年次には他学科と合同で受ける講義があります。グループワークや意見交換を通して、それぞれの専門分野を学ぶ学生が考える意見を聞くと、興味深い意見や自分には思いつかない発想を知ることができます。新しい考え方を受け、自分のものの見方、考え方も広がったように感じます。このように、様々な学科や年代の人と関わり、たくさんの刺激を受けて多角的な考え方を得られることは、看護学科の魅力の１つであると思います。

大学は高校と違い、自分でスケジュールを管理することが今まで以上に大切になります。課題の締め切り、授業の日程などを把握している担任の先生のような人はいません。だからこそ、自分がするべきこと、しなければいけないことを計画的に取り組むことが非常に大切になります。課題に関しては、特に計画的に取り組むことが大切だと思います。先延ばしにせず計画的に課題に取り組み、余裕を持つことで、何度も見直してより質の高いものにするように心掛けています。

私は卒業後、どのような人生を歩みたいかという目標はまだ決まっていません。これからたくさんの講義や演習、実習を受けて、自分が何をしたいのか、どのようなことに興味があるのかを知り、校外のボランティア活動に参加したり情報収集を行ったりするなど、積極的に行動して目標に向かって頑張っていきたいと思います。

夢に向かって

大分大学医学部看護学科　**河上　　月**

私は大学進学を機に、生まれ育った地を離れ、１人暮らしを始めました。私自身大分県に来たことはなく、知り合いもいない、未踏の地での生活でした。一からの友達作り、自分自身に責任を持って全てを行わなければいけない生活、高校までとは違う専門的な授業など、始めのうちは不安で何をするにもいっぱいいっぱいでした。しかし講義の中でグループワークを行ったり、他学科の人たちと１つの発表を行ったり、病院実習や実技演習などを通して、繋がりがたくさんでき、友達も増えていきました。ここでできた友達と悩みや不安、楽しいことを共有することでより充実した大学生活を送ることができています。

私は将来、医療の最前線で活躍できる看護師になりたいと思っています。そのために学生のうちからできることとして私が始めたのは、学外組織で日本災害医学会の学生部会であるDMASの一員として災害医療について学ぶことです。学生のうちからより高度な勉強を行い、実際に活動している姿を見ることは貴重な経験であると同時に、座学だけでは得られない知識はもちろん、コミュニケーション能力やより実践的なスキルを学ぶことができています。

そして将来、学生生活で学んだことを活かして災害医療・救急医療に携わる看護師になりたいです。関わる全ての人との繋がりを大切にし、誰よりも早く患者の声に応え、患者の命を守るために全力で走り続けられる存在となることが今の私の夢です。これからの学生生活は、今までと比べ複雑な授業や実習が増えるので、今以上に自ら進んで学ぶ姿勢を心掛け、夢に向かって励んでいきたいと思います。

3年生

大学生活の学びと未来へ向けた挑戦

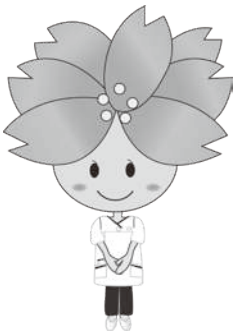
大分大学医学部看護学科　**石川　和樹**

私は大分大学医学部看護学科に入学してから今に至るまで、多くのことを学ばせていただきました。入学以前に考えていた「看護とは何か」という問いに対する答えは、大学生活の中で常にアップデートされ、深め続けられています。

１年時の夏の実習では、初めて対象と接することでコミュニケーションとは何か、コミュニケーションを取る上で大切なことは何かについて学んできました。２年生後期にかけては様々な座学を通し、病気や治療における精神面のサポート方法や環境整備などを学んでいきました。また、座学だけでなく実際に演習を行い、対象者役、看護師役、観察者役など複数の目線に立って、ケアを学んだことで、より理解を深められました。２年時の冬の実習では、実際に１人の対象者を受け持ち、指導教員の先生方に相談しながら情報収集から看護計画の立案まで行い、看護の大変さと奥深さを痛感しました。これからの３年後期は、各領域での実習から総合実習まで約１年近く実習が続いていくので、さらに充実した日々が送れるように準備をしていきたいと考えています。

サークル活動ではバスケットボール部に所属し、看護学科だけでなく医学科の先輩や友人、先進医療科学科の後輩と活動を行っています。身体機能の維持・向上だけでなく、広い交友関係や上下関係の中で学べることで、人間的な成長もできていると感じています。

今後は疾病の知識や治療法を学ぶだけでなく、資格検定取得に向けても積極的に取り組み、着実な自身のレベルアップに挑んでいきたいです。そして引き続き勉学以外も積極的に取り組み、より充実した大学生活を過ごしていきたいです。



大分大学での学びと今後の挑戦

大分大学医学部看護学科　**元田　千晴**

大分大学での生活で、特に学びとなっていることは、日々の看護学の講義や演習、実習です。大学入学前までは患者さんの病気の完治を支えたいという漠然とした思いを抱いていました。しかし、大学での講義を受けていく中で、患者さんのニードとは何なのか、生活の背景を考えることで患者さんの幸せが病気を治すことだけではないということを学びました。あらゆる疾病や病期の対象と家族への看護を学ぶために、個人の力だけではなく看護学科のみんなで知識を出し合ったり、個別化した看護のために固有のケアを実践したりと試行錯誤しながら学ぶことができています。

また、必要な知識、技術を教え、わからないことがあった時には一緒に考え、アドバイスをくださる先生方がいるため、支えられながら自分自身で考えるというとても恵まれた環境で看護学を学ぶことができています。

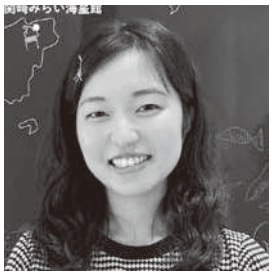
基礎看護学実習で実際の患者さんを受け持ち、その方が望む未来を過ごすために必要な援助は何かを考える経験をしたことや、病院内で患者さんを支える家族が苦しそうな表情を浮かべている姿を見かけたという経験から、対象と家族に対する看護について常に学び続ける必要があることに気付くことができました。

今後は対象や家族など１人でも多くの人が幸せに暮らすことができるための看護を提供するために、大学院へ進学し新たな研究を行い、知識や技術力を高めたいと考えています。グローバル化が進む時代で、私の研究や技術力が少しでも多くの人の役に立ち、社会貢献につながることができるように、看護の深層を学び続けたいです。

4年生

国際看護学実習での経験

大分大学医学部看護学科　**野上　恵理**



私が4年間の学習の中で、大きく印象に残っているものは、10日間のフィリピン共和国での国際看護学実習です。コロナが終息したことで、この実習が再開し、参加することができました。私は、大学入学前から発展途上国の医療に興味があり、日本とは異なった国での医療を大学生のうちに経験してみたいという目標を持ち、この実習への参加を決めました。

10日間の実習は、具体的に、フィリピンの大学病院での実習、国立感染症病院での見学実習、現地の看護学生と共に講義を受ける実習、フィリピンの文化理解の実習等がありました。フィリピンの看護学生の実習やフィリピンでの患者さんの生活の様子を見て、国の経済状況や家族観、歴史、環境、文化、宗教が医療に影響していることを学びました。

また、この実習中に大切だと感じたことは、積極性です。英語での会話や説明中心のため、自分の聞きたいことや分からないことをすぐに言葉にすることができなかったりすることがありましたが、積極的に行動することで、多くの知識、技術、コミュニケーション能力を獲得することができ、何事においても積極性を持って取り組むことが必要であると感じました。

私は、このフィリピンでの国際看護学実習を高校生の時から知っており、大分大学に入学したいという決め手になった一つでもありました。実際にこの実習に参加することで、自身の視野の広がりや国際的な視点を身に付けることができたように思います。このような国際的な交流が行われていることを在学生やこの大学を目指す高校生などにも知ってもらうこと、また、今後もこの実習が続き、多くの学生がこのような経験を積むことができる環境が続いていくことを願っています。

未来に向かって

大分大学医学部看護学科　**山田　睦就**

大分大学に入学してはやくも4年目を迎え、卒業も間近に迫ってきました。私たちが大分大学に入学した頃は新型コロナウイルスが流行し、講義もすべてオンラインでした。思い描いていた楽しい大学生活とはかけ離れ、毎日家でパソコンと向かい合う日々。そんな日々がつい最近のように感じるほど、あっという間の4年間でした。同じ学科の仲間だけでなく、医学科や他学部・他学年と、歳も出身も違う人たちと一緒になって話をしたり、休みの日にはサークル活動や旅行、ドライブに出かけたり、充実した毎日を送ることができています。そして、そんな当たり前の生活ができていることの大切さを感じています。

実習も当たり前にできるようになり、最近、領域別実習と総合実習を終えました。これまで疾病論などで学んだ知識と技術演習で得た看護技術をもとに実習を行い、患者の個別性に基づいた看護を実践していきました。実習を通して、患者本人がどうありたいかを中心として家族や多職種と話し合いながら、患者が持つ強みを活かし、抱える課題の解決に向けて取り組むことの大切さを学びました。

半年後には看護師として働き始めることになります。4年間の大学生活で学んだことを糧に、人とのつながりを大切にし、1日1日が充実したものとなるように過ごしていきたいと思っています。私はまだ自分はこの分野をやりたいという目標が定かではありません。認定看護師や専門看護師、診療看護師なども視野に入れ、看護師として働く中で、自分にあった分野を見つけて、様々なことに全力で挑戦できる看護師になりたいと思っています。

３．看護学科の挑戦

１）各講座・領域の紹介

〈基盤看護学講座〉

■講座紹介

基盤看護学講座は、健康科学領域、基礎看護学領域、精神看護学領域、地域看護学領域の4つの専門領域で構成され、看護学の基盤を支える教育と研究を行っています。看護学の基盤とは、個人、集団、地域といった多様な対象に対して、身体的、精神的、社会的健康を包括的に支えることを目的とする理論と実践の体系です。本講座では、看護学を「人間」「健康」「環境」「生活」「看護」の多角的な視点から捉え、幅広い教育研究活動に取り組んでいます。

■領域横断的・他分野協働型教育・研究への挑戦

１．領域横断型共同研究の推進
各領域が協力し、看護学の課題に多面的に取り組む研究活動を強化します。これにより、学際的視点を取り入れた新しい看護理論や実践モデルの構築を目指します。

２．災害有事における健康管理の研究
災害時の避難所支援や健康維持に関する教育・研究を発展させ、災害リスクに対応する看護の役割を明確にします。特に、災害時における医療・看護支援の具体的な方法論を提示し、実践的な対策を提案します。

３．地域医療依存度の高い住民への支援
地域包括ケアを基盤に、医療依存度の高い住民が住み慣れた地域で安心して生活できるよう、医療・看護ケア支援に関する研究を進めます。この取り組みでは、多職種連携や地域資源の活用を重視し、地域全体での健康支援体制を構築します。

■おわりに

基盤看護学講座は、個人、集団、地域を対象とした看護学の基盤を構築し、幅広い教育・研究活動を通じて看護学の発展と地域社会への貢献を続けます。今後も、領域横断的な取り組みと多様な健康課題への挑戦を通じて、新たな知見を生み出し、看護学の未来を切り開いていきます。

〈基盤看護学講座〉健康科学領域　Health Sciences

健康科学領域は、平成10年（1998年）の大学院医学系研究科修士課程看護学専攻の設置にあたり、基礎看護学講座の中に誕生しました。基礎看護学講座は、当学科の教育研究組織の変遷の中で、平成25年（2013年）から基盤看護学講座と名称を変え、健康科学のほか、基礎看護学、精神看護学、地域看護学とともに４つの領域をカバーする講座として再編されました。令和４年（2022年）12月から、私、加隈哲也が健康科学領域の領域長を務めています。

同領域は、看護学科での教育課程において、保健統計学、保健政策論、保健学の講義を担当し、大学院・修士課程においては、保健統計学特論、看護研究方法論を担当してきました。私は、内分泌代謝学、中でも肥満症を専門としていますので、令和５年（2023年）４月からは、その専門性を活かし、大学院・修士課程の授業科目として生活環境病特論を開設しました。国家試験の基礎となる「保健統計学、保健政策論、保健学」の授業を担当する一方で、自分の専門である「内分泌代謝学」の知識を絡めた教育を目指しています。近年、わが国は、新型コロナウイルス感染症に翻弄されました。新興感染症は、今後も医療業界を揺さぶる一つの脅威になると思っています。そういう中、今後の健康科学は、生活環境病としての視点が重要になってきます。生活環境は、住居環境だけでなく、気象変動に基づく災害や感染症の蔓延でも大きく影響を受けます。また食産業、食環境、学校教育・食育、社会政策など、社会医学、環境医学の観点から、改めて「健康」を見つめていきたいと考えています。

一方、大分県は南海トラフ地震で大きな被害が予想される地域です。また毎年のように、台風や大雨の災害にも見舞われています。本年、令和６年（2024年）には、おおいた地域連携プラットフォーム フィールドワーク支援事業（人材育成支援事業）の予算を「被災地域住民の防災やコミュニティに対する意識の変化と健康状態の調査」というテーマで獲得いたしました。看護学科の学生が実践型の地域活動に主体的に参加し、学生の成長を促すとともに地域のステークホルダーとの交流や協働により、地域課題の解決ひいては地域の活性化に繋げる「地域貢献」事業で、現在、調査を進めているところであります。

また、健康科学領域は、令和６年（2024年）の看護学実習から、成人看護学領域と共同で、「栄養学・食育プロジェクト（体験型実習の中で、自身の食生活と体組成、血糖変動との関係を知る）」を実施することにしています。今後は、他領域と積極的に交流しながら、「教育」「研究」「地域貢献」を推進していきたいと思います。なお、これまでの臨床研究の概要については、看護学科ホームページ 健康科学の「臨床研究に関する情報公開」を参照していただければ幸いです。

〈基盤看護学講座〉基礎看護学領域　Fundamental Nursing

■はじめに

基礎看護学領域では、看護学の基礎に関わる幅広いテーマについて教育と研究を行っています。具体的には、看護理論の探究、看護ケアの開発、その科学的根拠の構築、看護実践の基盤となる人間関係やコミュニケーションの在り方、さらには看護ケアやサービスの管理方法まで多岐にわたります。これらの活動を通じ、看護学の理論と実践を結びつける基盤を築き、実際の看護ケアや管理に役立つ知見の創出を目指しています。

■教　育

「看護とは何か」「看護ケアの目的や活動は何か」をテーマに、基礎的概念、看護過程、看護技術、コミュニケーションなどの教育を行っています。2022年度のカリキュラム改訂では、「臨床判断能力」や「臨床推論力」の強化を目指し、シミュレーション教育を積極的に取り入れました。また、臨地実習では、附属病院をはじめ地域の医療機関等の協力を得て、学生が看護の実際を通じて学ぶ基礎看護学実習を実施しています。

■研　究

基礎看護学領域では、各教員の専門分野に基づき、以下の研究テーマに取り組んでいます。

□看護ケアの開発とエビデンスの構築：圧抜き技術の介入による安楽の検証等

□看護教育方法と評価の改善：経験学習理論を活用した技術教育モデルの開発等

□看護管理研究：キャリア初期看護師のプロアクティブ行動、看護管理者の能力開発に関する研究等

■今後の基礎看護学領域で目指す発展とチャレンジ

□教育の進化：シミュレーション教育の充実や地域医療との連携強化を図り、学生の実践力向上を支援します。

□研究の挑戦：災害対策としての健康準備教育や関連する看護ケアの開発を推進します。

□地域貢献の強化：災害時の避難所支援や高齢者ケアを通じ、地域住民と協働し専門性を活かした貢献を続けます。

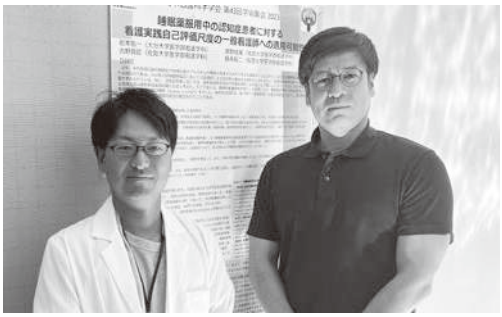
■終わりに

基礎看護学領域は、看護理論、ケア技術、教育方法、キャリア開発など多様な研究テーマを通じて看護学の発展に寄与しています。この多様性こそが領域の強みであり、今後も多角的な視点で教育・研究を深化させ、看護実践の向上に貢献していきます。

2016年度以降に、入職異動・退職された先生方

宮﨑伊久子（講師）　2016.3 福祉健康科学部へ異動（准教授）
吉良いずみ（講師）　2013.4～2019.3退職
安藤　敬子（助教）　2016.10～2021.4より福祉健康科学部異動（講師）
西迫　真美（助手）　2015.4～2017.9退職
小野里晴香（助手）　2018.4～2019.3退職
春田恵理子（助手）　2022.4～2023.3退職
野上龍太郎（助教）　2021.4～

〈基盤看護学講座〉精神看護学領域　Psychiatric Mental Health Nursing



精神看護学領域は、岩本祐一准教授、河野修助教で構成され、精神看護のおもしろさを教育・研究・学外での活動を通じて、日々探求しています。

■教育（精神看護学の主な科目）

精神看護学概論（２年前期）、精神看護学方法論Ⅰ（２年後期）、精神看護学方法論Ⅱ（３年前期）、精神看護学実習（３年次～４年次）・看護学総合実習（４年次）

■研究

精神看護学領域では、以下の研究に取り組んでいます。

◎看護師のためのBZD系薬剤漸減時の離脱症状アセスメントツールの開発

関連する業績：

・ *Iwamoto Y., Fujino N., Furuno T., Fujimoto Y., Kamada Y. Applicability of the Self-Evaluation Scale of Nursing Practices for Improving Sleep Quality Among Patients with Dementia Taking Sleeping Pills to General Nurses. Journal of Rural Medicine 19(2), 92-104, 2024.*

・ *Iwamoto Y., Fujino N., Furuno T., Fujimoto Y. Development of a self-evaluation scale of nursing practices for improving sleep quality among dementia patients taking sleeping pills. Nursing Practice Today 10(1), 32-43, 2023.*

◎精神科入院中の患者の自殺に関する看護実践の研究

関連する業績：

岩本祐一, 藤野成美. 入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な精神科看護師の視点.日本精神保健看護学会誌.29（1), 60-69, 2020.

■地域貢献活動

大分県看護協会における学会委員を担当しています（R５年度：副委員長、R６年度：委員長）。また、県内の精神科病院、各機関の要請を受け、教育支援や研修会の講師を担当しています。

■2015年度以降異動された先生方（現職）

河村奈美子先生（滋賀医科大学 教授）

折橋隆三先生（佐賀大学 助教）

これまで精神看護学を支えてくださりありがとうございました。

■終わりに

この10年間、精神看護学領域は様々な先生方に支えていただきながらやってきました。これからも、看護に欠かすことのできない人の心のケアについて、学生と一緒に考えながら教育・研究・地域での活動等を通してメンタルヘルスに関わる看護職や関係者の方々へ貢献できるよう努めてまいります。

〈基盤看護学講座〉地域看護学領域　Community Health Nursing

■教育

地域看護学では、地域住民全体を対象とする看護活動、働く人々を対象とする産業看護活動、児童・生徒を対象とする学校保健活動、在宅療養者とその家族を対象とする在宅看護活動の４つの分野を扱い、基本となる理論と技術を教授し、実践能力を養います。

本学科は、統合カリキュラムで教育を行っており、４年間の学士課程において看護を探求し、保健師・看護師としての基礎的能力を養うよう、全領域で協働し教育の充実を図っています。地域看護学領域では、公衆衛生看護活動における基本的な考え方や技術について教育しています。

2022年度からの新カリキュラムでは、地域看護学関連科目を１年後期から開始（旧カリキュラムでは２年前期）することで、これまで以上に家庭や地域を単位とした看護活動やその対象（個人・家族・集団・地域）に関する理解を強化しています。また、多発する災害や新感染症発生、児童虐待等に関連する事例をとおして、施策化および健康危機管理についての学びを充実させる科目を新たに立ち上げるとともに、演習では、実在する地域の疫学データや保健統計等を用いることで、地域の健康課題に対する公衆衛生看護活動のあり方について学びの強化を図っています。

そして、４年間をとおして、公衆衛生看護活動の課題や看護の機能を発展させる思考を深め、看護学を基盤とした専門職として社会に貢献できる人材の育成に努めています。

■研究

地域看護学領域では、地域看護の実践とその教育活動に寄与することを目指し、地域看護活動方法や看護の機能、地域看護学教育などについて、以下のような研究を行っています。

■地域貢献

地域看護学領域では、県内の保健師を対象とした研修の講師や行政機関における保健師人材育成計画の委員、保健所・市町村の保健事業展開等に関する相談、看護協会等における様々な活動をしています。

また、総合実習などの教育活動をとおして、地域住民はじめ地域の看護職や関係者の方々へ貢献できるよう努めています。

研究テーマ	主な研究内容
公衆衛生看護活動の実践方法やその展開	・健診・医療機関未受診者訪問事業におけるベテラン看護職による訪問不在時の観察 ・健診・医療機関未受診者訪問事業にみる未受診者の状況と未受診理由 ・母子健康手帳交付時の妊婦相談で継続支援の必要性を判断する際の保健師の視点
ケアシステムにおける看護の役割・機能	・ケアシステム構築における保健師活動に関する文献レビュー ・医療的ケア児支援体制構築に向けて保健師が把握する地域資源の実態 ・保健所保健師による医療的ケア児を対象とした「個別支援」と「地域ケアシステム構築」
看護学の教育内容の錬成	・学生の研究にみる地区を単位とした看護活動がもたらす実践知 ・看護系大学に所属する若手教員の臨地実習指導に関する語りの分析
公衆衛生看護活動における管理・人材育成	・保健所管内保健師による事例検討会の展開過程と成果 ・人事異動で一人配置となった中堅期市町村保健師の経験と獲得した能力 ・行政組織における保健師の異動にともなう業務の引き継ぎとツール

〈実践看護学講座〉

■講座紹介

実践看護学講座は、成人看護学領域、母性看護学領域、小児看護学領域、老年看護学領域の4領域で構成されています。この構成は、2013年度保健師看護師教育の統合教育の維持・発展に向けたカリキュラムVer.5適用等を契機に再編成しました。実践看護学講座は、この10年間、さまざまな健康レベルと発達段階に応じた看護の実践的内容に主眼を置き、講座内はもちろん講座を超えた連携をすすめ、教育・研究に取り組んでいます。

■講座や領域を超えた現在の教育・研究活動

1．教育活動

看護学科のカリキュラムの専門教育科目である「医療・看護倫理学」、「災害看護論」、「看護実践基盤技術Ⅱ」、「ホスピスケア」等では、領域・講座を超えた教員が協働し教育活動を行っています。例えば、「医療・看護倫理学」では、日常の医療現場で起こるさまざまな倫理的問題について理解し、倫理原則や主要概念・理論をもとに、問題解決に向けた取り組みができるための基盤を領域横断で育成しています。「災害看護論」では発災時の急性期対応、避難所での支援、心のケア、静穏期における予防、地域で暮らす人々への支援など、災害のフェーズや生活フィールドをふまえた講義内容で構成するなど、さまざまな領域のオムニバス形式による講義・演習を行っています。

2．研究活動

・ACP（Advance Care Planning）は、さまざまな健康レベルと全ての発達段階に応じて、その人の生涯における変化に備えて、家族や大切な人と医療・ケアチームとが繰り返し話し合い、本人の意思決定を支援する取り組みとして注目されており、実装化にむけて研究に取り組んでいます。このACPの研究の一環として、複数の領域の教員によって、一般市民にむけた公開講座をこれまで3回開催し、いずれも好評を得ています。

・災害時における健康維持に関する研究では、基盤看護学講座とともに、実践看護学の立場から、災害時の避難所での健康管理について、慢性疾患をもつ人の場合や災害リスクに対応する看護の役割の明確化を目指し、災害時における医療・看護支援の具体的な方法論を提示できるよう取り組んでいます。

■今後にむけて

実践看護学講座は、「臨床実践看護学領域」と「生涯発達看護学領域」の2領域へ再編される予定です。これらの背景には、少子化、人口減少や動態の変化等の社会情勢による教育体制の整備、教員組織の変化と課題が存在します。実践看護学講座では、これまで以上に領域を超えたone team体制によって諸課題を払拭しあらゆる健康レベル、あらゆる発達段階にある人のQOLの向上にむけて健康の維持・増進、回復、安らかな死を支えるための諸理論および看護の方法論を探究し、教育・研究・地域貢献に取り組んで参ります。

〈実践看護学講座〉母性看護学領域　Maternal Nursing

■教育

●**母性看護学概論**では、母性看護の変遷を、歴史、社会、文化、環境の視点から学び、母性看護およびリプロダクティブヘルスの中心概念を理解することにより、生と性に関わる看護の基礎を育成しています。

●**母性看護方法論**では、周産期の生理的変化およびハイリスク状態にある母子とその家族を理解するための知識と援助の基本を学ぶとともに、性・生殖に関わる課題や看護の意味を考え、母性看護の実践に向けた思考の育成・看護技術の習得をめざします。

●**看護学実習・看護学総合実習**では、附属病院の産婦人科病棟、外来、NICU、地域の助産院で実習を行います。本実習では、妊産婦や褥婦、胎児から新生児、そして女性生殖疾患を有する対象および家族への看護実践を通して対象を理解し、周産期に特徴的な看護技術の習得と共に個別性のある看護を一部でも実施できるようにと考えています。学生は実習を通して、母子・家族の愛着形成や、出産時の看護実践から命の尊さを実感し、周産期ならではの看護の視点・援助の実際を学んでいます。

　また、看護学総合実習では、附属病院、助産院2施設の協力を得て、学生個々の課題にそった実習を行っています。

■研究

　毎年、４～５名の学生が配属され、周産期に関わる看護を中心に研究を行っています。テーマは生理的営みである出産についての探究から、出産を取り巻く環境の変化や少子化問題など多岐にわたり、学生が主体的に取り組んでいます。

■地域貢献

●**PECの会（Peer Education Communication）**

　いのちの大切さを伝えることを基盤に、同世代の性に関する悩みや苦しみ、悲しみと向き合い寄り添いながら、自分の力で問題解決できるようにサポートし、10代、20代の性感染症や望まない妊娠を少しでも減らしていけるよう、知識の普及とサポートする活動をしています。

●**大分県母性衛生学会**

　大分県内の母子保健に関わる多職専門職者と連携し、学会運営を行っています。

〈実践看護学講座〉小児看護学領域　Pediatric Nursing

■小児看護学領域の組織変遷

穴井　孝信	教授 1993.4～2018.3	在任中、学科長を歴任され領域だけでなく、学科の発展に寄与された
宮崎　史子	准教授 2000.4～2014.3	小児看護学の面白さを学生に教授
幸松　美智子	准教授 2014.4～現職	子どもの健全育成に関する研究・教育を実施
渡辺　真理子（旧萩野）	助手 2014.4～2017.3	主に実習指導を担当し、学生の実践能力向上に尽力
安藤　敬子	助教 2017.4～2017.9	基礎看護学領域より転任。新たに開設された福祉健康科学部へ
江藤　千晴	助教 2017.10～現職	小児看護学教育に長年従事した実績があり、学生教育に熱心に取り組む

■教育（学士課程）

この10年は、少子化・核家族化の伸展に伴い、育児不安や孤立育児、虐待など、子育てに関する問題が顕在化し、看護職の担う役割が拡大の一途をたどってきました。また、医療の進歩に伴い重い障害や病を患う多くの子どもが命の危機から脱し、自宅で、学校で、地域で成長・発達をするようになり、小児看護に従事する看護職に求められる知識・技術は、病院・施設での看護援助に特化したものから、高度な医療ケアを必要とする子どもでも自宅や地域で生活できるように支援するものへと大きく変化しています。このような社会ニーズに応えらえる人材の育成に向け、関連した科目の教育内容や方法の工夫を行っています。

■研究

主な研究課題：慢性疾患を持つ子どもの養育、障害を持つ子どもの家族への支援

【科研費】2017～2021：小児と家族への長期的な在宅支援のためのICTを用いた看護教育プログラムの開発（幸松：分担者）

2021～2023：AYA世代重症心身障害児・者の家族が抱く養育における介護負担感への支援策の検討（江藤：代表者）

【主な研究】

＊幸松美智子、安藤敬子、江藤千晴：分析モデルを用いた看護過程の教育効果－ストレス・コーピング理論に基づくアセスメントツールを用いて－、九州・沖縄小児看護教育研究会誌、18、35-40、2018

＊江藤千晴、幸松美智子：看護学生が捉える「甘え」について、九州・沖縄小児看護教育研究会誌、20、22-25、2019

＊幸松美智子、江藤千晴：学生の分析力向上におけるアセスメントモデルの効果、九州・沖縄小児看護教育研究会誌、20、26-29、2019

■地域貢献

小児看護の専門家育成の一環として、2016年より「小児看護エキスパート養成講座」という卒後教育の場を開設し、地域の看護職が小児看護を学べるようにしました。コロナで開催が難しくなるまでの３年間で、延べ400名の看護職が参加し、学びを深めました。

〈実践看護学講座〉成人看護学領域　Adult Nursing

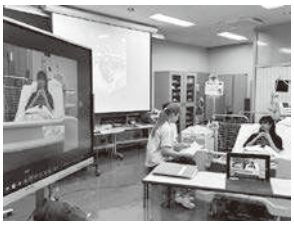
テクノロジー進化に加え、COVID-19パンデミックによる大学の激動の中、成人看護学も寺町芳子教授のご定年退職や重なる人事問題を経て、漸く光が見えてきた立て直しの10年間！

■教育　□学部教育

＊2022年からのカリキュラム編成Ver. 6：
授業科目名から「成人」の削除、臨床看護学の要としての教育内容に再編

＊現行の「成人看護学実習」を「急性期看護学実習」と「慢性・終末期看護学実習」に二分し、健康レベル別の臨床看護実践能力の強化

【急性期看護学】　急性期における治療・看護の急激な変化に応じ、成人看護学概論、急性期看護方法論Ⅰではセリエの理論等基盤となる知識や救命処置等の技術を強化、急性期看護方法論Ⅱでは周手術期における心理面ケアやセルフケア支援・術後看護のロールプレイやシミュレーション教育を強化、実習では高度救命救急センター等のフィールドを広げ実践的な学習、救急看護等の豊富な経験をもつ卒業生の佐藤昂太朗助手が加わり急性期看護学の拡充



【慢性期・終末期看護学】　臨床判断能力の育成に向けて、成人看護学概論や慢性看護方法論Ⅰ（30時間）では看護実践の根拠となる知識修得を強化、慢性期看護方法論Ⅱ（22時間）や緩和・終末期看護方法論（22時間）では事例検討・ロールプレイやシミュレーション教育・DXを活用し知識を応用した実践演習の強化、卒業生及び修了生のがん看護専門看護師の大野助教を迎え、緩和・終末期看護の拡充

■教育　□大学院教育　専門看護師コース

2021年～ クリティカルケア看護を開設

2023年～がん看護　再開準備、がんプロフェッショナル養成プラン活動の充実

■研究と地域貢献

科研取得や大学プロジェクトに主体的に関わり、大学院生や臨床実践家とともに臨地に根差した研究を目指して専門の垣根を越えて協働した取り組み

各教員の研究内容と展望	研究と地域貢献
【教授 末弘 理恵】：集中治療や手術を受ける高齢者がその人らしく回復に向けたケアをテーマとし、現在は集中治療後症候群予防のケアプログラムの開発に関する研究 **【教授 井上 亮】**：生体モニターに基づく看護方法や患者治療の研究に興味があり、睡眠解析や自律神経機能解析による頭痛患者や不眠高齢者の研究を計画 **【教授 脇 幸子】**：生活習慣病やがんをもつ人の災害を含め日々の生活を豊かにするためのセルフケア支援や多職種連携や協働的意思決定の研究 **【講師 大野 夏稀】**：がんを含む慢性疾患をもつ人やその家族が、診断から終末期などの病気のどのような段階においてもよりよく生きていくための支援の研究 **【助手 佐藤 昂太朗】**：クリティカルケア看護領域に興味関心があり、特に救急看護における家族への支援に関する研究	**2022年度（科研費事業）**：公開講座 第１回目（2021年度）「病をもっていてもいなくても“よりよく生きる”を目指した人生会議」脇・大野・森元・井上・末弘・佐藤（祐）、第２回目（2022年度）は就労者対象にIT活用 **2023年度（科研費事業，令和５年度大分プラットフォーム事業 うま塩ヘルシー・弁当提供事業）**：第３回目市民公開講座in 国東市（脇・佐藤・大野・加隈・末弘） **2021～2023年度：重点領域研究推進プロジェクト（戦略的重点研究推進）**：「自然災害時の避難所における健康危機管理」の健康管理チーム（脇参加）；避難訓練など参加 **2023年度～がんプロ主催の公開講座・事例検討会の開催**⇒各成果の学会発表、論文発表

〈実践看護学講座〉老年看護学領域　Gerontological Nursing

■現教員

氏名（敬称略）	職位	在籍	今後の挑戦
三重野英子	教授	1996～	健康維持、研究と推し活の充実・発展、そして次世代育成
正木孝幸	教授	2024～	新たな分野で、臨床・研究・教育を進めていく所存です。
小野光美	准教授	2017～	高齢者、家族、学生・院生、スタッフの話を聴き続けます。
阿部世史美	助教	2022～	公衆衛生学を学び、よりよい生活に向けた支援を考えます。

■教育〔学士課程〕

老年看護学領域では、老年期にある人を“固有の歴史を携え、いまをこれからを生きる全体的存在”としてとらえます。そして、高齢者一人一人が健やかに、よりよく生きる・生活できるよう、我々看護専門職はどのように支援すればよいのかを探究しています。

2025年度からは、老年看護学・小児看護学・母性看護学が一緒になり生涯発達看護学領域Lifelong Developmental Nursingとなります。生命の誕生から老いて死を迎える生涯発達過程における対象理解、看護を探究します。一人一人の人生をより深く理解し、よりよく生活していくための支援を考え実践できる看護専門職を育成します。

■教育〔大学院修士課程〕

看護研究コースに加え、2020年度より老人看護専門看護師コースを開設しています。老いを理解し、尊厳を支える看護を探究しよう！

■研究：2015年～2024年　看護学科在籍期間中の科研費取得状況

研究期間	研究課題　＊すべて基盤C	
2017～2020	認知症専門外来における看護実践モデルの開発研究	三重野
2017～2020	地域包括ケアシステムにおける高齢者の終末期を支える看取りケアモデルの開発	小野
2021～2024	一般病院における非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発	三重野
2022～2023	地域高齢者の日常の発声とオーラルフレイルとの関連	阿部
2024～2027	肥満外科治療における代謝異常関連脂肪肝の改善メカニズムの解明	正木
2024～2027	経カテーテル大動脈弁置換術（TAVI）選択時のACP実践に必要な構成要素の同定	小野
2024～2027	オーラルフレイル-ゼロ次予防における日常の発声の意義	阿部

今後も、他領域・他分野との共同研究により、高齢者が健康で自分らしく暮らせることを支える研究、共生社会の実現に向けた研究を継続します。

■地域貢献

県内外の団体、自治体、病院・施設等の要請を受け、講演・研修会の講師を担当しています。2024年度は、おおいた地域連携プラットフォームの助成を受け、認知症の人、家族、支援者等とともに「大学生認知症サポーターによる共生社会実現プロジェクト」を展開しています。

２）学科・大学院の方向性

看護学科は、1994（平成６）年、看護学に関する教育・研究を行うことを目的に、国立大学として全国で７校目、九州・沖縄地域で３校目の４年制大学として開設しました。今年、30周年を迎えられましたのは、ひとえに関係各位の厚いご支援と温かい激励の賜でございます。まずは、心よりの感謝を申し上げます。

看護学科、大学院医学系研究科看護学専攻は、開設以来、多くの卒業生・修了生を社会へ送り出し、地域の学府としての役割を果たしてまいりました。10周年、20周年と、その節目に際しては、社会に羽ばたき様々な分野・領域で活躍する卒業生・修了生の姿に、学府としての成果を実感し、深い感慨を覚えます。同時に、看護学科開設にご尽力いただいた諸先生方によって紡がれた１本の糸が、看護学科での教育に携わってくださった多くの諸先生方や卒業生・修了生によって織りつづられ、歴史というタペストリーを脈々と描き続けているようにも感じます。この開設30年という記念すべき年に、本学の建学の精神を基点に過去の歴史に思いをはせつつ、将来に向けて確かな展望を抱き、看護学科教職員、学生、大学院生、一人一人が看護学科の使命を再確認することは極めて重要なことだと考えます。

大学には、教育・研究・実践・社会貢献という４つのタスクがあり、これは社会が大学に求めるニーズでもあります。アカデミアとして積み上げた研究成果を教育に活かし、かつ社会実装を実現することで、これらタスクは果たされ、臨地・臨床の発展や社会貢献に寄与できるのだと思います。教育・研究・実践・社会貢献に連関性をもって、その責務を果たすためには、社会の動向に敏感であることも重要です。

昨今の医療を取り巻く環境は、今までになく大きく変化しています。私たちは、2000年代後半からクローズアップされ始めた「2025年問題」の現実に、来年以降直面することになります。「2025年問題」に対応すべく三位一体で進められているのが、医療提供体制の改革（「地域医療構想の実現」「タスク・シフト／シェアを含めた医師・医療従事者の働き方改革の推進」「実効性のある医師偏在対策の着実な推進」）です。特に、「地域医療構想の実現」・「タスク・シフト／シェアを含めた医師・医療従事者の働き方改革の推進」では、看護職に大きな期待が寄せられています。看護学科として、大学院医学系研究科看護学専攻として、この局面においていかにプレゼンスを発揮するか、大きな課題であると認識しています。

「地域医療構想の実現」は、病床の機能分化を推進し、効率的な医療提供体制を実現するための取り組みです。「地域医療構想の実現」には、何といっても、各病院が機能分化に即した医療を提供することが重要で、ここにスペシャリストである専門看護師や認定看護師、そして人材・資材・資金・情報を有効活用し、幅広い視野で組織を管理する認定看護管理者の活躍が期待されます。大学院医学系研究科看護学専攻には、現在、看護研究コース・専門看護師コースの２つのコースがあり、修了生の皆さんは、がん看護専門看護師、急性・重症患者看護専門看護師・老人専門看護師・認定看護管理者として、それぞれの場所で、地域医療を支える核として活躍しています。今後は、修了生の皆さんと協働した研究成果の社会実装を実現していくことで、スペシャリストを社会に送り出したアカデミアとしての責務を果たしていく必要があると考えます。また、「地域医療構想の実現」

には、地域包括ケアシステムが機能することが大前提です。看護学科が開設当初より基盤としてきた保健師・看護師の統合教育の成果が結実する時を迎えたと言えます。卒業生たちが、病院から住み慣れた地域への架け橋となって活躍してくれることを期待しています。加えて、医療DXの推進も欠かせないピースになることは間違いないでしょう。まずは、医学院医学系研究科看護学専攻のカリキュラムにおいて、リアルワールドデータを中心とするデータサイエンスに関する基本的知識を修得するための科目設置を検討していく必要があると考えます。

「タスク・シフト／シェアを含めた医師・医療従事者の働き方改革の推進」で鍵となるのは、特定行為研修修了者です。厚生労働省は10万人超の特定行為研修修了者を目指すと明言しており、そのターゲットがジェネラリストであることは自明の理です。こうした観点に立てば、これからのジェネラリストには特定行為を必須で求められる時代も来るかもしれません。特定行為はその名の通り、“行為”であり“技術”です。ただし、時にヒトの生命に直接的にかかわる可能性のある“行為”であり“技術”であることも事実です。ジェネラリストには、これまでにも増して、専門基礎科目や病態生理学に関する高度な知識のもとでの正確な判断力が必要となります。看護基礎教育課程を担う看護学科の教育の在り方においても、時代の要請に応じたドラスティックな変革が求められているのかもしれません。看護学科の教育に先立ち、大学院医学系研究科看護学専攻では、特定行為を修得するためのプログラムの検討に着手し始めました。今後は、このプログラムを看護基礎教育課程とも連動性をもったものへと発展させていくことも視野に入れておく必要があると認識するところです。

これからの看護学科、大学院医学系研究科看護学専攻の進む道は、決して平坦ではないでしょうし、時に逆風に立ち向かわなければならない局面もあるかもしれませんが、私たちはこれまでに培ってきた30年間の歴史があり、私たちはこの歴史を叡智として使うことができます。あらゆる分野のルールや前提が変わり、過去の常識が通用しない時代の変化の中で、看護学科、大学院医学系研究科看護学専攻は、“変わらないこと”と“変えるべきこと”を見極めつつ、柔軟な思考と実効性のある行動力をもって、歴史というタペストリーを刻んでいきたいと考えます。

４．30周年記念看護フォーラム

看護学科30周年を記念して、「看護の未来を共に考える～看護の未来人財へのメッセージ」と題した看護フォーラムを開催しました。

１．開催概要

看護フォーラムは、対面およびオンラインのハイブリッド形式で開催しました。オンラインを併用したことで、遠方の方も参加することができ、好評でした。参加者は、会場92名、オンライン50名、計142名でした。また、看護学科同窓会「桜樹会」と協働し、令和６年度定例総会を同日開催したことで、多くの同窓生にもご参加いただくことができました。また、看護学科での研究・教育活動に携わってくださった多くの先生方が会場にお越しくださり、久しぶりの再会に懐かしい気持ちとともに、近況報告に花が咲きました。

２．記念式典・シンポジウム

看護学科30周年を祝う記念式典では、大分大学総括理事、大分大学医学部長、大分県看護協会長等の来賓の方々をお招きしました。シンポジウムでは、様々な場所、立場で活躍する５名の卒業生に、「看護の未来人財へのメッセージ」をいただき、看護の魅力・可能性を語り合いました。

看護学科30周年記念看護フォーラム　記念式典・シンポジウム　プログラム
１．開会の辞　　原田副学科長
２．式辞　　杉尾総括理事 猪股医学部長
３．来賓祝辞　　大戸大分県看護協会長
４．講話「看護学を学ぶということ」 三重野学科長
５．シンポジウム「看護の未来人財へのメッセージ」 座長：脇幸子教授
６．閉会の辞　　末弘副学科長

３．看護学科の魅力発信イベント

看護フォーラムの企画・準備には、これからの未来を担う看護学科の学生にも参加してもらい共に作り上げてきました。１～４年生の中からコアメンバーを募り、大学での学びを発信できるような準備を進めました。

看護学科の魅力発信イベント
✧看護学科のあゆみ
✧教員の研究紹介
✧学生の学習内容の紹介
✧進路相談コーナー
✧男女共同参画推進室（FAB)、女性医療人キャリア支援センター展示コーナー

また、会場設営や当日の運営に携わってくれる協力メンバーも追加で募り、全ての段階において学生が積極的に関わってくれました。当日は、学生によるポスター展示、学修内容の紹介、進路相談において、学生とこれから看護の道を目指す中高生とが活き活きと交流する様子が印象的でした。今回、看護フォーラムを通じて、看護学科が開設30周年を迎えたこと、これまでの教育の成果を様々な形で発信でき、多くの方々に知っていただく機会となりました。

＜参加者の声＞
✧その人らしく生きることができるための手伝いをし、支えることが看護師としての役割であることがわかりました。
✧看護学科での学びが様々なキャリアに広がり繋がるということに感銘を受けました。
✧様々な分野で社会に貢献している卒業生がキラキラしながら話をしていて、看護にはたくさんの魅力があるのだと感じました。
✧看護実践や教育現場に素晴らしい人材を輩出されていて、大分大学の魅力を感じました。

4．シンポジストからのメッセージ

1）大分大学医学部附属病院　副看護部長　畑中明子（1期生）

【大分大学医学部看護学科開設30周年に寄せて　－看護の魅力－】

看護学科開設30周年おめでとうございます。私は1期生として入学しましたが、あれから30年の月日が経ったと思うと感慨深いものがあります。私は、2012年にがん看護専門看護師となり、現在は大分大学医学部附属病院の副看護部長として勤務しています。看護学科や大学院での学びが私のキャリアの基盤となり、今もなお私を支えています。

長年看護師として勤務していますが、日々看護の奥深さを感じ、その魅力は尽きません。特に印象に残っていることの一つに、ある患者さんとの関わりがあります。患者さんは咽頭がんに対する放射線・がん薬物療法により、口内炎や吐き気等の身体的苦痛がありました。また、不安・不眠等の精神的苦痛もあり、自己効力感も低下していました。私はがん看護専門看護師として患者さんの辛さや症状体験の理解に努め、症状マネジメントを通してエンパワーメントできるように支援しました。医療チームとも協力して身体的・精神的苦痛の緩和に努めました。患者さんは治療を完遂でき、「今までは諦めてきたけど、大きな壁を乗り越えられました」とお話しされました。私は、試練を乗り越えた患者さんの力に感銘を受けました。患者さんは、数年後お亡くなりになりましたが、最期にお会いした際に「自分は幸せです。これも皆さんのおかげです」とお話されました。死を目前にして感謝を示される患者さんの強さや優しさに尊敬の念と深い感動を覚え、看護のやりがいや魅力を改めて感じました。

看護は人の生活や人生に深く関わり、様々な生き方や価値観に触れることを通して、人として成長できる仕事です。私は、看護のやりがいや魅力を多くの人に伝えられるよう、これからも尽力していきたいと思います。

2）大分県国東保健部　吉原喬樹（10期生）

【地域から健康を考えること】

大分大学医学部看護学科30周年おめでとうございます。フォーラムでお話させていただくという貴重な機会をいただきありがとうございました。

大学時代を思い返すと、看護を学ぶことはもちろん、部活、サークル、大学祭、休日の過ごし方など充実した生活を過ごすことができました。頼りになる先生方、先輩、後輩が多いのも大分大学の魅力の一つだな、と思います。忌憚なくいろいろ話せる同期がいるのも、私の財産になっています。

さて、現在、私は大分県の保健師として働いています。私が大切にしていることは「地域から健

康を考えること」です。大分県では少子高齢化がとても進んでいますが、そのような中「健康寿命日本一」を目指しています。それを実現するためには、高齢者の健康だけでなく、今後高齢者になる「働き世代」を健康で元気に過ごしてもらい、その状態のまま高齢者になってもらうこと、これがとても大事だと考えています。普段の活動に健康づくりのエッセンスを少し入れてもらう等、無理せず自然と健康になれる、そういった魅力ある地域を目指し、地域の強みや課題を分析し、計画を立て、実施、評価、さらに修正…を日々繰り返しています。保健師の魅力として、医療関係だけでなく、市町村、観光、商工等々、地域の様々な方たちとの繋がり、アイデア次第で様々な取り組みや心震える経験ができる、そんな看護のフィールドだと思います。

看護を志す学生さんへ、まずは、大分大学に入って、看護をしっかり学んでもらい、色々な経験をする中で、選択肢の一つとして保健師があれば幸いです。そして一緒に働くことができたらなお嬉しい。大分県の保健師、卒業生多いですよ！

３）東京科学大学病院（旧東京医科歯科大学病院）　クオリティ・マネジメント・センター　森脇睦子（１期生）

【看護の世界を探求しよう　～研究が描く新しい医療のかたち～】

現在、私は院内の診療の質等に関するデータ分析、改善活動支援、大規模データベースを使った看護管理や政策研究、学生教育等を行っています。

「なぜ看護に研究が必要なのか？」、それは健康や生活の質を改善する知識を生み出すため、そして専門家であるナースは、「患者ケアを決定する際に、最も優れた臨床的エビデンスを用いなくてはならない」からです。F.ナイチンゲールは、統計学、公衆衛生、病院管理に関する多数の功績があり、その中に英国陸軍の死亡率調査、病院死亡率調査があります。仮説を設定し緻密な調査・解析から、戦傷よりも回避可能な伝染病による死亡が高く、患者の過密状態と不衛生な環境が病気を蔓延させ死者を増加した事を明らかにしました。この結果が療養環境の整備、看護覚書や病院覚書の執筆、ナース養成の礎になっています。「看護に関する研究はいつから始まったのか？」。答えは、看護が確立する前からと言えます。

研究成果は、より良い医療提供に役立てられなければならず、社会実装につなげることがその一つです。2002年米国のAikenらは、ナースの不十分な配置は患者予後に影響することを明らかにしました。忙しい時、重症患者が多い時はナースを多く必要としますが、シフトを組む時にはわかりません。我々は、患者状態などからナース配置を日々判断できるプログラムを開発、特許出願、企業と共同開発に着手しました。このように、実臨床に活かすための仕組みや製品を作ることが社会実装につなげることであり、研究成果の活用になります。日常の看護活動の中に研究テーマが多数あります。必要なのは、好奇心と探求心です。若い力が医療や看護の歩みに繋がることを期待します。

４）国際交流基金インドネシア事務所　豊﨑佳奈子（17期生）

【看護学科30周年に寄せて】

大分大学医学部看護学科が30周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

大学での数多くの学びや思い出の中でも、特に印象に残っているのはフィリピンでの研修です。国際保健の魅力を肌で感じつつ、異なる文化や環境の中で必要とされる多角的

な視点や柔軟な対応力を学び、看護の本質についても深く考えさせられた貴重な経験でした。卒業後は、日本および東南アジア諸国で働きながら大学院等で公衆衛生や熱帯医学を学習し続けてきましたが、在学中の経験が今でも私を国際保健の道へと導き、職務に対する情熱を育んだと感じています。

現在はインドネシアで、主に海外で勤務する邦人の健康管理や産業保健に従事しており、EPA事業への支援等も通して微力ながらも諸外国と日本の架け橋になれるよう努力しています。制度や疾病構造をはじめ医療に関するあらゆる面が異なる当地において、看護の持つ力を再確認し、やりがいを感じる日々です。

グローバル化や技術革新の進展に伴い、看護師には高度な専門性や技術だけでなく、慧眼を養い高いリテラシーを持つことが求められます。看護師の役割も益々多様化していますが、どのような時代、環境だとしても、「人」に向き合いホスピタリティの精神をもって看護を提供するという本質は不変であることを信じてやみません。私は、今後も実践と理論を結びつけ、未来の看護人材にその精神や技術を継承することが先々の使命のひとつだと自負しています。

最後になりますが、看護学科のさらなるご発展と関係者の皆さまのご活躍、そして、看護学の未来を創る在学生や将来の学生の皆さまが自由闊達に学び大きく飛躍することを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

5）爪切り屋さん-人生最期まで歩き続ける足作り-　堀友美（16期生）

【「足作り」から人との繋がりを支える】

「なぜA氏は介護が必要になったのだろう」と疑問をもった時、ちょうど鷹のように伸びた足の爪が目に入りました。この爪が原因で歩けなくなり介護が必要になったのではないかと思い、フットケア（足の爪切り/タコ・魚の目ケア）で起業する、と決意。

フットケアに馴染みのない地元（大分県別府市）で、どのように周知するかを考えました。別府は温泉のまちであり、温泉は誰もが裸足になる環境。その環境を活用することで「足をみる習慣」ができ、広がっていくのではないかと。また、市民が毎日入る風呂（温泉）でフットケアを行うことで、興味をもってもらえるのではないかと。

実際に、外部から閉ざされた個室ではなく、温泉の休憩所で意図的に誰もが見えるようにフットケアを行っています。

別府市の高齢化率は上昇しており、高齢者夫婦世帯、高齢者単身世帯も増加しています。だからこそ、地域で暮らす人同士が互いに支え合いながら生活する必要があり、同時に「孤立」も防ぐ必要があるのです。

フットケアで足を元気にする事によって、外出機会を増やす。そして人や社会と関わる中で自分の存在意義や社会的役割を見出す。単なるフットケアであるが、人と繋がるための背中を押したい。

今後は、高齢者介護施設への訪問サービス、若年層向けにフットケアサロン開設（予防活動）、在宅関連事業所への教育にも力を入れて活動したいと考えています。

編集後記

看護学科30周年記念事業に向けて、2023年4月に企画ワーキングが発足しました。14回にわたるワーキングでは、まず、10周年、20周年の記念事業の資料を辿る中で、懐かしさとともに30年間積み上げられ、発展してきた重厚な年月をかみしめるとともに、さらなる未来に向けて看護学科はどう発展していくのかを話し合いました。そして激動する社会の中での社会のニーズや期待に応えるべく、辿り着いたのが、「未来への継承・発展」「大学の外に向けての発信」です。2023年8月から企画書を練り、10月には学科会議で審議し、2024年3月から本格的に実働開始となり、まさに怒涛の日々でした。

看護学科30周年記念事業の趣旨

看護学科は平成6(1994)年に開設され、令和6(2024)年で30周年を迎える。開学以来、保健師教育および看護師教育を統合した看護学学士課程教育を継続して行い、これまでに1,763名の卒業生を輩出した。卒業生の多くは、医療や行政はもとより、教育研究、国際医療など様々な分野や場で活躍している。中には、所属組織の管理運営を担う者、地域の看護ニーズに対応し起業する者もおり、人々の健康と看護の質向上に大きく貢献している。

今、日本を含め世界は、地球環境の変化や新興感染症の出現、情報科学技術の急速な発展等により、社会構造や産業構造が劇的に変化している。不確実な未来にむけて、どのような看護が求められ、どのような看護人財を育成することが重要であるのか問われている。

そこで、30周年記念事業においては、看護学科を共に創り築き上げてきた卒業生とともに看護を語り、社会が変貌する中でも、病を癒し、健康をまもる看護の本質を見出したい。事業としては、「看護学科30周年記念看護フォーラム」の開催と「看護学科30周年記念誌」の作成に取り組む。

「看護学科30周年記念看護フォーラム」は、看護学科のさらなる発展を目指し、看護の未来人財となる高校生・中学生のほか、市民の方々、看護学科の教育を支えてくださっている地域の医療・介護機関や行政機関等の専門職、同窓生を対象に、教員と卒業生が看護を語り、看護の魅力・可能性についてメッセージを伝える内容でした。メインのシンポジウムでは、5名の卒業生とともに看護の魅力と可能性について考えました。卒業生の言葉は、人々の暮らしや人生と触れ合うことの重要性、あきらめずにやり遂げようとする意思をもった活動、ともに成長しつながり、創り上げる看護など情熱的に語られました。在学生による看護学科の紹介も学生生活や学びを楽しく伝えてくれました。

「看護学科30周年記念誌」は、ご寄稿いただいた皆様のお陰をもちまして、20周年以降の教育・研究活動を振り返りつつも、未来への継承と挑戦を描き、これからの看護学科の未来を創造していくための道標となるよう願いを込めて作製しました。

30周年記念事業を通して、一歩一歩、小さな一歩でも確実に進むこと、一歩進めば、看護の未来は必ず後からついてくるのだと30年を経て、気づかされました！ 中学生、高校生、在学生の皆さん、看護専門職、他専門職、地域の皆さん、全ての人が、未来人財となる人々です。大分大学看護学科の未来は無限大！であり、本事業にご参加いただいたすべての方が前に進むパワーをもらえるものになったのではないかと感じています。

末筆ながら、卒業生および在学生の皆様、企画準備から支えていただいた総務第二係の皆様、写真撮影や資料提供などご協力いただいた総務課および学務課の皆様、小野高速印刷様に深く感謝いたします。

看護学科30周年記念事業ワーキング一同（文責　副代表　脇　幸子）

看護学科30周年記念事業ワーキング

代　表　三重野 英子
副代表　脇 幸子
看護フォーラム担当　簀河原 靖子、野上 龍太郎、佐藤 昂太朗
記念誌担当　大野 夏稀、阿部 世史美、折橋 隆三

大分大学医学部看護学科30周年記念誌
前進から革新へ

発行　令和７年１月20日
大分大学医学部看護学科
〒879-5593　大分県由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地
TEL（代表）097-549-4411
URL: https://www.med.oita-u.ac.jp/

印刷　小野高速印刷株式会社
〒870-0913　大分市松原町2丁目1-6
TEL 097-558-3444　FAX 097-552-2301
URL: https://www.ohp.co.jp/

※掲載されている各種資料・写真は、
デジタル化され当社内に保存しています。

春　桜と･･･

基礎看護学実習室

夏　新緑と･･･

秋　紅葉と･･･

玄関ロビー

冬　看護学科棟から見た雲海

OITA UNIVERSITY